

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（210）

「西南戦争を掘り、学ぶ」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

たき の かみ か や く せい ぞう しょ あと
滝ノ上火薬製造所跡
(鹿児島市稲荷町)

たか くま やま げき せん ち あと
高熊山激戦地跡
(伊佐市大口)

ち し ゃ が さ こ ほう る い あと ぐん
チシャヶ迫堡塁跡群
(霧島市牧園町)

いわ がわ かん ぐん ぼ ち
岩川官軍墓地
(曾於市大隅町)



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
(210)

滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡
チシャヶ迫堡塁跡群・岩川官軍墓地

二〇二一年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2021年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遠景（遺跡北側上空から 対岸：桜島）



石垣及び石積み遺構の検出状況



高熊山山頂（北西上空から 背後：伊佐市市街地）



遠景（南西側上空から 画面中央左の尾根付近 奥：霧島連山）



遠景（北側上空から 画面中央付近）

序 文

この報告書は、文化庁の国庫補助事業「西南戦争を掘り、学ぶ」に伴って、平成30年度・令和元年度・令和2年度に実施した滝ノ上火薬製造所跡、高熊山激戦地跡、チシャケ迫堡壘跡群、岩川官軍墓地の確認調査の記録です。

世界文化遺産に登録された旧集成館をはじめ、本県にはわが国の近代化を支えた産業遺産や軍事遺産が数多く存在します。

しかしながら、その多くは未調査で、詳細が不明のままとなっています。そこで、本事業は、幕末から明治初期の西南戦争関係遺跡の考古学的な調査を行うことで、遺跡の実態解明や再評価を行い、史跡指定等の適切な保護措置を講ずるための基礎資料を作成することを目的としています。また、発掘調査成果を用いた学校における授業支援や、地域等で講演会を行うことで、文化財の保存・活用、地域振興、郷土教育、郷土愛の醸成などに資することもねらいです。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たり御協力いただいた文化庁及び鹿児島市教育委員会、伊佐市教育委員会、霧島市教育委員会、曾於市教育委員会、調査地点・周辺の土地所有者の皆様、関係各機関、発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 前 迫 亮 一

報告書抄録

ふりがな	たきのかみかやくせいどうしょあと・たかくまやまげきせんちあと・ちしゃがさこほうるいあとぐん・いわがわかんぐんぼち						
書名	滝ノ上火薬製造所跡		高熊山激戦地跡		チシャケ迫堡塁跡群		岩川官軍墓地
副書名	「西南戦争を掘り、学ぶ」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第210集						
編集者名	湯場崎辰巳						
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811						
発行年月	西暦2021年3月						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市長村	遺跡番号					
たきのかみかやくせいどうしょあと 滝ノ上火薬製造所跡	かごしまし 鹿児島市 稲荷町	46201	201-127	31° 36′ 55″	130° 34′ 8″	確認調査 2018.11.5～2018.12.26	2,900	保存目的調査
たかくまやまげきせんちあと 高熊山激戦地跡	いさし市 おおくちまきのうじ 大口木ノ氏	46224	-	32° 5′ 28″	130° 36′ 55″	確認調査 2019.5.13～2019.6.7	200	保存目的調査
ちしゃがさこほうるいあとぐん チシャケ迫堡塁跡群	霧島市牧園町 いなりやう 三体堂	46218	218-533	32° 52′ 42″	130° 45′ 47″	確認調査 2019.11.1～2019.11.28	200	保存目的調査
いわがわかんぐんぼち 岩川官軍墓地	そおし市 おおくちまきのうじ 大隅町 岩川	46217	-	31° 35′ 39″	130° 59′ 27″	確認調査 2020.5.18～2020.6.12	200	保存目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構		主要な遺物		特記事項	
たきのかみかやくせいどうしょあと 滝ノ上火薬製造所跡	生産遺構	近世・近代	石垣、石積み遺構、 導水路、排水路		陶器、瓦、埴			
たかくまやまげきせんちあと 高熊山激戦地跡	戦跡遺構	明治10 (1877) 年	堡塁跡9基		銃弾(エンフィールド銃7点・スナイドル銃7点・ ツナール銃1点・不明1点)・薬莢4点・鉄製品・ 鉦・古銭		伊佐市指定文化財 (昭和53.10.1)	
ちしゃがさこほうるいあとぐん チシャケ迫堡塁跡群	戦跡遺構	明治10 (1877) 年	堡塁跡7基		-			
いわがわかんぐんぼち 岩川官軍墓地	墓地	明治10 (1877) 年	墓石79基・残欠7基		古銭		曾於市指定文化財 (昭和49.3.8)	

要約

【滝ノ上火薬製造所跡】

薩摩藩は、火薬製造の本局として文政年間(1818～1831年)に滝ノ上火薬製造所を設立した。稲荷川の水流を利用した直径4mほどの水車を設置し、硝石や硫黄、木炭を粉末にして火薬を製造していた。平成5(1993)年の「8・6水害」で、残存していた水路等が流失したと考えられていたが、今回の確認調査で、当時の石垣や石積み遺構、導水路が広く残存していることが判明した。

【高熊山激戦地跡】

明治10(1877)年の西南戦争の大口の他戦の際には、辺見十郎太が指揮する雷撃隊が坊主石山に、池辺吉十郎指揮する熊本隊が高熊山に陣を構えていた。確認調査では、現存している堡塁跡(塹壕)の構造を把握することができたほか、銃弾や薬莢も出土した。また、文献史料に残る戦闘状況と調査成果がおおよそ一致した。

【チシャケ迫堡塁跡群】

明治10(1877)年の西南戦争では、政府軍と西郷軍は、牧園(日踊郷)で2度の戦闘を行っている。1度目は、7月1日～7日に西郷軍が牧園一帯に陣を築き、政府軍と対峙している。2度目は宮崎県延岡の可愛岳を突破した西郷軍が鹿児島に突入する直前の8月30日に、笠取峠で激しい銃撃戦を展開している。確認調査では、7月・8月の戦闘の時に構築された300基以上あるとされる堡塁跡のうち、チシャケ迫に位置する堡塁跡7基の調査を行った。

【岩川政府軍墓地】

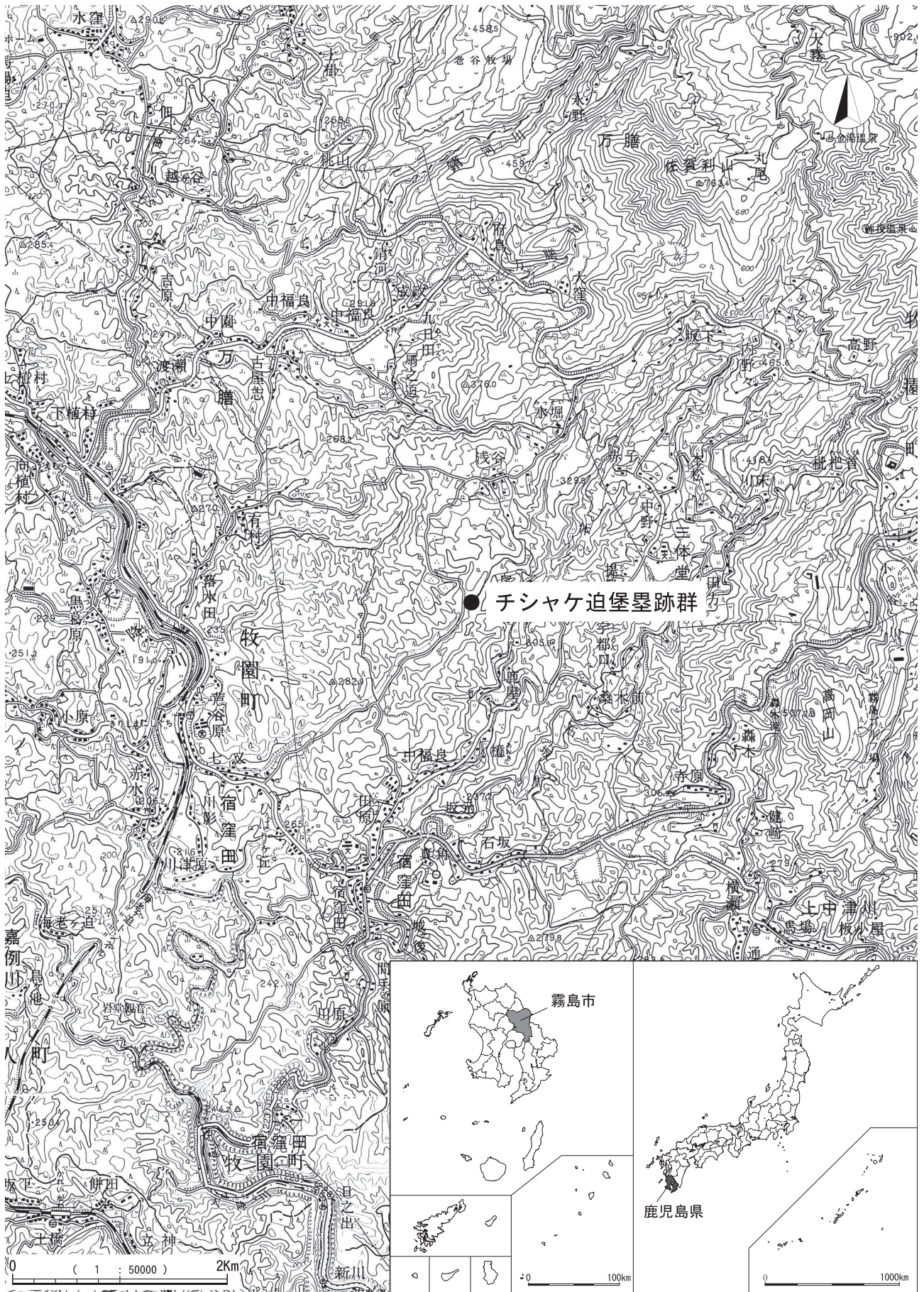
岩川の政府軍墓地は、西南戦争で亡くなった政府軍の戦死者を埋葬した墓地であり、陸軍大尉山形照方、少尉奥田政実、少尉試補林為隆など79基の墓石と残欠7基が存在している。墓石はすべて天草下浦石(砂岩)製である。調査では、現在の姿は当時のものでなく、改変(整備)をうけていることが判明した。さらに、当時の造営面を明らかにし、2基の墓坑の可能性のあるプランを確認した。また、東に1.5kmほど離れた薩軍の墓の測量などを行い、今後の検討資料を蓄積することができた。



滝ノ上火薬製造所跡 位置図 (1:25,000) (国土地理院 1 : 25,000 地形図『鹿兒島北部』改変)



高熊山激戦地跡 位置図 (1:50,000) (国土地理院 1:50,000 地形図『大口』改変)



チシャケ迫堡壘跡群 位置図 (1:50,000) (国土地理院 1:50,000 地形図『霧島山』改変)



岩川官軍墓地 位置図 (1:50,000) (国土地理院 1:50,000 地形図『岩川』『末吉』改変)

例 言

- 1 本書は、鹿児島県が文化庁の補助を受け、平成30年度・令和元年度・令和2年度に実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、「西南戦争に掘り、学ぶ」事業に伴う滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡壘跡群・岩川官軍墓地の発掘調査報告書である。
- 2 滝ノ上火薬製造所跡は鹿児島県鹿児島市稲荷町、高熊山激戦地跡は鹿児島県伊佐市大口木ノ氏高熊、チシャケ迫堡壘跡群は鹿児島県霧島市牧園町三体堂チシャケ迫、鹿児島県岩川官軍墓地は鹿児島県曾於市大隅町岩川に所在する。
- 3 発掘調査及び整理・報告書作成作業は、鹿児島県教育委員会が調査主体となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は平成30年度に滝ノ上火薬製造所跡、令和元年度に高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡壘跡群、令和2年度に岩川官軍墓地を実施し、整理・報告書作成作業は令和2年度に実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は、滝ノ上火薬製造所跡が「TKN」、高熊山激戦地跡「TKY」、チシャケ迫堡壘跡群は遺物がなく、岩川官軍墓地は古銭のため、用いていない。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。なお、基準杭打設は、(有)ジバング・サーベイ (H30・R1)、(株)埋蔵文化財サポートシステム (R1) に、高熊山激戦地跡の地形測量・遺構配置図作成を(有)ジバング・サーベイに委託して実施した。また、空中写真の撮影を、(株)ふじた (H30・R1)、(有)スカイサーベイ九州 (R1・R2) に委託した。
- 11 遺構の埋土や土器の色調、土層断面の土色は『新版標準土色帖』(1970年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に基づく。
- 12 遺構図等の作成・トレースは、湯場崎と橋口が整理作業員の協力を得て行った。なお、赤色立体地図は、アジア航測(株)に委託した。
- 13 出土遺物の実測・拓本・トレースは、湯場崎が整理作業員の協力を得て行った。なお、遺物実測の一部は(株)島田組に委託した。
- 14 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて、横手が行った。
- 15 文献史料の調査・判読は、浅田・宮崎が行った。また、尚古集成館松尾千歳館長に指導・助言をいただいた。
- 16 本書の編集は、湯場崎が担当し、執筆の分担は次のとおりである。
第1・2章 湯場崎 第3章 湯場崎
第4章 湯場崎・宮崎 第5章 湯場崎・宮崎
第6章 湯場崎 第7章 湯場崎
- 17 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

本書に用いた名称の考え方は以下のとおりである。

- 1 西郷軍
各研究や文献史料では、薩軍と西郷軍・賊軍・反乱軍等がある。本書では、薩摩藩士を中心とする私学校徒以外にも、旧日向国の高鍋隊等や熊本県の熊本隊等、大分県の中津隊等、九州外からも参加していることから、西郷軍を用いることとした。
- 2 政府軍
官軍の呼称もあるが、戊辰戦争のような諸藩中心の軍でなく、明治5(1872)年の徴兵令によって組織された軍隊として機能していることから、政府軍を用いることとした。
- 3 高熊山激戦地跡及び笠取戦跡の遺構名
・ 堡壘

文献資料	主体	名称			
		堡壘	胸壁	壕壘	賊壘
「征西戦記稿」	官軍	堡壘	胸壁		
「英国銃隊練法」	英国	胸壁			
「工兵操典 封壕之部」	官軍	堡壘			
「熊本鎮台戦闘日記」	官軍	凸角堡			
「塹溝堡築設教法略則」	官軍	塹溝堡			
「戦袍日記」	古閑俊雄	堡壘	守壘	壘壁	
「軍事小典」	オランダ	堡壘			

上記が西南戦争前後における歩兵用小規模施設の名称である。当時も様々な名称が使われている。塹壕や台場は、歩兵用小規模施設とは一線を画すことから、本書では歩兵用小規模施設を堡壘とした。

- 4 各遺構や遺物の部位名称、計測部位については、必要に応じて、各章の第3節にて記載している。

本文目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言・凡例

第1章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯と事業内容	1
第2節 調査体制	1
第3節 事業経過	2
第4節 整理作業・報告書作成経過	2

第2章 西南戦争の概要と各県の関連遺跡

第1節 西南戦争の概要	3
第2節 西南戦争関連遺跡の調査状況	4
第3節 鹿児島県の西南戦争関連遺跡の調査及び選定基準	6
第4節 鹿児島県の西南戦争関連遺跡の現況状況	6

第3章 滝ノ上火薬製造所跡

第1節 遺跡の位置と環境	15
第2節 調査の方法	26
第3節 層序	26
第4節 滝ノ上火薬製造所跡の調査成果	26

第4章 高熊山激戦地跡

第1節 遺跡の位置と環境	39
第2節 調査の方法	45
第3節 堡塁の分類	45
第4節 高熊山激戦地跡の調査成果	46

第5章 チシャケ迫堡塁跡群

第1節 遺跡の位置と環境	59
第2節 調査の方法	65
第3節 層序及び堡塁	65
第4節 チシャケ迫堡塁跡群の調査成果	66

第6章 岩川官軍墓地と関連遺跡（薩軍の墓）

第1節 遺跡の位置と環境	73
第2節 調査の方法	78
第3節 層序	78
第4節 岩川官軍墓地の調査成果	81

第7章 総括

第1節 滝ノ上火薬製造所跡	93
第2節 高熊山激戦地跡	95
第3節 チシャケ迫堡塁跡群	97
第4節 岩川官軍墓地と薩軍の墓	98
第5節 西南戦争関連遺跡の現状と課題	103
写真図版	105

挿図目次

滝ノ上火薬製造所跡 位置図 (1:25,000)	
高熊山激戦地跡 位置図 (1:50,000)	
チシャケ迫堡壘群跡 位置図 (1:50,000)	
岩川官軍墓地 位置図 (1:50,000)	
第 1 図 西南戦争関連戦地図 ……………	8
第 2 図 西南戦争関連史跡・遺跡位置図 (1) ……………	13
第 3 図 西南戦争関連史跡・遺跡位置図 (2) (鹿児島市) ……………	14
第 4 図 滝ノ上火薬製造所跡 周辺地質分類図 (鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変) ……	15
第 5 図 滝ノ上火薬製造所跡 周辺遺跡位置図 ……	18
第 6 図 大正 4 年 滝ノ上火薬製造所 周辺地形図 (1:50,000・『鹿児島』改変) ……………	22
第 7 図 銃薬方 (武雄市歴史資料館蔵) ……………	23
第 8 図 銃薬製造所図 (東京大学史料編纂所蔵) ……	24
第 9 図 瀧ノ上御所所有地字絵図 (東京大学史料編纂所蔵) ……………	25
第 10 図 滝ノ上火薬製造所跡 調査範囲図 ……………	27
第 11 図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区 1・2 全体図 ……	29
第 12 図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区 1 実測図 ……	30
第 13 図 滝ノ上火薬製造所跡 排水路断面図 ……	31
第 14 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 2 石垣実測図 ……………	32
第 15 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 3 導水路実測図 ……………	33
第 16 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 4 導水路実測図 ……………	33
第 17 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 5 石垣実測図 (左①・右②) ……………	34
第 18 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 5 石垣写真 ……………	34
第 19 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 6・7 位置写真 ……………	34
第 20 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 6 写真 ……	34
第 21 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 7 写真 ……	35
第 22 図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 8 写真 ……	35
第 23 図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区 2 導水路実測図 ……………	35
第 24 図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区 3 全体図 ……	36
第 25 図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区 3 導水路実測図 ……………	37
第 26 図 滝ノ上火薬製造所跡 出土遺物 ……………	38
第 27 図 高熊山激戦地跡 周辺地質分類図 ……………	39
第 28 図 高熊山激戦地跡 周辺遺跡位置図 ……………	42
第 29 図 明治 35 年高熊山激戦地跡 周辺地形図 (1:50,000・『大口』改変) ……………	44
第 30 図 堡壘部位名称及び計測箇所 ……………	45
第 31 図 高熊山激戦地跡 遺構配置図 及び遺物出土状況図 ……………	47
第 32 図 高熊山激戦地跡 堡壘 2 号～7 号遺構配置図 ……………	48
第 33 図 高熊山激戦地跡 堡壘 1 号実測図 ……………	49
第 34 図 高熊山激戦地跡 堡壘 2・3 号実測図 ……	49
第 35 図 高熊山激戦地跡 堡壘 4 号実測図 ……………	49
第 36 図 高熊山激戦地跡 堡壘 5・6 号実測図 ……	49
第 37 図 高熊山激戦地跡 堡壘 4・5 号トレンチ図 ……………	50
第 38 図 高熊山激戦地跡 堡壘 7 号実測図 ……………	51
第 39 図 高熊山激戦地跡 堡壘 8 号実測図 ……………	52
第 40 図 高熊山激戦地跡 堡壘 9 号実測図 ……………	52
第 41 図 高熊山激戦地跡 堡壘 9 号トレンチ図 ……	53
第 42 図 銃弾及び薬莢部位名・計測箇所 ……………	54
第 43 図 高熊山激戦地跡 出土遺物 (1) ……………	55
第 44 図 高熊山激戦地跡 出土遺物 (2) ……………	56
第 45 図 高熊山激戦地跡 堡壘 7 号復元状況 ……	57
第 46 図 チシャケ迫堡壘跡群 周辺地質分類図 (鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変) ……	59
第 47 図 西郷隆盛宿营地之趾 ……………	61
第 48 図 チシャケ迫堡壘跡群 周辺遺跡位置図 ……	62
第 49 図 明治 35 年チシャケ迫堡壘跡群 周辺地形図 (1:50,000・『栗野』『霧島山』改変) ……	64
第 50 図 チシャケ迫堡壘跡群 遺跡範囲図 (詳細) ……	65
第 51 図 チシャケ迫堡壘跡群 遺構配置図 ……………	67
第 52 図 チシャケ迫堡壘跡群 堡壘 1 号実測図 ……	68
第 53 図 チシャケ迫堡壘跡群 堡壘 2 号実測図 ……	69
第 54 図 チシャケ迫堡壘跡群 堡壘 3 号実測図 ……	70
第 55 図 チシャケ迫堡壘跡群 堡壘 4 号実測図 ……	71
第 56 図 チシャケ迫堡壘跡群 堡壘 5 号実測図 ……	72
第 57 図 チシャケ迫堡壘跡群 堡壘 6 号実測図 ……	72
第 58 図 チシャケ迫堡壘跡群 堡壘 7 号実測図 ……	72
第 59 図 皆越台場跡 (曾於市大隅町坂元) ……………	74
第 60 図 岩川官軍墓地 周辺遺跡位置図 ……………	75
第 61 図 墓石部位名称及び計測箇所 ……………	78
第 62 図 岩川官軍墓地の土層 ……………	78
第 63 図 岩川官軍墓地 周辺図 ……………	79
第 64 図 薩軍の墓 周辺図 ……………	80
第 65 図 岩川官軍墓地 配置図 (略図) ……………	82
第 66 図 岩川官軍墓地 墓石配置図 ……………	83
第 67 図 昭和 8 (1933) 年岩川官軍墓地 墓石配置図 ……………	83
第 68 図 岩川官軍墓地 ST1・3・7・38・69 実測図 及び拓本 ……………	84
第 69 図 岩川官軍墓地 トレンチ位置図 ……………	85
第 70 図 岩川官軍墓地 トレンチ 1 実測図 ……………	85
第 71 図 岩川官軍墓地 トレンチ 2 実測図 ……………	86

第 72 図	岩川官軍墓地 トレンチ 3 実測図	86
第 73 図	岩川官軍墓地 トレンチ位置写真	87
第 74 図	岩川官軍墓地 出土遺物	88
第 75 図	薩軍の墓 遺構配置図	89
第 76 図	薩軍の墓 墓石実測図	89
第 77 図	「銃薬方」(武雄市歴史民族館蔵 一部改変)	94
第 78 図	高熊山の戦い戦況図	95
第 79 図	坊主石山状況写真	96
第 80 図	坊主石山堡塁位置略図	96
第 81 図	堡塁模式図及び類別	98
第 82 図	牧園町堡塁位置図 (手嶋 2018 引用・一部改変)	99
第 83 図	チシャケ迫堡塁跡群周辺赤色立体地図	100・101
第 84 図	古写真① (JCII フォトサロン蔵)	102
第 85 図	古写真② (JCII フォトサロン蔵)	102

図版目次

巻頭図版 1	滝ノ上火薬製造所跡	
巻頭図版 2	滝ノ上火薬製造所跡	
巻頭図版 3	高熊山激戦地跡	
巻頭図版 4	チシャケ迫堡塁跡群	
巻頭図版 5	岩川官軍墓地	
図版 1	滝ノ上火薬製造所跡 古写真	105
図版 2	滝ノ上火薬製造所跡 調査区 1	106
図版 3	滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ 3・4・5・8	107
図版 4	滝ノ上火薬製造所跡 調査区 1・2 石垣・ 導水路	108
図版 5	滝ノ上火薬製造所跡 調査区 3 導水路	109
図版 6	高熊山激戦地跡 遠景	110
図版 7	高熊山激戦地跡 堡塁 1号～7号	111
図版 8	高熊山激戦地跡 堡塁 8・9号・ 堡塁 4号トレンチ・堡塁 7号トレンチ	112
図版 9	高熊山激戦地跡 堡塁 7号トレンチ・ 堡塁 9号トレンチ・弾痕跡・銃弾出土状況	113
図版 10	チシャケ迫堡塁跡群 遠景・堡塁 1号・ 堡塁 4号	114
図版 11	チシャケ迫堡塁跡群 堡塁 1号～7号	115
図版 12	チシャケ迫堡塁跡群 堡塁 1号・ 3号トレンチ	116
図版 13	チシャケ迫堡塁跡群 堡塁 2号トレンチ ・堡塁 5号トレンチ・堡塁 6号トレンチ	117
図版 14	岩川官軍墓地	118

図版 15	岩川官軍墓地	119
図版 16	岩川官軍墓地 墓石 (大尉・少尉補・軍曹・ 兵卒・軍夫)・トレンチ 1	120
図版 17	岩川官軍墓地 トレンチ 2・トレンチ 3	121
図版 18	岩川官軍墓地 トレンチ 3・薩軍の墓	122
図版 19	滝ノ上火薬製造所跡 出土遺物 (上)・ 高熊山激戦地跡銃弾 (エンフィールド 4～10 ・スナイドル 11～17・ツンナール 19)	123
図版 20	高熊山激戦地跡 出土遺物 (20～29) ・岩川官軍墓地 出土遺物 (30～32)	124

表目次

第 1 表	西南戦争関連年表	9
第 2 表	西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表 (1)	10
第 3 表	西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表 (2)	11
第 4 表	西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表 (3)	12
第 5 表	滝ノ上火薬製造所跡 周辺遺跡地名表	19
第 6 表	陶器 観察表	38
第 7 表	瓦 観察表	38
第 8 表	埴 観察表	38
第 9 表	高熊山激戦地跡 周辺遺跡地名表	43
第 10 表	高熊山激戦地跡 堡塁 観察表	57
第 11 表	高熊山激戦地跡 銃弾 観察表	58
第 12 表	高熊山激戦地跡 薬莢 観察表	58
第 13 表	高熊山激戦地跡 鉄製品 観察表	58
第 14 表	高熊山激戦地跡 釦 観察表	58
第 15 表	高熊山激戦地跡 古銭 観察表	58
第 16 表	チシャケ迫堡塁跡群 周辺遺跡地名表	63
第 17 表	チシャケ迫堡塁跡群 堡塁 観察表	72
第 18 表	岩川官軍墓地 周辺遺跡地名表 (1)	76
第 19 表	岩川官軍墓地 周辺遺跡地名表 (2)	77
第 20 表	岩川官軍墓地 基本層序	78
第 21 表	岩川官軍墓地 古銭 観察表	88
第 22 表	岩川官軍墓地 石碑刻字一覧 (1)	90
第 23 表	岩川官軍墓地 石碑刻字一覧 (2)	91
第 24 表	岩川官軍墓地 階級別墓石計測値	92
第 25 表	岩川官軍墓地 戦死場所・戦死日一覧	92
第 26 表	岩川官軍墓地 埋葬者階級別数	92
第 27 表	岩川官軍墓地 埋葬者所属別数	92
第 28 表	岩川官軍墓地 埋葬者出身県別数	92
第 29 表	大分県・鹿児島県堡塁形状内訳	97
第 30 表	岩川官軍墓地の整備状況	103

第1章 事業の経緯と経過

第1節 事業の経緯と事業内容

鹿児島県には、平成27年7月に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産を始め、日本の近代化の礎を築いた幕末から明治初期にかけての産業遺産・軍事遺産が数多く残っている。しかし、多くが未調査であり、詳細が不明瞭である。

これまで鹿児島県教育委員会は、平成27年度～平成29年度に「かごしま近代化遺産調査事業」（国庫補助事業県内遺跡発掘調査等事業として実施）で、旧薩摩藩の近代化遺産に光をあて、考古学的調査による実態解明を進めてきた（敷根火薬製造所跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡）。平成29年度には、『敷根火薬製造所跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（194）を刊行した。

平成30年度からは、近代化の波の中で勃発した西南戦争関連遺跡まで発展させ調査を行うこととし、国庫補助を活用して「西南戦争を掘り、学ぶ」事業を企画した。具体的には、本県に残る西南戦争関係遺跡の考古学的な調査を実施することで、遺跡の実態解明や再評価を行い、史跡指定等を視野に、適切な保護措置を講ずるための基礎資料を作成することとした。活用面では、発掘調査成果を用いた学校での授業支援や地域での講演会を行い、文化財の保存・活用、郷土教育などに資する目的とした。

発掘調査の実施にあたり、鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）と鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、歴史的価値や残存状況等を考慮し、関係機関とも協議を行い、調査対象地を選定した。

発掘調査を実施した遺跡は、平成30年度は、滝ノ上火薬製造所跡（鹿児島市）、令和元年度は、高熊山激戦地跡（伊佐市）、チシャケ迫堡跡群（霧島市）、令和2年度は、岩川官軍墓地の4か所である。なお、整理・報告書作成作業は、令和2年度に実施した。

第2節 調査体制

平成30年度調査体制（確認調査）

事業主体 鹿児島県
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 堂込 秀人
 調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼調査課長 大久保 浩二
 総務課長 高田 浩
 調査課第二調査係長 宗岡 克英

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 調査課第二調査係
 文化財主事 湯場崎 辰巳
 文化財研究員 橋口 梨絵
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主 査 新穂 秀貴
 調査指導 文化庁文化財第二課
 主任文化財調査官 山下 信一郎
 尚古集成館
 館 長 松尾 千歳
 広島大学
 准 教 授 水田 丞

令和元年度調査体制（確認調査）

事業主体 鹿児島県
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 前迫 亮一
 調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 野間口 誠
 調査課長 中村 和美
 調査課第二調査係長 宗岡 克英
 調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 調査課第一調査係
 文化財主事 湯場崎 辰巳
 文化財研究員 松山 初音
 （高熊山激戦地跡）
 文化財研究員 宮崎 大和
 （チシャケ迫堡跡群）
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主 査 新穂 秀貴
 調査指導 日本考古学協会・日本鉄砲史・
 軍事史学会会員 高橋 信武
 南九州縄文研究会会長 新東 晃一
 文化庁文化財第二課
 文化財調査官 藤井 幸司
 防衛省防衛研究所戦史研究センター
 二 等 陸 佐 齋藤 達志

令和2年度調査体制（確認調査、整理・報告書作成作業）

事業主体 鹿児島県
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 前迫 亮一
 調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 野間口 誠
 調査課長 中村 和美

調査課第二調査係長 横手 浩二郎
 調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 調査課第二調査係
 文化財主事 湯場崎 辰巳
 文化財研究員 宮崎 大和
 調査課第一調査係
 文化財主事 橋口 梨絵
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主査 新穂 秀貴
 整理指導 尚古集成館
 館長 松尾 千歳
 報告書作成指導委員会 令和2年10月7日ほか2回
 中村調査課長ほか5名
 報告書作成検討委員会 令和2年10月9日ほか2回
 前迫所長ほか5名

第3節 事業経過

1 滝ノ上火薬製造所跡（鹿児島市稲荷町）

確認調査は、表面積2,900㎡（調査対象）で、平成30年11月5日（月）から12月26日（水）（実働34日）にかけて実施した。なお、発掘調査中に、のべ75名の見学者があった。

平成30年11月1日（木）～2日（金）機材搬入・鹿児島市水道局との協議（2日）

11月5日（月）～9日（金）調査区①石垣精査，調査区③調査範囲設定，基準杭設置

11月12日（月）～16日（金）調査区③導水路検出

11月19日（月）～22日（木）石垣精査，調査区③調査

11月26日（月）～28日（水）調査区③試掘調査

12月3日（月）～7日（金）調査区①石垣実測，調査区②石垣精査，調査区③導水路 実測・落水口検出，文化庁山下信一郎主任文化財調査官調査指導（6日）

12月10日（月）～14日（金）調査区①・②石垣精査・トレンチ調査・遺構配置図測量，尚古集成館松尾千歳館長調査指導（10日）

12月17日（月）～21日（金）礎石検出，調査区②精査，調査区③精査，空撮（19日） 広島大学水田丞准教授調査指導（21日），県教育委員会東條広光教育長・文化財課寺原徹係長視察（20日）

12月25日（火）～27日（木）調査区埋め戻し

2 高熊山激戦地跡（伊佐市大口）

確認調査は、表面積約10,000㎡（調査対象）で、令和元年5月13日（月）から6月7日（金）（実働15日）にかけて実施した。

5月8日（水）・9日（木）高橋信武氏調査指導

5月13日（月）～17日（金）堡塁跡精査，基準杭設置

5月20日（月）～24日（金）堡塁跡精査，金属探知機による遺物（銃弾等）検出

5月27日（月）～29日（水）各堡塁トレンチ調査，周辺関連遺跡写真撮影，新東晃一氏調査指導（27日）

6月3日（月）～7日（金）各堡塁トレンチ調査，空撮（5日），文化庁藤井幸司文化財調査官調査指導（6日）

3 チシャケ迫堡塁跡群（霧島市牧園町）

確認調査は、表面積約5,000㎡（対象面積）で、令和元年11月1日（金）から11月28日（木）（実働17日）にかけて実施した。

11月1日（金）環境整備

11月5日（火）～8日（金）各堡塁精査，基準点設置

11月11日（月）～15日（金）各堡塁トレンチ調査，追加雇用者（11日），堡塁7号新発見（15日），手嶋正次氏来跡（11日・15日）

11月18日（月）～21日（木）各堡塁調査，追加雇用者オリエンテーション（19日），空撮（21日）防衛省防衛研究所戦史研究センター齋藤達志二等陸佐調査指導（21日）

11月25日（月）～28日（木）各堡塁トレンチ埋戻し

4 岩川官軍墓地（曾於市大隅町）

確認調査は、表面積約200㎡（調査対象）で、令和2年5月18日（月）から6月12日（水）（実働16日）にかけて実施した。なお、薩軍の墓も併せて測量調査を行った。

5月18日（月）～22日（金）トレンチ1調査，遺構配置図作成，墓石実測・拓本，曾於市教育委員会橋口拓也主事来跡（21日）

5月25日（月）～28日（金）トレンチ1・2調査，墓石刻字確認，薩軍の墓遺構配置図作成，曾於市教育委員会文化財係加塩秀樹係長・徳留隆二主事来跡（26日）

6月1日（月）～5日（金）トレンチ3調査，薩軍の墓精査，空撮準備

6月8日（月）～10日（水）トレンチ3調査，撤収作業，空撮（8日），トレンチ埋め戻し

第4節 整理作業・報告書作成経過

整理作業・報告書作成は、令和2年4月～12月にかけて埋文センターで行った。作業の経過については、月別に集約して記載する。

4月 図面整理，遺物分類

5月・6月・7月・8月 遺構図，遺物トレース等

8月25日 尚古集成館館長松尾千歳氏整理指導

9月 レイアウト・原稿執筆，写真選別

10月・11月 原稿執筆・遺物写真撮影

12月 原稿執筆・修正，遺物・写真収納

第2章 西南戦争の概要と各県の関連遺跡

第1節 西南戦争の概要

1 幕末から明治維新前後の鹿児島

文政年間（1818～1831年）に設立された銃薬方（滝ノ上火薬製造所）は、その後、集成館事業に組み入れられ、敷根火薬製造所や谷山作硝局などが設立される。薩摩藩は製鉄・ガラス・紡績だけでなく、火薬・弾薬製造においても日本有数の生産力を誇っていた。また、当時の主な陸戦武装であるスナイドル銃の銃弾を製造できたのは、明治8（1875）年まで国内では鹿児島だけであった。

2 西南戦争直前の状況

明治6（1873）年の征韓論争に、破れた西郷隆盛等は下野した。明治7（1874）年に、私学校が設立されると、県の主な役職を私学校生徒が占めるようになり、県内に反政府的な雰囲気が強まっていく。

鹿児島にある武器製造機や備蓄されている弾薬の存在を危惧した政府は、搬出命令を出し、明治10（1877）年1月下旬、武器弾薬等を密かに大阪へ移すために、赤龍丸を鹿児島港に入港させた。このような政府の動きを察知し、激怒した私学校生徒等は、1月29日夜から草牟田火薬庫を皮切りに、2月1日まで連日弾薬等の掠奪を行い、事態は緊迫の度を高めた。さらに、鹿児島出身警察官の潜入や西郷隆盛暗殺計画などが発覚したため、西郷隆盛や私学校幹部らは、率兵上京を決断することとなった。

3 西南戦争勃発

2月15日、西郷隆盛率いる私学校生徒を中心とした鹿児島士族約1万3千人は、政府に問い糾すことを掲げて陸路鹿児島を出発した。しかし、2月19日には「鹿児島賊徒征討」の詔勅が下り、西郷軍は賊軍となる。2月22日、熊本城を包囲した西郷軍は、一斉攻撃を開始する。しかし、政府軍の激しい抵抗や高い城壁に遮られ、城内に入り込むことはできなかった。遅れて到着した砲隊が砲撃したが、期待したほどの成果は得られなかった。その間に、政府軍の増援部隊が九州北部に上陸・南下した。両軍は、熊本城から15km以上離れた現在の玉名市、山鹿市、玉東町吉次峠、植木町田原坂、熊本市木留等で衝突し、約2か月間戦闘を繰り返した。

4 火薬製造所の処分

鹿児島では3月7日～12日、政府軍の艦隊が鹿児島湾に入り、集成館・滝ノ上火薬製造所の火薬・製造機等を搬出・処分している（3月10日には敷根火薬製造所が焼き払われている）。以後、西郷軍は銃弾不足に陥ることとなった。

5 熊本城開放から城東会戦、西郷軍人吉へ

3月18・19日に政府軍が八代に上陸、市街地を占拠し、熊本城に向かい北上を開始した。3月20日には田原坂

での戦いにおいて、西郷軍が敗退、4月14日に政府軍は熊本城を開放した。以後、西郷軍は熊本平野東部の大津から御船付近まで20kmに渡り戦線を展開するが、城東会戦で敗北し、矢部を経て、4月26日人吉に入り、人吉を拠点に薩摩・大隅・日向へ進軍することになる。その人吉も兵数と物量に勝る政府軍により、球磨川方面と江山方面から進攻をゆるし、6月1日に西郷軍は宮崎方面に撤退した。

6 鹿児島市での戦闘

政府軍は、4月27・28日にかけて別動第1旅団を中心に鹿児島に上陸し、5月4日には増援部隊も加わり、城山から新上橋、西田橋、武之橋などに陣地を築いた。また、城山の東部から現在の鹿児島駅一帯・多賀山や集成館にも陣を展開した。

西郷軍（振武・行進・奇兵の3隊）は、鹿児島奪還を目指し、鹿児島北部方面から兵を進め、5月5日、両軍は激突した。鹿児島を包囲する西郷軍は政府軍に激しい攻撃を加えたが、政府軍も軍艦の支援を受けるなどして応戦、一進一退の戦闘を約2か月間繰り返すこととなった。6月21日、鹿児島の政府軍は重富に上陸し、白銀坂から吉野攻撃を仕掛けた。6月25日には川内・宮之城に進出した別動第3旅団が鹿児島に到着し、6月26日までに、西郷軍は鹿児島城下一帯から撤退した。これらの戦闘で鹿児島城一帯は焼失した。政府軍は、西郷軍の支配地域で弾薬製造が行われていたため、5月14日に谷山作硝所を焼き払い、5月16日には多賀山から滝ノ上火薬製造所に対して砲撃を加え破壊した。

7 大口方面での戦闘

西郷軍において大口方面に派遣されたのは、辺見十郎太が指揮する雷撃隊と池辺吉十郎指揮する熊本隊であった。一時は、大口の山野まで進行した政府軍を水俣方面に敗走させ、久木野（水俣市）に兵を配置し、一進一退の攻防を繰り返していた。その後、人吉側で長期戦をもくろんでいた西郷軍本隊が6月1日に敗れたため、大口との境と、人吉からの2方向から攻撃を受けることになった。この合流地点が高熊山や坊主石山であった。高熊山には熊本隊、坊主石山には雷撃隊が陣を構え、鳥神岡にも味方を配置し、堡壘（塹壕）を築いて、政府軍の攻撃に備えていた。山中では抜刀による戦いで対抗し、激しい戦いが繰り返された。しかし、6月18日に坊主石山が陥落し、同20日、高熊山の熊本隊と雷撃隊本営の大口も総攻撃を受け陥落した。

8 牧園方面の戦闘

政府軍と西郷軍は、牧園（旧踊郷）で2度の戦闘を行っている。1度目は、6月に大口の戦闘で敗れ、7月1日に横川を制圧された西郷軍が牧園麓に陣を築き、7月1

日～7月7日までの約1週間に渡り、政府軍と対峙した。しかし、政府軍が国分に進行して、挟み撃ちに遭うことを恐れた西郷軍は、本格的な戦闘は行わず、大窪方面（霧島市霧島町）・財部（曾於市）に退却した。

2度目は宮崎県延岡の可愛岳を突破した西郷軍が鹿児島に突入する直前の8月30日で、笠取峠で激しい銃撃戦を展開した。この際に西郷隆盛等一隊は、踊郷宿窪田（現在の霧島温泉駅近く）の前田萬兵衛の家に陣取った。そこには、現在「南州翁宿営之趾」として、碑文が建てられている。当時地元では、西郷軍の7月の敗退を「踊の一度敗れ」、8月を「踊の二度敗れ」と呼んで残念がったと言われている。

9 大隅半島から宮崎へ

大隅半島では、6月末から7月24日に都城が陥落するまでの間に、激しい戦いが繰り返された。この時の政府軍の百引・大崎・岩川で戦死した者や、都城の病院で病死した者が岩川官軍墓地に葬られている。

西郷軍は、常態化した兵員不足と弾薬不足をどうすることもできず、都城も7月24日に放棄した。その後、宮崎の大淀川を盾に抗戦するが、長大で複雑な流域は守備できず、政府軍に次々に突破された。7月31日には西郷軍は、宮崎市からも撤退した。さらに、8月14日には、政府軍は延岡を占拠した。

10 和田越の決戦から可愛岳突破・鹿児島へ

8月15日延岡市北方で包囲された西郷軍は、延岡市街地への突破を目指し、和田越一帯で戦ったが、その日の午前には敗戦が決定的となった。西郷らは政府軍に取り囲まれてしまうが、8月18日に可愛岳の政府軍を突破し、三田井（高千穂）から吉松・横川へ向い、前述とおり笠取峠を突破しようとして失敗し、溝辺から蒲生を経て、鹿児島へ向い、9月1日鹿児島市に突入して城山一帯を占拠した。

11 城山陥落・西南戦争の終結

すぐに陸路と海路から政府軍部隊が次々と鹿児島に集結し、城山は幾重にも包囲され、市内との交通も完全に遮断された。9月10日前後には、全旅団が鹿児島に集結し、城山に籠もる西郷軍を攻撃することとなった。西郷軍は、兵力約300名、軍夫等合わせても400名程度で、小銃は150丁、砲は若干であった。政府軍の砲弾を避けるため、西郷隆盛らは横穴を掘り、過ごしたと言われている。

9月19日、政府軍の山縣有朋参軍は、9月24日に総攻撃を行うことを決定し、各旅団に達示を行った。9月21日には、西郷軍の河野圭一郎が西郷の助命と義挙の大義を弁明するため、山野田一輔を伴い、山を下り、政府軍に投降した。9月23日、政府軍の川村参軍と会見したが、川村参軍は、西郷に本日午後5時までに来る旨を伝えるよう山野田を城山に返すが、西郷隆盛は「回答の要なし」と告げ、最後の戦いとなることが確定する。

政府軍の総攻撃は、9月24日午前4時の号砲を合図に一斉に火蓋を切った。すぐに西郷軍の各所の陣地は沈黙し、洞窟前に整列した40数名の西郷軍は、西郷隆盛を囲んで岩崎谷口へ向かった。そこで、ついに西郷隆盛も力尽き、別府晋介により介錯され、その生涯を閉じることとなった。その後も、村田新八・辺見十郎太らは岩崎口の堡塁で奮闘したが、午前7時には陥落し、7か月におよぶ国内最大・最後の内戦は、かけがえのない幾多の人材と財産を失い、終結することとなった。

12 西南戦争後の動き

火薬製造所

政府軍により破壊された滝ノ上火薬製造所・敷根火薬製造所・谷山作硝局は、再建されることはなく、陸軍の武器・弾薬製造はその後、東京と滝ノ上火薬製造所の弾薬製造器械が移設された大阪に集約されていった。また、海軍は、東京都の目黒に火薬製造所を建設し、明治17（1884）年には、敷根火薬製造所の熟練工6名が招聘され、その技術が伝承された。

その他の集成館事業で建設された工場群は、西南戦争で、壊滅状態に陥り、再建されることはなかった。

戦没者の扱い

鹿児島には、各地に建立された西南戦争関連の招魂碑等の記念碑は、これまでに69か所確認されている。その中で、鹿児島市の祇園之洲（現在の祇園之洲公園）には官軍墓地が建設されている。しかし、鹿児島地の官軍墓地だったためか、あまり管理されず、早々に荒廃が進んでいたようである。その後、太平洋戦争や昭和26（1951）年のルーヌ台風でさらに荒廃・破壊が進むが、公園として整備される。昭和30（1955）年に地下納骨堂に合葬された後、昭和52（1977）年に「西南の役官軍戦没者慰霊塔」が建立され、現在に至っている。

一方、官軍墓地として現存する曾於市大隅町の岩川官軍墓地は、地元の人々によって整備され、荒廃も進むこともなく、祀られている。

第2節 西南戦争関連遺跡の調査状況

ここからは、熊本県・宮崎県・大分県の発掘調査状況と国あるいは県の史跡に指定されている西南戦争関連遺跡の現状を述べる。

1 熊本県

(1) 発掘調査

玉東町では、「国指定史跡」を目指して、発掘調査を行い『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』（玉東町教育委員会2012）を刊行している。戦場跡だけでなく、前線基地となった政府軍病院跡、墓地等を対象にして町内に残る9か所の調査を実施し、その調査成果を基礎に保存・活用のための資料を詳細に報告している。

玉名市では、高瀬官軍墓地の発掘調査を行い『高瀬官軍墓地』（玉名市教育委員会2018）を刊行している。官

軍墓地の数少ない発掘調査で、記録上の埋葬者に対して墓坑が少なく、全体的に配置したのではなく、一部の範囲で埋葬されている状況であることを報告している。調査成果をもとに、平成 27 (2015) 年に市の史跡に指定された。

熊本市では、熊本城と 2 つの西南戦争関連遺跡の発掘調査が行われている。熊本城では、各種整備に伴う発掘調査は行われているものの、西南戦争関連の遺構・遺物に関する報告書は少なかったが、『熊本城跡発掘調査報告書 1 - 飯田丸の調査 - 』（熊本城調査研究センター 2014）では、初めてまとまった形で西南戦争関係の遺物を報告している。

西南戦争関連遺跡では、西南戦争最大の激戦地である田原坂を中心とする第 1 ～ 6 次調査を行い、『田原坂 I ～ V 』（熊本市教育委員会 2011 ～ 2015）として刊行している。田原坂周辺の踏査や史料調査から陣地や戦闘状況、使用された火器が推定され、発掘調査成果も古図や文献史料と一致することや、銃弾の出土状況から、西郷軍は前装銃だけでなく、かなりの割合で後装銃であるスナイドル銃を使用していたこと等を報告している。

『東中原遺跡・山頭遺跡』（熊本市教育委員会 2016）では、多くの薬莢や雷管の出土状況をもとに、銃を発砲した場所が特定されている。そこから当時の戦闘の実態を明らかにし、政府軍と西郷軍陣地が近い位置にあったことを報告している。なお、この調査は、西南戦争関連戦跡を考古学的手法で発掘調査を行い、明確な遺構・遺物が伴って確認された初めての例である。

八代市では、『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』（八代市教育委員会 2002）で、被葬者名や所属・戦没日、出土遺物、墓地構造等を詳細に報告している。

（2）西南戦争関連遺跡の状況

熊本城（熊本市）

慶長 12 (1607) 年、茶臼山と呼ばれた台地に加藤清正が当時の最先端技術と労力を投じ、その後、400 年の歴史の間に数々の歴史の舞台となる名城熊本城を完成させた。明治 10 (1877) 年の西南戦争勃発直前の火災により、その大半を焼失する。昭和 8 (1933) 年には城域が史跡、宇土櫓等 13 棟の建造物が国宝に指定されたが、戦後の昭和 25 (1950) 年にそれぞれ史跡・重要文化財にあらためて指定され、昭和 30 (1955) 年には特別史跡に指定された。熊本城二の丸広場や高橋公園などでは西南戦争関係の石碑や銅像を見ることができる。

西南戦争関連遺跡（熊本市・玉東町）

西郷軍と政府軍の激戦の場となった田原坂をはじめ、横平山、半高山・吉次峠、砲台及び官軍墓地等が良好に残っている。平成 25 (2013) 年に、国の史跡に指定された。熊本市では、田原坂歴史資料館が整備され、玉東町では、各遺跡をフィールドミュージアムとして回遊し

ながら、理解が深まる史跡整備を行っている。

七本官軍墓地（熊本市北区植木町）

墓地は周囲を石垣で囲み、玉垣がめぐらしてある。軍人 276 名、軍夫 10 名、警察官 14 名の計 300 名が埋葬されている。大半は田原坂の戦の後、植木周辺や吉次、木留、辺田野、平野、滴水などで戦死した東京、大阪、名古屋、広島、熊本鎮台及び近衛歩兵の所属である。昭和 58 (1983) 年に、県指定の史跡となっている。その他、官軍墓地として、城ノ原官軍墓地・肥猪町官軍墓地（南関町）・陣内官軍墓地（水俣市）・下岩官軍墓地（和水町）・明德官軍墓地（熊本市）が、昭和 52 (1977) 年に県指定の史跡となっている。

2 宮崎県

（1）発掘調査

近年、西南戦争関連遺跡の分布調査を行っており、今後の調査成果が期待される。

（2）西南戦争関連遺跡の状況

県指定の史跡として、3 か所指定されている。

谷村計介旧宅（宮崎市）

谷村計介は明治政府の軍人として、明治 7 (1874) 年の佐賀の乱、明治 9 (1876) 年の神風連の乱、明治 10 (1877) 年の西南戦争と奮戦した。特に西南戦争において、陸軍伍長であった谷村計介は、熊本城に構えていた政府軍が西郷軍の包囲を受け落城寸前の時に、城外にいた政府軍との連絡を果たし、城の危機を救った。しかし、田原坂の戦いにおいて戦死している。昭和 8 (1933) 年に県の史跡に指定されている。旧宅跡は現在、「贈従五位陸軍伍長谷村計介誕生の地」と書かれた石碑と墓が建立されている。

南州翁寓居跡（延岡市）

明治 10 (1877) 年 8 月 15 日に延岡の和田越で政府軍に敗れた西郷隆盛は、戦いの後、北川村（現北川町）俵野の児玉家旧宅に身を寄せている。ここで、会議を開き西郷軍解散の命を發して、九州山地突破を敢行して鹿児島へ辿りついた。昭和 8 (1933) 年に県の史跡に指定されている。現在、児玉家旧宅は、現在西郷隆盛宿陣跡資料館として西郷の遺品などを展示している。

有栖川征討総督宮殿下御本営遺跡（日向市）

政府軍総司令官有栖川熾仁親王殿下が西郷隆盛ら率いていた西郷軍追討のため 8 月 25 日から 9 月 26 日までの 1 か月間滞在した本営跡である。有栖川熾仁親王殿下が滞在された貴重な生活空間で、政府軍・西郷軍の攻防を知る上での重要な拠点であり、当時の遺品が数多く残されている。昭和 11 (1936) 年に県の史跡に指定されている。

3 大分県

（1）発掘調査

大分県では平成 16 ～ 20 年度に西南戦争遺跡の分布調査を実施しており、県南部を中心に 866 か所の陣地跡を

確認し、その調査成果として、『西南戦争戦跡分布調査報告書』（大分県埋蔵文化財センター 2009）を刊行している。調査対象には、多稜形の堡壘群を含んでおり、戦闘記録と分布調査の成果から、具体的な戦闘経過を報告している。

（２）西南戦争関連遺跡の状況

分布調査で確認した台場は周知の埋蔵文化財包蔵地として文化財保護法上の対象地となっている。

4 その他（研究等）

西南戦争戦跡に残る遺構や遺物を対象に考古学的な研究と併せて、史料の検討を行い、戦跡と出土遺物からみた西南戦争の特徴を考察したものに、高橋信武氏の『西南戦争の考古学的研究』がある（高橋 2017）。

西南戦争の陣地跡の踏査状況や史料調査・遺物検討など多方面から考察したものに、高橋氏や有志等による『西南戦争之記録』がある（西南戦争を記録する会 2002・2003・2005・2008・2012）。

第3節 鹿児島県の西南戦争関連遺跡の調査及び選定基準

1 調査方法

文化財課では、各県の調査状況を踏まえ、平成 21 年に県内各市町村に対し、西南戦争関連遺跡等の現況調査を依頼した。提供された情報をもとに西南戦争関連遺跡の調査対象を抽出し、現地踏査を行った結果、16 市町の 100 件の報告がリストアップされた（第 2～4 表）。内訳は記念碑 69 件、陣地 13 件、戦場跡 5 件、墓地 5 件、建造物 4 件、休憩地 2 件、街道 1 件、その他 1 件である。

2 調査対象遺跡の選定基準

100 件の報告の中から、埋蔵文化財調査の対象地としての選定を行った。No は第 2～4 表の No と同一である。

- （１）記念碑 69 件のうち、西南戦争時と直接関係ない 68 件を除外した。ただし、No. 4 は西郷隆盛自決の地とされていることから残すこととした。
- （２）建造物のうち、戦闘と直接関係ないもの（No. 67, 74）を除外した。
- （３）休憩地 2 件（No. 55, 56）は、個人住宅で、残存状況も不良または消滅のため除外した。
- （４）墓地 5 件のうち、4 件（No. 11, 60, 69）は民有地のため除外した。なお、No. 76 も民有地であるが、No. 75 の岩川官軍墓地を調査するのに併せて、土地所有者の同意を得て調査することにした。
- （５）街道 1 件（No. 49）とその他（No. 61）は、戦闘と直接関係ないため除外した。
- （６）陣地 13 件のうち、政府軍本営と使用した建物が建て直されている 1 件（No. 93）を除外した。

以上の結果、残る 21 件（第 2～4 表 ■■■・第 2 図・第 3 図）を調査対象候補として検討することとなった。

埋文センターでは、調査対象地を選定するにあたり、文化庁や文化財課・候補所在地市町村と協議を行い、西南戦争勃発の契機となり、敷根火薬製造所跡の本局である滝ノ上火薬製造所跡、県内での激戦地であり市の史跡や地元の研究が行われている高熊山激戦地跡とチシャケ迫堡壘跡群、当時の姿に近いと考えられている岩川官軍墓地を調査することとなった。

第4節 鹿児島県の西南戦争関連遺跡の現況状況

本県における西南戦争関連の史跡は、西郷隆盛終焉の地となった城山、西郷をはじめ、西郷軍の志士たちが眠る南洲墓地など西南戦争終焉時期の史跡が有名だが、それ以外はあまり知られていない。ここでは、史跡に指定されている西南戦争関連遺跡の概要について記述する。なお、滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡壘跡群・岩川官軍墓地及び西南の役薩軍の墓については、各章を参照されたい。

鹿児島県内の西南戦争関連遺跡 史跡指定等の状況

国指定 2 件（城山、大口筋 白銀坂 龍門司坂）
県指定 3 件（鶴丸城跡、私学校跡石堀、南洲墓地）
市指定 5 件（西郷隆盛洞窟、西郷終焉の地、
西南の役高熊山激戦地跡、岩川官軍墓地、
西南の役薩軍の墓）

（１）城山

城山は、鹿児島市の中心に横たわる標高約 107 m のシラスからなる丘陵である。南北朝時代（1336～1392）に、上山氏が築城・居城した山城（上山城）であったが、江戸時代初めに、鹿児島城の後背地として、城の一部となっている。明治 10（1877）年西南戦争では、5 月・6 月の鹿児島市での戦闘の際に、政府軍が城山にも堡壘を作り、陣地を築いている。激しい攻防戦が繰り広げられたのを物語るように、現在でも堡壘跡が残っている。また、9 月 1 日には、西郷軍の本営となり、政府軍の総攻撃を受けて、同月 24 日に激戦の末に力尽き、西南戦争の終結地となった場所でもある。

昭和 6（1931）年、国の記念物（史跡）・天然記念物（植物）に指定された。一般人の立入禁止区域ともなっていたため、植物学上からも、日本南岸の固有の自然林を形成し、植物の宝庫と呼ばれ、南九州植物分布の縮図といわれている。城山公園として整備され、観光客はじめ、鹿児島県民・鹿児島市民の憩いの場として、利用されている。

（２）鶴丸城跡

慶長 7（1602）年、島津家 18 代当主家久によって造られ、正式名称は鹿児島城である。城山の地形が、翼を広げた鶴の形になっていることから鶴丸城と呼ばれている。天守閣を持たない居館群からなり、城は背後の城山まで取り込んでおり、中世の山城的な構成となっている。

明治6（1873）年に本丸が焼け、明治10（1877）年の西南戦争で、二ノ丸も焼けている。その後、旧制七高、鹿児島大学の敷地となり、現在は二ノ丸跡に県立図書館が建設され、本丸には黎明館が建設されている。昭和28（1953）年、石垣や堀などが、鹿児島県の記念物（史跡）に指定された。

（3）私学校跡石堀

明治6（1873）年、征韓論に破れ、鹿児島に帰郷した西郷隆盛は、一緒に帰郷した薩摩藩士のために、桐野利秋、篠原国幹、大山綱良などとともに、鹿児島城の厩跡に私学校を設立した。これを機に、明治9（1876）年頃には、県内すべての郷内に私学校が設立され、多くの青少年が学んだといわれている。西南戦争の際、私学校周辺は激戦地となり、当時の弾痕が石堀に残っており、戦闘の激しさを伝えている。昭和43（1968）年、鹿児島県の記念物（史跡）に指定された。現在、石堀の内側には、鹿児島医療センターが建設されている。

（4）南洲墓地

墓地のある場所は、藤沢山浄光寺（神奈川県）の末寺である時宗の浄光明寺があった跡地である。かたわらの南洲神社は、明治13（1880）年に建立されたが、昭和20（1945）年の戦災で焼失し、昭和32（1957）年に新たな社殿が造営されている。西南戦争後、政府軍は県令岩永通俊の願いを聞き、西郷隆盛以下40人を浄光明寺の境内に仮埋葬することを許可した。この他に、不断光院・草牟田・新照院の上・城ヶ谷の4か所に埋葬された。明治12（1879）年、有志により、鹿児島市内に仮埋葬された220余人の遺骨を知事の許可を得て、西郷以下の仮埋葬遺体とともに現在の位置に整然と改葬した。明治16（1883）年、薩摩・大隅・日向・豊後などの各地で戦死した遺骨も集められた。墓地には749基の墓石があり、西南戦争で敗れた西郷軍将士2,023名が眠っている。西郷隆盛を中心に、桐野利秋、篠原国幹、村田新八、辺見十郎太、別府晋介、桂久武、鹿児島初代県令大山綱良をはじめ、山形県などの各県の出身者の名も見られる。昭和30（1955）年に、鹿児島県の記念物（史跡）に指定された。

（5）西郷隆盛洞窟

西南戦争の最終決戦である城山攻防戦において、西郷隆盛は、明治10（1877）年9月19日から同月24日までの6日間、この洞窟で過ごしたとされ、最後まで西郷軍の指揮を執っていた重要な場所である。現在の洞窟の規模は、奥行き4m、間口3m、入口の高さは2.5mである。昭和49（1974）年、鹿児島市の記念物（史跡）に指定された。

（6）西郷隆盛終焉の地

城山に追い詰められ、西郷軍本陣は岩崎谷の洞窟へ移し、西郷隆盛は最後の6日間を過ごすことになる。9月24日未明、政府軍の総攻撃が始まり、西郷隆盛は、桐

野利秋、村田新八らとともに岩崎谷を下り、谷の入口付近で銃弾を受け、別府晋介に介錯を頼み自決した。明治32（1899）年には、西郷終焉之碑が建てられている。昭和49（1974）年、鹿児島市の記念物（史跡）に指定された。

（7）大口筋 白銀坂 龍門司坂

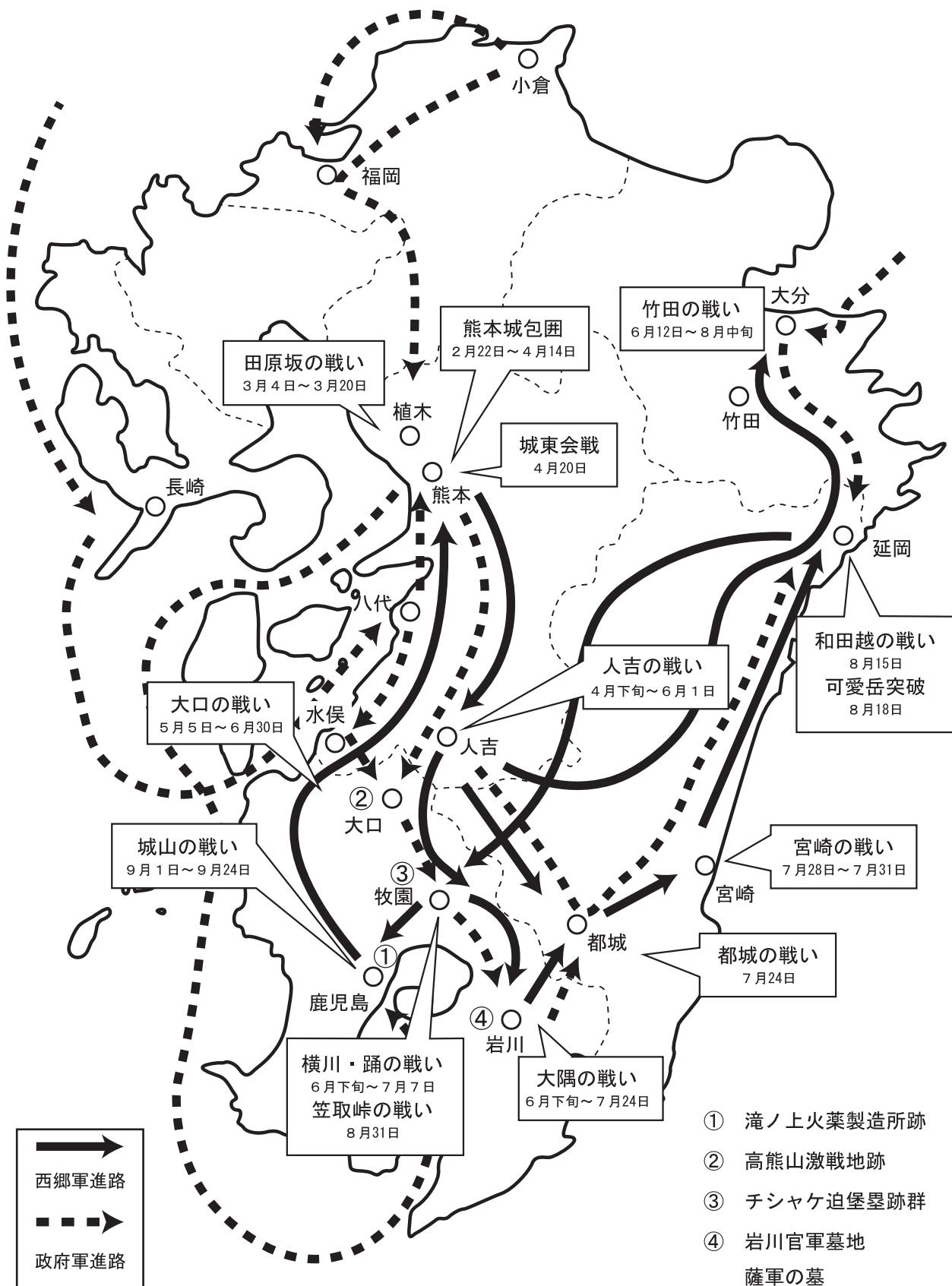
龍門司坂は、大口筋の一部で、寛永12（1635）年に整備され、100年後に石が敷かれている。石は近くの樋ノ迫山から切り出され、全長は1,500m余りだったと考えられ、現在は約500mが当時の姿で残っている。明治10（1877）年には、西郷隆盛の率いる西郷軍がこの坂道を通って熊本へ向かっている。薩摩街道大口筋 白銀坂 龍門司坂として、平成18（2006）年に国の記念物（史跡）に指定された。

（8）その他

鶴丸城（鹿児島城）に関連して、令和2（2020）年に、官民一体となった鶴丸城「御楼門」復元実行委員会により、御楼門が復元された。また、鶴丸城（鹿児島城）を含む1県9市の構成文化財『薩摩の武士が生きた町〜武家屋敷群「麓」を歩く〜』として、令和元年（2019）年には、日本遺産にも認定されている。

【引用・参考文献】

- 熊本城調査研究センター 2014『熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』熊本城調査研究センター報告書 第1集
- 玉東町教育委員会 2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町文化財調査報告 第8集
- 玉東町教育委員会 2016『史跡西南戦争遺跡保存活用計画書』玉東町編
- 玉名市教育委員会 2018『高瀬官軍墓地』玉名市文化財調査報告第39集
- 熊本市教育委員会 2011～2015『田原坂I～V』熊本市の文化財 第5・15・30・39・48集
- 熊本市教育委員会 2016『東中原遺跡・山頭遺跡』熊本市の文化財 第56集
- 熊本市 2018『特別史跡熊本城保存活用計画』
- 八代市教育委員会 2002『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』八代市文化財調査報告書 第16集
- 大分県埋蔵文化財センター 2009『西南戦争戦跡分布調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 44
- みやざき文化財情報HP
- 鹿児島県 1941『鹿児島県史』第3巻
- 鹿児島県教育委員会 2004『鹿児島県の近代化遺産』
- 鹿児島市教育委員会 2016『史跡めぐりガイドブック』
- 始良市 指定文化財・登録文化財一覧表及びHP
- 高橋信武 2017『西南戦争の考古学』吉川弘文堂
- 原口泉 2018『戦況図解西南戦争』サンエイ新書
- 松尾千歳 2017『西南戦争と集成館』尚古集成館紀要 第16号
- 西南戦争を記録する会 2002・2003・2005・2008・2012『西南戦争之記録』
- 学習研究社 1990『西南戦争【最強薩摩軍団崩壊の軌跡】』歴史群像シリーズ21



第1図 西南戦争関連戦地図（玉東町教育委員会 2012, 学習研究社 1990, 原口泉 2018 を参考に作成）

第1表 西南戦争関連年表

年月日				出 来 事	本報告関連遺跡	
西暦	元号	月	日			
1818 ～ 1831	文政	元 ～ 13		火薬製造の本局（銃薬方）として滝ノ上火薬製造所が設立	滝ノ上火薬製造所跡	
1848	嘉永	元		島津斉彬、綿火薬の製造研究	滝ノ上火薬製造所跡	
1849	嘉永	2		火薬製造法を洋式に改める	滝ノ上火薬製造所跡	
1853	嘉永	6		綿火薬の製造成功	滝ノ上火薬製造所跡	
1858	安政	5		谷山作硝局の設置（硝石不足を解決）	滝ノ上火薬製造所跡	
1863	文久	3		薩英戦争勃発。敷根火薬製造所が設立（蘭式→英式）	滝ノ上火薬製造所跡	
1868	慶応	4		戊辰戦争勃発（薩摩産の火薬を供給）	滝ノ上火薬製造所跡	
1868	明治	元		草牟田火薬庫を設立	滝ノ上火薬製造所跡	
1869	明治	2		版籍奉還に伴い、集成館・銃薬方・兵器方を廃止	滝ノ上火薬製造所跡	
1871	明治	4		廢藩置県に伴い、滝ノ上・敷根火薬製造所、谷山作硝局が政府所管となり軍の管理下へ	滝ノ上火薬製造所跡	
1872	明治	5		滝ノ上・敷根火薬製造所、谷山作硝局が陸軍所管へ	滝ノ上火薬製造所跡	
1876	明治	9		各地で不平士族の反乱が起こる（神風連の乱・秋月の乱・萩の乱など）		
1877	明治	10	1	下旬	武器弾薬を大阪へ移すため、赤龍丸が鹿児島入港	滝ノ上火薬製造所跡
			29		私学校生徒、草牟田火薬庫を襲撃。連日各地の火薬庫が襲撃される	滝ノ上火薬製造所跡
			15		西郷隆盛らの本隊（1・2番隊）が鹿児島を出発	
			19		政府が「鹿児島賊徒征討の詔」を発する 有栖川宮仁親王を征討総督として九州へ派兵	
			21		山縣有朋・川村純義を参軍に、野津鎮雄を第1旅団、三好重臣を第2旅団の司令長官に任命	
			22		熊本県士族池辺吉十郎ら西郷軍に呼応して挙兵	
			4		熊本城を包囲	
			4		田原坂の戦い開始	
			7		勅使柳原前光を伴った艦隊が鹿児島島の弾薬製造工場ほかを破壊・弾薬製造器機の搬出（～12日）	滝ノ上火薬製造所跡
			8		政府軍、集成館・滝ノ上火薬製造所の火薬を搬出及び処分（～9日）	滝ノ上火薬製造所跡
			10		春日艦、敷根湾へ、敷根火薬製造所を焼き払う	滝ノ上火薬製造所跡
			20		17日間の激戦のすえ、田原坂から敗退	
			14		黒田清隆率いる第1・2旅団が熊本城に入る	
			21		熊本城解放	
			21		西郷軍、本営の人吉移転を決定 十個大隊を、九隊へと再編成	
			27		政府軍、別働第1旅団を中心に鹿児島に上陸	
			28		西郷隆盛ら西郷軍幹部が人吉に到着（26日） 桐野利秋、熊本隊・雷撃隊を大口へ向かわせる	高熊山激戦地跡
			3		新鹿児島県令岩村通俊が赴任。4日には、第4旅団・警視1大隊、鹿児島に到着。政府軍、城山や甲突川沿い、城山東部（岩崎）から多賀山に布陣	
			4		山野（大口）で戦闘開始	高熊山激戦地跡
			5		政府軍・西郷軍が鹿児島市で激突	
			6		政府軍、牛尾川（大口）まで侵攻	高熊山激戦地跡
			10		西郷軍攻勢へ。政府軍、水俣方面へ敗走	高熊山激戦地跡
			14		政府軍、谷山（鹿児島市）へ進撃し、谷山作硝局を焼き払う	滝ノ上火薬製造所跡
			16		政府軍、多賀山より滝ノ上火薬製造所へ砲撃し破壊	滝ノ上火薬製造所跡
			26		政府軍、西郷軍を鹿児島城下一帯から駆逐	
			1		西郷軍、人吉を撤退	高熊山激戦地跡
			7		第3旅団、久木野（水俣市）占領	高熊山激戦地跡
			8		第3旅団、小川内（大口）占領	高熊山激戦地跡
			13		高熊山山頂に熊本隊が集結。宿舎建設、堡壘構築	
			3		別働第2旅団、山野（大口）占領	高熊山激戦地跡
			14		高熊山に熊本隊、坊主石山に雷撃隊・正義隊が陣取る	高熊山激戦地跡
			16		別働第2旅団、黒萩山に出軍 河泉山の西郷軍撤退	高熊山激戦地跡
			18		政府軍が攻撃開始。高熊山では熊本隊と第3旅団が交戦 坊主石山では雷撃隊と正義隊と別働第2旅団が交戦、坊主石山陥落	高熊山激戦地跡
			19		別働第2旅団、坊主石山から高熊山の熊本隊へ向け砲撃	高熊山激戦地跡
			20		第3旅団、高熊山へ進撃、高熊山占領 鳥神岡、大口陥落	高熊山激戦地跡
			1		西郷軍、横川から踊へ退却 政府軍、栗野の幸や恒次などから横川へ進撃	笠取戦跡
			2		加治木の西郷軍、第4旅団と交戦	笠取戦跡
			3		下植村の西郷軍守備隊が芦谷原へ後退 熊本隊が浅谷で政府軍と交戦 加治木の西郷軍は一部を小田越の守備に当て、主力は国分へ	笠取戦跡
			4		第3旅団の一部が下植村・有村・落水田まで進出、芦谷原の西郷軍と交戦	笠取戦跡
			6		政府軍、大窪・田口方面へ退却	笠取戦跡
			7		政府軍、横川・植村・万膳の三方向から踊へ進撃	笠取戦跡
			8		百引（鹿屋市輝北町）で戦闘、西郷軍勝利	岩川官軍墓地
11		荒佐野（大崎町）で戦闘、政府軍勝利	岩川官軍墓地			
12		假宿（大崎町）で戦闘、西郷軍勝利	岩川官軍墓地			
24		都城で敗退				
15		和田越の戦い（西郷軍最後の組織的戦闘）				
16		解散令が出され、半数が降伏				
18		可愛岳越えをして政府軍包囲網から脱出				
30		笠取峠で西郷軍と政府軍が交戦 西郷隆盛、芦谷原の前田万兵衛宅に陣取る	笠取戦跡戦跡			
31		西郷軍、笠取峠の突破を諦め、赤水を抜けて蒲生へ	笠取戦跡戦跡			
1		米倉の戦い、西郷軍が急襲して鹿児島城山を占拠				
24		城山陥落。西郷隆盛自刃。				

第2表 西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表（1）

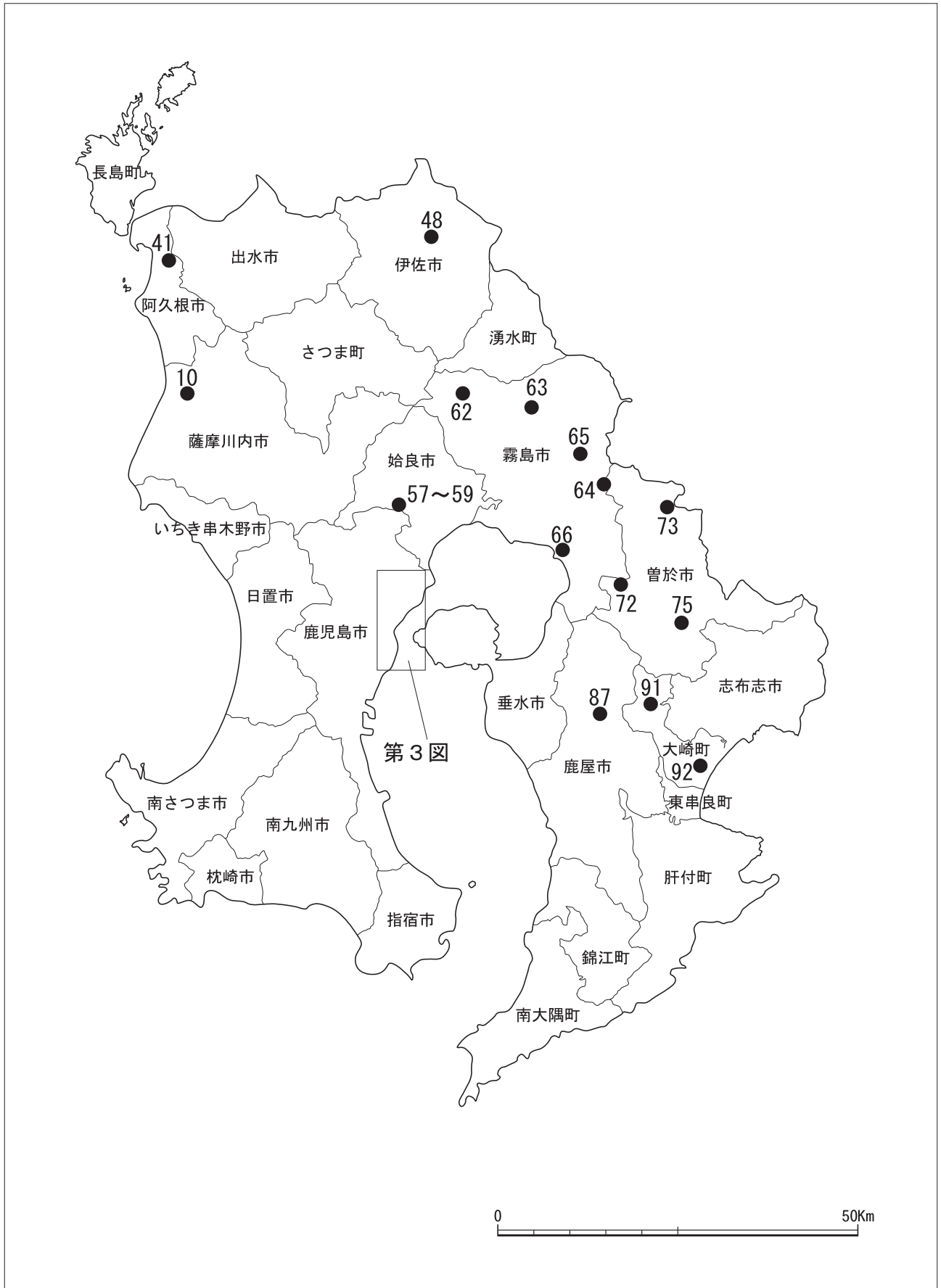
No	市町村	名称	所在地	種類	残存状況	指定	現況	所有	備考
1	鹿児島市	城山	城山町	陣地	良	なし	山林	民有地	夏陰城跡東南の上（1基）、城ヶ谷尾根頂上（2基）、城山尾根頂上（城山公園内）（3基）、岩崎谷尾根頂上（15基）に堡塁（塹壕）が残存する。
2	鹿児島市	西郷隆盛洞窟	城山町	陣地	良	市指定	公園	公有地	
3	鹿児島市	私学校跡石堀	城山町	建造物	良	県指定	宅地	民有地	
4	鹿児島市	西郷隆盛終焉の地	城山町	記念碑	良	市指定	その他	公有地	
5	指宿市	西南の役従軍戦没者招魂塚	山川山下町	記念碑	良	なし	墓地隣接地	団体所有	
6	南さつま市	招魂冢	加世田武田社付	記念碑	良	なし	護国神社境内		
7	南さつま市	招魂冢	坊津町坊 9024	記念碑	良	なし	地籍墓地	公有地	
8	南さつま市	招魂社	金峰町花瀬下之馬場	記念碑	良	なし	墓地横	集落共有地	
9	南さつま市	招魂冢	金峰町尾下麓公民館南隣	記念碑	良	なし	その他	集落共有地	
10	薩摩川内市	一条坂の戦い	陽成町一条坂 8568 番地付近	戦場跡	やや良	なし	山林	民有地	『川内市史』下巻
11	薩摩川内市	巡查殿墓	入来町浦之名	墓地	良	なし	墓地	民有地	
12	薩摩川内市	西南の役百年記念碑	西方町（西方寺付近）	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
13	薩摩川内市	招魂碑	陽成町宮小平 4650 番地	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
14	薩摩川内市	招魂碑	城上町今寺 866-4 付近	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
15	薩摩川内市	招魂碑	高城町西迫 1324 番地（市立高来小学校横手）付近	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
16	薩摩川内市	招魂碑	水引町 5339 番地（若宮神社境内内）	記念碑	良	なし	山林	公有地	
17	薩摩川内市	招魂碑	宮内町 1935 番地-2（みくに幼稚園駐車場内）	記念碑	良	なし	山林	民有地	
18	薩摩川内市	招魂碑	中郷町 6519 番地（諏訪神社境内内）	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
19	薩摩川内市	招魂碑	田海町中今村（中今村公民館内）	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
20	薩摩川内市	警修墓地	大小路町 48 番 37 号（泰平寺墓地内）	記念碑	やや良	なし	墓地内	公有地	
21	薩摩川内市	招魂塚	向田町 1139 番地	記念碑	良	なし	山林	公有地	
22	薩摩川内市	招魂碑	向田町 1139 番地	記念碑	良	なし	山林	公有地	
23	薩摩川内市	丁丑戦役五十年祭記念碑	向田町 1139 番地	記念碑	良	なし	山林	公有地	
24	薩摩川内市	忠魂碑	平佐町 3057-16	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
25	薩摩川内市	招魂碑	平佐町 3057-16	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
26	薩摩川内市	忠魂碑	中村町 7396 番地	記念碑	良	なし	雑種地	公有地	
27	薩摩川内市	招魂塚	百次町 998-6	記念碑	良	なし	山林	公有地	
28	薩摩川内市	招魂碑	高江町 534-2	記念碑	良	なし	境内地	民有地	
29	薩摩川内市	太平橋架橋碑	東開闢町 179	記念碑	良	市指定	宅地	公有地	
30	薩摩川内市	明治十年の役戦没者招魂碑	樋脇町塔之原 5338 番地	記念碑	良	なし	境内地	民有地	
31	薩摩川内市	魂乎歸来	入来町浦之名 寿昌寺跡	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
32	薩摩川内市	鬼哭碑	入来町浦之名 寿昌寺跡	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
33	薩摩川内市	招魂碑	東郷町斧淵 4675-4	記念碑	良	なし	宅地	公有地	10月東郷町戦没者追悼式
34	薩摩川内市	西南戦争供養塔	祁答院町上手 4309 番地（平国忠義氏宅左横山裾）	記念碑	良	なし	山林	民有地	
35	薩摩川内市	黒木招魂墓	祁答院町黒木（常永寺の裏山）	記念碑	良	なし	山林	公有地	
36	薩摩川内市	大村招魂墓	祁答院町下手（永福寺隣）	記念碑	良	なし	雑種地	集落共有地	
37	薩摩川内市	蘭牟田招魂社	祁答院町蘭牟田 138 番地（蘭牟田小学校校庭隣り）	記念碑	やや良	なし	雑種地	集落共有地	
38	薩摩川内市	慰霊塔	祁答院町下手（永福寺隣り）	記念碑	良	なし	雑種地	集落共有地	
39	薩摩川内市	招魂碑	里町里 1684-1・1684-2	記念碑	やや良	なし	公園	公有地	招魂碑は高さ 2m50cm の自然石の記念碑
40	薩摩川内市	招魂碑	下甌町手打 1312-1	記念碑	やや良	なし	雑種地	公有地	慰霊祭：毎年 10 月中旬 場所：大照寺 主催：下甌町手打区

第3表 西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表(2)

No	市町村	名称	所在地	種類	残存状況	指定	現況	所有	備考
41	阿久根市	陣之尾塁跡	多田山ノ口	陣地	不明	なし	丘陵	国有地他	阿久根市史, 埋セ調査
42	阿久根市	甲子・戊辰・丁丑戦役記念碑	波留戸柱	記念碑	やや良	なし	神社敷地	神社敷地	
43	阿久根市	戦亡招魂塚	波留戸柱	記念碑	やや良	なし	神社敷地	神社敷地	
44	長島町	十五社神社(唐隈) 下西南之役従軍記念碑	唐隈集落公民館	記念碑	やや良	なし	公園	集落共有地	『長島郷土誌』
45	長島町		小浜十五社神社境内	記念碑	やや良	なし	宅地	集落共有地	『長島郷土誌』
46	長島町		成川内伊勢神社境内	記念碑	やや良	なし	宅地	集落共有地	『長島郷土誌』
47	出水市	薩士十二人被斬首の地	上大川内六ヶ所 2750-57	記念碑	良	なし	牧場	民有地	『出水の文化財』
48	伊佐市	高熊山激戦地跡	大口木ノ氏字高熊	陣地	やや良	市	山林	公有地・民有地	『大口市郷土誌』 下巻
49	始良市	龍門司坂	字高倉 4970 番地先から, 木田字内祝儀 5077-3 番地先まで	街道	良	国指定	町道	公有地	平成 18 年 7 月 28 日付け, 国指定文化財
50	始良市	戦亡招魂之表	加治木町仮屋町 212-1	記念碑	良	無	神社境内	遺族会	
51	始良市	戦亡招魂表, 西南役記念碑	下名 1195-1	記念碑	良	なし	招魂社	公有地	『始良町郷土誌』
52	始良市	招魂塔	鍋倉 694-2	記念碑	良	なし	墓地	民有地	『始良町郷土誌』
53	始良市	従軍碑	鍋倉 694-2	記念碑	良	なし	墓地	民有地	『始良町郷土誌』
54	始良市	招魂石	平松 6198	記念碑	良	なし	墓地	民有地	『始良町郷土誌』
55	始良市	富田次兵衛宅	蒲生町上久徳字正孝庵原	休憩地	消滅	なし	水田	民有地	『蒲生郷土誌』
56	始良市	洲上休右衛門宅(質屋)	蒲生町上久徳字蛭子原	休憩地	やや良	なし	宅地	民有地	『蒲生郷土誌』
57	始良市	蒲生城跡	蒲生町久来字竜ヶ山	陣地	やや良	なし	山林	公有地・民有地	『蒲生郷土誌』
58	始良市	佐山峠	蒲生町久来字佐山	陣地	やや良	なし	峠	公有地	『蒲生郷土誌』
59	始良市	野川沢	蒲生町久来字野川沢	陣地	不良	なし	工業団地	民有地	『蒲生郷土誌』
60	始良市	反私学校派 4 名の墓	平松 6190	墓地	良	なし	墓地	民有地	『始良町郷土誌』
61	始良市	西郷隆盛の腰掛け石	下名 1118 瀬戸山十郎宅	その他	良	なし	宅地	民有地	『始良町郷土誌』
62	霧島市	古戦場跡(激戦地・塁)	横川町上ノ字鷹巣	陣地	やや良	なし	山林	民有地	『横川町郷土誌』
63	霧島市	笠取戦跡	牧園町宿窪田字笠取	陣地	不良	なし	山林	民有地	『牧園町郷土誌』
64	霧島市	西南戦争馬堀	霧島永水 馬堀	陣地	やや良	なし	山林	民有地	国分郷土誌編纂時は木が小さく, 藪であったが, 今では馬堀もはつきりしている。『国分郷土誌』
65	霧島市	古戦場(大窪)	霧島大窪字芹迫	戦場跡	やや良	なし	山林・水田	民有地	『霧島町郷土誌』
66	霧島市	敷根火薬製造所跡	国分敷根字彦田	建造物	消滅	なし	水田 畑 荒地	民有地	『国分郷土誌』『敷根火薬製造所跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡』(県埋セ 194)
67	霧島市	戦闘による刀傷の跡	福山町佳例川池田 1712	建造物	良	なし	宅地	民有地	『薩摩藩の天道 東目筋』
68	霧島市	丁丑戦亡之塚・殉忠碑	国分中央二丁目 金剛寺跡	記念碑	良	なし	畑・原野 墓地	公有地・集落共有地	
69	霧島市	西南戦争薩軍墓	霧島永水 馬堀	墓地	やや良	なし	山林	民有地	『国分郷土誌』
70	霧島市	明治十年之役招魂碑	牧園町宿窪田	記念碑	やや良	なし	なし	公有地	『牧園町郷土誌』
71	霧島市	南洲翁宿営之跡	牧園町宿窪田	記念碑	良	なし	宅地	民有地	『牧園町郷土誌』
72	曾於市	皆越台場跡	大隅町坂元	陣地	不良	なし	山林	民有地	『大隅町誌』
73	曾於市	十文字原西南の役激戦地跡	財部町	戦場跡	不良	なし	宅地	民有地	『財部町郷土史』
74	曾於市	落合家の辺見十郎太がもたれていた柱	末吉町岩崎内堀	建造物	不良	なし	宅地	民有地	『末吉郷土史』
75	曾於市	岩川官軍墓地	大隅町岩川東馬場	墓地	良	市・史跡	墓地	公有地	『大隅町誌』

第4表 西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表(3)

No	市町村	名称	所在地	種類	残存状況	指定	現況	所有	備考
76	曾於市	西南の役薩軍の墓	末吉町岩崎岩南	墓地	良	市・史跡	山林	民有地	『末吉郷土史』
77	曾於市	戦死招魂標石	大隅町岩川上馬場	記念碑	良	なし	神社	民有地	『大隅町誌』
78	曾於市	招魂碑	大隅町恒吉貝ヶ塚	記念碑	良	なし	慰霊区	公有地	『大隅町誌』
79	曾於市	招魂碑	末吉町二之方 6299-2 (掛上り)	記念碑	良	なし	慰霊地	公有地	『末吉郷土史』
80	曾於市	西南役記念碑	末吉町二之方 6299-2 (掛上り)	記念碑	良	なし	慰霊地	公有地	『末吉郷土史』
81	曾於市	西南役招魂碑	財部町北俣城山	記念碑	良	なし	城跡	公有地	『財部町郷土史』
82	曾於市	西南の役従軍記念碑	財部町北俣城山	記念碑	良	なし	その他	公有地	『財部町郷土史』
83	垂水市	招魂墓	二川西宝寺横	記念碑	やや良	なし	宅地	民有地	『垂水市史料集』
84	垂水市	招魂碑	下宮町 (下宮神社内)	記念碑	やや良	なし	神社内	神社敷地	『垂水市史料集』
85	垂水市	招魂墓	新城 (神貫神社内)	記念碑	良	なし	神社内	神社敷地	『垂水市史料集』
86	錦江町	麓公民館招魂碑 (丁丑の役招魂碑)	馬場	記念碑	不明	なし	宅地	集落共有地	
87	鹿屋市	高隈城	上高隈	陣地	やや良	なし	山林	民有地	『鹿屋市史』
88	肝付町	戦亡招魂塚	前田 3632 番地 竹田神社境内南隅	記念碑	良	なし	神社地	社地	旧高山町の戦没者が列記してある。 基壇には、戦没地及び戦没年月日並びに氏名が列記してある。 花台は丸に桜が掘ってある。
89	肝付町	招魂墓	南方 2636 番地	記念碑	良	なし	雑種地	公有地	側面に戦没者の氏名及び戦没年月日並びに戦没地が列記してある。
90	大崎町	明治10年西南の役招魂碑	仮宿字西迫 1589 番地	記念碑	良	なし	都萬神社境内	宗教法人 都萬神社	『大崎町史』
91	大崎町	明治10年西南の役激戦の跡	野方字蔵元	戦場跡	不明	なし	畑	民有地	『大崎町史(明治百年)』及び『郷土の歴史』を参考とする。日付は旧暦で記述されている可能性がある。かつて畑地耕作中に弾丸が多く出土、包含層が攪乱されている可能性もある。
92	大崎町	明治10年西南の役激戦の跡	仮宿字城内・新土手・大橋	戦場跡	やや良	なし	宅地	民有地	樋山賛一氏の『明治十年西南の役従軍略記』を参考とする。
93	大崎町	明治10年西南の役官軍本営の跡	仮宿字町上 1750 番地	陣地	不明	なし	宅地	民有地	樋山賛一氏の『明治十年西南の役従軍略記』・『鹿児島県史』を参考とする。
94	西之表市	玉川招魂碑	東町	記念碑	良	なし	公園	集落共有地	他に「従軍者碑」「紀恩招魂碑」「玉川招魂整理碑」がある。
95	西之表市	招魂	住吉浜之町	記念碑	良	なし	寺	集落共有地	
96	西之表市	招魂碑	国上中目	記念碑	良	なし	神社	集落共有地	
97	西之表市	陣亡招魂之碑	現和浅川	記念碑	良	なし	神社	集落共有地	
98	中種子町	野間神社の招魂碑	中種子町野間神社	記念碑	良	なし	神社	社地	
99	南種子町	茎永の招魂碑	南種子町茎永松原	記念碑	良	なし	?	?	
100	龍郷町	龍佐央整之碑	龍郷 172 (田畑家墓地内)	記念碑	良	なし	墓地	民有地	銘文「明治九年十二月人民総代ニテ佐藤自由販売請願ノ為メ上鹿 偶明治十年西南役ニ際シ薩軍ニ参〇明治十年八月請願ノ目的ヲ遂ゲ婦島際便乗帆船青〇丸七島灘ニテ破船溺死 行年四十六歳」〇は解読不可
調査対象候補とした 21 遺跡 (第 2 図・第 3 図)									



第2図 西南戦争関連史跡・遺跡位置図（1）



第3図 西南戦争関連史跡・遺跡位置図(2)(鹿児島市)

滝ノ上火薬製造所跡

第3章 滝ノ上火薬製造所跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

滝ノ上火薬製造所跡は鹿児島市稲荷町に所在し、鹿児島市水道局の滝之神浄水場の付近一帯に位置する。

遺跡の所在する鹿児島市は、九州の南端、鹿児島県本土のほぼ中央部にあって、東経130度23分から130度43分、北緯31度17分から31度45分で、鹿児島県中西部、薩摩半島の北東部に位置する。同市は、北は薩摩川内市・始良市に、南は指宿市・南九州市に、西は日置市・南さつま市とそれぞれに接し、東は鹿児島湾（錦江湾）に面している。

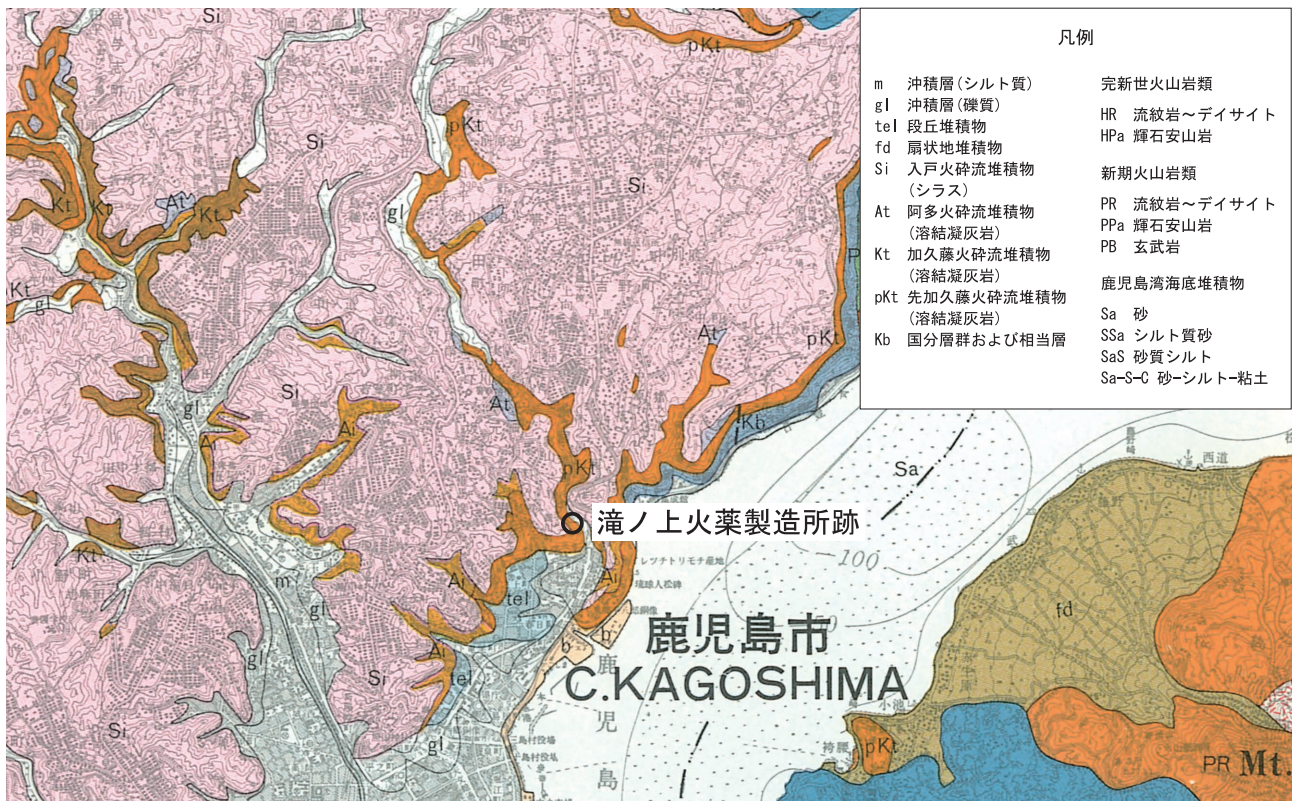
明治4（1871）年に廃藩置県とともに県庁の所在地となり、明治22（1889）年4月には市制が施行されている。太平洋戦争後は観光・商工業の発展とともに市域も拡大し、昭和42（1967）年4月29日には隣接する谷山市と合併して人口38万人の新鹿児島市が誕生、昭和55（1980）年7月には人口50万人を突破している。その後、平成元（1989）年には市制施行100周年を迎え、平成8（1996）年4月1日には中核市に指定されている。また、平成16（2004）年11月1日には吉田町・桜島町・喜入町・松元町及び郡山町と合併し、人口約60万・面積約547km²となっている。

鹿児島市の北東部は、始良カルデラの西側壁にあたり、海岸地形は高さ200～400mの急崖がおおよそ15kmにわたり続いている。市の西部や南部は、薩摩半島を南北に走る南薩山地が展開する。この南薩山地から、丘陵・台地が東側に向かって緩やかに傾斜しており、低地部そして鹿児島湾へいたる。

市内の低地部は、鹿児島湾へと注ぐ河川（稲荷川・甲突川・田上川・脇田川・永田川など）によって形成された小規模な沖積地が連続し、河口にはデルタも形成されている。滝ノ上火薬製造所跡を流れる稲荷川は、鹿児島市の宮之浦町を源流としており、東側の吉野台地と西側の岡之原、下田、坂元の丘陵地からの水を集めて鹿児島湾に注いでいる。

平成5（1993）年8月6日に、100年に1度と言われた記録的な集中豪雨「8・6水害」により、多くの市民の尊い生命が失われたほか、都市機能や市民の財産に深刻な被害をもたらした。稲荷川下流域の稲荷町、清水町一帯も、甚大な水害に見舞われている。

滝ノ上火薬製造所跡は、現在の稲荷川河口から約1km上流にあり、東側を吉野台地南端部、西側を清水城跡の急崖に囲まれた深い谷地にあり、川の両岸に形成されたわずかな小段丘を利用して形成されている。「8・6水害」



第4図 滝ノ上火薬製造所跡 周辺地質分類図（鹿児島県1990『鹿児島県の地質』改変）

や長年の風水により、両岸が削り取られ、崖が崩落して大部分は失われたと思われていた。

2 歴史的環境

鹿児島地区は、多くの旧石器時代や縄文時代の遺跡が存在しており、早くから考古学の調査・研究が行われた地域である。大正4（1915）年、イギリス人考古学者N Gマンローによって、鹿児島における最初の考古学的調査が行われた石郷遺跡を始め、学史に残る遺跡が数多く存在している。

ここでは、市町村合併前の市町村名で、鹿児島市全域の時代ごとの概要について述べる。

旧石器時代

鹿児島市から松元町にかけての台地では旧石器時代の遺跡が多く存在している。

県内では発見例が少ないA T（シラス）よりも下位の後期旧石器時代前半期の遺跡として、喜入町帖地遺跡や松元町前山遺跡などでナイフ形石器など各種の石器が出土している。

A T（シラス）よりも上位のナイフ形石器文化期の遺跡としては喜入町帖地遺跡、松元町仁田尾遺跡・宮ヶ迫遺跡があり、剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器など多様な石器で組成されている。細石刃文化期の遺跡には鹿児島市加栗山遺跡、喜入町帖地遺跡、松元町仁田尾遺跡・仁田尾中A・B遺跡・朽堀遺跡など複数の遺跡が連続しており、特に松元町の仁田尾遺跡はナイフ形石器文化期と細石刃文化期の各種の石器群が多量に出土しており、九州最大級の遺跡として知られている。また、仁田尾遺跡、鹿児島大学桜ヶ丘団地遺跡群で落とし穴が発見されている。帖地遺跡では両面加工の神子柴型石槍に類似した石器が出土しており、文化の広がり进行研究する上で、貴重な手がかりとなっている。

縄文時代

草創期では、鹿児島市から松元町にかけての台地一帯には多くの遺跡が存在している。鹿児島市加栗山遺跡・横井竹ノ山遺跡、松元町仁田尾遺跡・前原遺跡では、薩摩火山灰層の下層から細石刃とともに、無文・細い突帯文が施された土器や、石皿・磨石・小型三角形鎌などが出土している。鹿児島市掃除山遺跡では、幅広の突帯文が施された土器とともに、竪穴住居跡2軒、連穴土坑1基、配石炉6基、集石3基などが発見されている。

早期では、加栗山遺跡で竪穴住居跡17軒、連穴土坑33基、土坑45基、集石17基などが、松元町前原遺跡では竪穴住居跡27軒、連穴土坑含む土坑約240基、集石18基などが発見されている。

前期では、仁田尾遺跡や朽堀遺跡で、轟式土器や曾畑式土器が出土している。特に仁田尾遺跡では、曾畑式土器が多く出土している。

中期では、春日式土器の標式遺跡である鹿児島市春日

町遺跡がある。また、鹿児島市鹿児島大学郡元団地遺跡、松元町仁田尾遺跡などで玦状耳飾が出土している。

後期の前半では、鹿児島市木ヶ暮遺跡・山ノ中遺跡などの山間部に多くの遺跡が存在する。中頃になると鹿児島市草野貝塚・大龍遺跡、桜島町武貝塚のように海岸部に遺跡が存在するようになる。草野貝塚では、瀬戸内系・北部九州系土器や、南海産の貝も出土していることから、広域にわたる交易があったことがうかがえる。

晩期は、大龍遺跡で竪穴遺構から軽石製の岩偶が出土しており、軽石製品を伴う遺構の類例は、本県では少なく注目される。

弥生時代

シラス台地の麓に広がる低い沖積台地に遺跡が多く立地している。鹿児島市魚見ヶ原遺跡では、前期末から中期の竪穴住居跡や石包丁、多くの打製石斧が発見されており、稲作の定着をうかがわせる。中期になると、鹿児島市北麓遺跡で、溝を巡らした集落が発見されており、環濠集落の可能性も指摘されている。また、鹿児島大学郡元団地遺跡では水田や、川の水を堰き止めた木杭列なども発見されている。本格的な水田耕作が行われたことがうかがえる。

古墳時代

シラス台地に囲まれた沖積平野の縁辺部に遺跡が立地し、南九州独特の成川式土器が土器の中心である。鹿児島市笹貫遺跡は、成川式土器後半の笹貫式土器の標式遺跡である。須恵器の生産は広まらなかったが、5世紀後半以降には畿内産と考えられる須恵器が、鹿児島大学郡元団地遺跡で出土している。また、郡元団地遺跡では、多くの住居跡が発見されており、長期にわたって同じ土地で大規模な集落が営まれ、拠点的な集落の様相を示している。なお、高塚墳や南九州独特の地下式横穴墓などは発見されておらず、墳墓の様相は不明である。

中世・近世・近代

滝ノ上火薬製造所跡位置する磯地区周辺は、中世から近世・近代にかけての遺跡が多く残されており、ここでは磯地区にある中世から近代の様相を概観する。

中世の磯地区周辺

初代から3代まで鎌倉在住の守護職であった島津氏は、5代貞久の時に薩摩に入り、薩摩・大隅・日向を支配することとなる。守護大名時の鹿児島は郡司の矢上氏や長谷場氏によって支配されており、1341年東福寺城の長谷川氏、1343年矢上城の矢上氏を攻略し、鹿児島が島津氏の拠点となる。

東福寺城跡（第5図19）

稻荷川河口の鹿児島湾沿いに位置し、シラス丘陵（標高50～100m）の南北850m、東西200mの城域がある。本丸や曲輪が6つあると考えられているが、詳細は不明である。

天喜元（1053）年に長谷場氏によって築城され、暦応4（1341）年、肝付兼重らと島津家5代当主貞久との激しい戦いがあり、島津の手に落ちた。なお、西南戦争時は、城域である多賀山から滝ノ上火薬製造所へ砲撃を行っており、堡塁跡も存在している。

清水城跡（第5図16）

島津氏の居城で、屋形（平城）と山城から成り、吉野台地から伸びる丘陵（標高50～100m）に位置し、城域は北側の実方橋付近から葛山（橋ノ口城）を含む広範囲で、南北1600m・東西700m、台地下の麓南北140m・東西210mにも及ぶ。

至徳年間（1384～1387年）に、7代島津元久が築城した。現在の清水中学校付近に居館を構え、主殿12間（約21m）や厩・雑掌所などが揃った屋形作りの建物があったことが記録されている。天文19（1550）年、15代島津貴久が御内（内城）に移るまでの約160年間居城として機能し、その後は、大乘院となった。

山城部は鹿児島市による発掘調査で、中世の遺物や12～13世紀の礎石建物の跡を確認している。

内城跡（第5図24）

清水城の南600m、稲荷川右岸の微高地に位置している。15代島津貴久により天文19（1550）年に築城され、鹿児島城に移るまでの約50年間、戦国時代の島津氏の拠点となる。「築地一重の屋敷」と言われ、石垣に囲まれた1辺100mの正方形の屋形であった。1602年に鹿児島城が築かれると大龍寺が設置され、現在は大龍小学校の敷地となっている。

鹿児島市による発掘調査では、中世の遺物を多く確認しているが、内城の遺構は確認できていない。

福昌寺跡（第5図26）

島津宗家の菩提寺（曹洞宗）として、応永元（1394）年に、7代島津元久により創建され、廃仏毀釈の行われる明治2（1869）年まで存続した。

大乘院跡（第5図25）

天文19（1550）年に15代島津貴久が鹿児島に入り、伊集院の莊嚴寺を松峯山に移し祈願所としたのが創始で、開山は俊盛である。その後、弘治2（1556）年に現在の清水中学校へ移っている。

近世の磯地区周辺

江戸時代は「大磯」と呼ばれ、風光明媚な土地として知られていた。『三国名勝図会』で「大磯夕照」は鹿児島八景にも数えられ、景勝地としても知られていたようである。また、鹿児島（鶴丸）城も築城され、建設と同時に、近世城下町としての整備も進められた。また、城下から大磯へ向かう道は、山越えの鳥越道のみであったが、享保10（1725）年、21代島津吉貴の代に海岸沿いの新道が開かれたようである。この新道は、明治5（1872）年の明治天皇行幸の際、「磯街道」として整備された。

仙巖園附花倉御仮屋庭園

万治元（1658）年に島津家19代当主光久が別邸として造営したものである。この地は、対岸に桜島を望み、後背地は始良カルデラの絶壁で奇岩・奇石が多く、中国龍虎山の仙巖に似ていることから「仙巖園」と名付けられ、その後、21代当主吉貴の時代に曲水の庭が設けられたと伝えられている。昭和33（1958）年、国の名勝に指定され、平成27（2015）年には、世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産となっている。

明治維新前後の磯地区周辺

日本の南端に位置する薩摩藩は、欧米列強の強大な軍事力にいち早く脅威を抱き、列強に対抗する軍備の近代化・強化を図ることが求められていた。そのため、薩摩藩では1840年代に第10代藩主島津斉興のもと、早くから欧米列強の科学技術を導入して海防体制の強化が図られてきた。嘉永4（1851）年に第11代藩主に就任した島津斉彬は、施策を加速させ、磯地区に集成館と名付けた工場群を築き、ここを中核に製鉄・造砲・ガラス・紡績などの近代化事業を展開した。これが集成館事業である。この工場群は、文久3（1863）年の薩英戦争によりいったん焼失するが、島津茂久（忠義）・久光が再建してからは、西南戦争で破壊されるまで日本最大級の工場群であった。

旧集成館（第5図10）

薩摩藩の島津斉彬が建設した近代的な工場群のことである。仙巖園の隣接地に、反射炉・ガラス工場・鍛冶場・蒸気金物細工場など多くの工場が建ち並んでいた。現在は、反射炉跡を遺構として見ることができる。昭和34（1959）年に国の史跡に指定され、平成27（2015）年には、世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとなっている。

旧集成館機械工場

第12代藩主島津忠義が、薩英戦争で焼失した工場群の復興に際して、造らせた洋式機械工場である。日本の近代的工場建築として最も初期のものである。洋風石造建物であったため、当時「ストーンホーム」と呼ばれていた。現在は、尚古集成館の本館として利用されている。昭和37（1962）年に国の重要文化財に指定され、平成27（2015）年には、世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとなっている。

鹿児島紡績所跡（第5図11）

同じく主島津忠義によって、慶応3（1867）年に建設された日本で最初の洋式機械紡績工場である。明治30（1897）年10月に閉鎖され、取り壊された。そのため、位置が不明であったが、平成22（2010）年の埋文センターの発掘調査により、推定位置が報告されている。昭和34（1959）年に国の史跡に指定されている。



第5図 滝ノ上火薬製造所跡 周辺遺跡位置図 (国土地理院 1 : 25,000 地形図『鹿児島北部』改変)

第5表 滝ノ上火薬製造所跡 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号	所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	中尾瀬	201 94	鹿児島市吉野町帯迫	台地		●		●				
2	百人堀	201 137	鹿児島市吉野町百人堀	台地				●				鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)
3	老ノ迫	201 101	鹿児島市吉野町中ノ町	台地		●		●				
4	白井崎	201 103	鹿児島市吉野町中ノ町	台地				●				
5	七社B	201 25	鹿児島市吉野町七社上郷田	台地			●		●	●		
6	川の元	201 99	鹿児島市吉野町七社川の元	台地				●				
7	鳥堀	201 102	鹿児島市吉野町七社鳥堀	台地		●		●	●			
8	朱来門	201 104	鹿児島市吉野町雀ヶ宮朱来門	丘陵		●						
9	雀ヶ宮	201 27	鹿児島市雀ヶ宮深堀	台地			●	●				
10	集成館跡	201 145	鹿児島市吉野町磯	平地							●	国指定史跡・世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(29)(66)
11	鹿児島紡績所跡	201 156	鹿児島市吉野町竜ヶ水	平地							●	国指定史跡・世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(172)鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(29)
12	雀ヶ宮B	201 142	鹿児島市吉野町雀ヶ宮	丘陵		●						島津元久 築城
13	前平	201 5	鹿児島市吉野町雀ヶ宮	台地		●						『鹿児島考古』23, 前平式土器標識遺跡
14	橋ノ口城跡	201 69	鹿児島市坂元町城ノ後	台地						●		
15	催馬楽城跡	201 57	鹿児島市坂元町矢上	丘陵						●		矢上氏築城 別名 矢上城
16	清水城跡	201 55	鹿児島市清水町大興寺岡	丘陵						●	●	島津元久 築城・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)(55)
17	滝ノ上火薬製造所跡	201 127	鹿児島市吉野町滝ノ上	平地							●	本報告書・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)
18	尾頭小城跡	201 83	鹿児島市稲荷町後迫	平地						●		中村秀純・肝付兼重 築城(1341年)
19	東福寺城跡	201 54	鹿児島市清水町田之浦	丘陵				●			●	矢上氏(坂元の催馬楽城)の一族長谷場氏居城(1053年築城)・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
20	浜崎城跡	201 58	鹿児島市清水町田之浦	丘陵						●		東東福寺城の支城
21	祇園之洲砲台跡	201 146	鹿児島市清水町祇園之洲	平地							●	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(172)鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
22	浜町	201 132	鹿児島市浜町	平地							●	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(25)
23	大龍遺跡群	201 9	鹿児島市大竜町・池之上町・春日町	台地		●	●	●			●	『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)(2)(7)(15)(32)(33)(34)(48)(54)(55)(59)(71)(77)『若宮遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)(24)(73)『春日町遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(36)
24	内城跡	201 56	鹿児島市大竜町	平地						●		島津貴久 築城(1550年)
25	大乘院跡	201 82	鹿児島市稲荷町清水中学校校庭	丘陵						●	●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)(6)(55)
26	福昌寺跡	201 144	鹿児島市池之上町玉龍高校一帯	平地						●	●	島津家菩提寺・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)(47)(50)(56)(58)(70)(71)(72)(80)
27	丸岡	201 3	鹿児島市坂元町たんだとう丸岡	丘陵		●						
28	南州神社	201 7	鹿児島市坂元町上竜尾町南州神社境内	台地		●						
29	堅野冷水窯跡	201 143	鹿児島市冷水町堅野	丘陵							●	
30	琉球館跡	201 159	鹿児島市小川町								●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(39)
31	垂水・宮之城島津家屋敷跡	201 134	鹿児島市山下町	平地							●	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(48)
32	火除地跡	201 411	鹿児島市山下町								●	平成29年度 発掘調査
33	名山	201 105	鹿児島市山下町名山小学校校庭	平地							●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)(38)
34	造士館・演武館跡	201 106	鹿児島市山下町	平地							●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
35	鹿児島城跡(鶴丸城)	201 62	鹿児島市城山町	平地		●			●		●	島津家久 築城開始(1601年)平成27~令和2年度 発掘調査鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(55)(60)鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)(19)(28)(58)
36	上城跡	201 61	鹿児島市新照院町	丘陵						●		上山氏 築城(1352年), 鹿児島城築城後は一部に取り込まれる
37	夏蔭城跡	201 133	鹿児島市草牟田町夏蔭	丘陵						●	●	上山城支城, 西南戦争激戦地

旧鹿児島紡績所技師館

機械工場と同様に、薩英戦争後に建設された「鹿児島紡績所」に招聘されたイギリス人技師たちの宿舎である。外観は洋風だが、小屋組や柱の寸法などは寸尺法という和洋折衷の建物である。明治15（1882）年に、鹿児島城本丸跡に移築され、昭和11（1936）年に、現在の場所に移築されている。昭和37（1962）年に国の重要文化財に指定されている。

祇園之洲砲台跡（第5図21）

島津斉彬が築造した砲台である。薩英戦争時には、祇園之洲砲台の沖合に、イギリス艦船レースホースが座礁した。このため、それを救おうとしたイギリス艦隊の集中砲火を浴びたとされている。平成9（1997）年に鹿児島市、平成22（2010）年に埋文センターが発掘調査を行っている。

3 滝ノ上火薬製造所跡概略

調査地の地名は「瀧の上」「滝の上」「瀧の神」「滝之神」などがある。鹿児島市水道局では、滝之神浄水場としている理由として、鹿児島水道局史に昭和8（1933）年2月10日付『鹿児島新聞』を引用して、次のとおり記載されている。「当地に浄水場を建設する際に、吉野村と鹿児島肥料会社が用地の境を巡り紛争となった。裁判や東京から評定官が来鹿したが、未解決のままであった。そこで、鹿児島市は工事を実施するため、「上」を「神」にすれば文句無かろうとして、水源地を「滝之上」を「滝之神」に改めたという。

また、調査対象の火薬製造所については、文献等では、時期や所管の変更より、「銃薬製造所」・「火薬局」・「滝の上火薬製造所」と様々に記載がある。本報告書では、字である「滝ノ上」とし、薩摩藩海軍史並びに、鹿児島市発掘調査報告書で使用されている「滝ノ上火薬製造所」とした。

施設略史

滝ノ上火薬製造所は、文政年間（1818～1831年）に唐湊村（現在の鹿児島市唐湊）から移設されて、銃薬方として建設された。水車を利用して硝石・硫黄を砕いたほか、混和機・圧搾機・光澤機の動力としても、稲荷川の水力を必要としたと考えられる。

移設の理由は、元々は唐湊で火薬を製造しており、火災が度々発生して死傷者が多数出たとされている。また、滝ノ上が選定された理由は、上町の商人神宮司武兵衛の勧めによるもので、元々銃射場（射撃場）であった場所を廃止して、水車を利用したとされている（公爵島津家編纂所1968）。

嘉永2（1849）年には、製法を洋式に改めて、直径4mの水車を設置している（この際に6基の水車を設置した可能性あり）。

万延元（1860）年には、所管が集成館に一元化される

などしている。文久3（1863）年の薩英戦争での滝ノ上火薬製造所の被害詳細は不明である。

文久3（1863）年には、滝ノ上火薬製造所を本局とし、分局として敷根火薬製造所（霧島市）を創設している。なお、敷根火薬製造所は最新鋭の火薬製造機を備えたもので、タービン水車やエッジランナーがあったと言われている。

明治2（1869）年に、滝ノ上火薬製造所に隣接する稲荷馬場火巧所（現清水中学校付近・創設期不明）や、硝石を製造する谷山作硝局（安政5（1858）年創設）とともに、銃薬方から火薬製造局と改称された。

明治4（1871）年の廃藩置県後は、集成館とともに陸軍所管となり、明治5（1872）年3月に火巧所と改称、大阪砲兵支廠の属廠とされた。敷根火薬製造所は、明治6（1873）年には、藩政時代に見聞役であった薩摩藩士伊勢仲左衛門が火薬を製造し、海軍省に納めている。この頃には、火巧所（滝ノ上火薬製造所・稲荷馬場火巧所）は日本最大の火薬工場となり、敷根火薬製造所も最新鋭の設備を持ち、海軍省後は、海軍が使用する火薬を供給している。特質すべきは、政府軍の主力銃であるスナイドル銃（後装銃）の銃弾を製造していたと考えられていることである。弾丸と火薬を紙で包んで作るエンフィールド銃（前装銃）は手作業で製造できるが、金属の薬莖を使用するスナイドル銃は銅板を引き延ばすプレス機がないと製造できなかった。この機械を導入した記録が、明治2（1869）年4月28日付で島津家が外国官役所に宛てた史料に残っている。その状況は、明治8（1875）年まで続き、明治10（1877）年になっても、鹿児島は銃弾製造の一大製造及び備蓄拠点であった。

そのような中で、明治9（1876）年頃から、九州各地で不平士族の反乱が起きている。明治政府は弾薬製造機や備蓄されている弾薬を危惧し、明治10（1877）年1月下旬、汽船赤龍丸（三菱会社所属）で、夜間に滝ノ上火薬製造所などの兵器・弾薬を密かに運びだそうとした。機械や弾薬類が自分たちのものという考えが強かった鹿児島の士族たちは激怒し、草牟田の火薬庫を襲撃した。その間の火巧所は、襲撃を受けているが、積極的に防ごうとはしなかったようである。このような経緯から、滝ノ上火薬製造所は、国内最後で最大の内戦である西南戦争の勃発の契機となった場所ともいえる。

3月7日～12日の間に、政府軍の軍艦春日丸などが鹿児島湾に入港し、その間に、集成館・滝ノ上火薬製造所等の武器製造機械・弾薬・砲台の大砲を搬出・処分している。滝ノ上火薬製造所横の稲荷川は、大量の火薬が廃棄され、「魚死シ河水黒色ニ変ス」と記録が残っている。搬出されたスナイドル銃薬製造機器は、大阪の砲兵支廠に設置された。しかし、不慣れた政府軍兵士たちが搬出したため、不具合を起こしていたようである。3月10

日には、敷根火薬製造所に春日丸が来航し、火薬樽をすべて倉庫から出して水中に投げ捨て、機械などのすぐに処分できないものは焼き払っている。しばらくの間は、残った機材で西郷軍が弾丸を製造している。5月・6月に入り、鹿児島を巡って政府軍と西郷軍は、一進一退の攻防を繰り返すことになる。政府軍は、5月14日に谷山作硝所を焼き払い、5月16日には滝ノ上火薬製造所に対して、向かいの山の多賀山から砲撃を浴びせて破壊した。この瞬間に、火薬製造所としての役割に、幕を閉じることとなる。

その後、明治22(1889)年に政府から鹿児島県へ引き渡されている。さらに個人へ払い下げられ銀の製錬を行い、骨粉肥料会社が引き継ぎ肥料製造を行った。戦後は、別の会社を買収し、金の製錬や木材加工などを行っている。それらの操業は、西南戦争による破壊を免れた水路等を利用していただようである。現在は、石材会社が主に所有している。また、遺跡範囲内は、別に鹿児島市水道局、鹿児島県、九州電力も所有者となっている。

火薬及び銃弾の製造能力

幕末の頃の間の製造量については、硝石や硫黄の生産量等から、薩摩藩は加賀藩に次ぐ規模であったと推定されている(県埋せ2018)。

明治2(1869)年の頃は、滝ノ上火薬製造所・敷根火薬製造所合計で七万斤(約42t)とされている。

明治4(1871)年4月、官有化される前の火薬局(滝ノ上火薬製造所・敷根火薬製造所・稲荷馬場火巧所・谷山作硝所・火薬庫5か所)の統計が『鹿児島県史 第三巻』に掲載されている。

火薬局

本局(稲荷馬場も含む人数か)	305人
敷根火薬製造所	29人
谷山作硝所	33人

製造能力1日分

火薬	290斤(約174kg)
針打パトロン(薬包)	3,000発
旋条銃玉打付パトロン	3,500発
空発パトロン	8,000発

針打パトロンは後装銃(主にスナイドル銃か)の銃弾、旋条銃玉打付パトロンは前装銃(主にエンフィールド銃)の銃弾を指している。空発パトロンは詳細不明だが、弾丸を詰めていない薬莢と考えられる。なお、敷根火薬製造所では、銃弾製造機器は見られないので、銃弾の製造能力は滝ノ上火薬製造所と稲荷馬場火巧所の2か所の可能性が高い。

明治4(1871)年以降の製造能力は判明していない。敷根火薬製造所から製造能力は、明治5(1872)年で火薬製造能力四万斤(約24t)、明治9(1876)年頃では、六万八千六百斤(約41t)とされているので、同規模か、

滝ノ上火薬製造所が銃弾の製造を一手に引き受けていたとすると、火薬については敷根火薬製造所以下と推定される。

施設内容

各絵図(第7図～第9図)から様々な施設が残っていることから確認できる。敷根火薬製造所同様に、銃薬水車・硫黄車・硝石水車をはじめ、各蔵(保管庫)や役局(事務所)など多数の施設があったことが考えられる。

絵図の時期については、「銃薬方」(第7図)は、安政4(1857)年6月、佐賀藩士千住大之助(脇役)、佐野常民(精煉方主任)、中村奇輔(精煉方)が、鍋島直正から島津斉彬に送られた電信機を携えて鹿児島を訪れた際、集成館などの施設を見学し、その様子を絵図にした『薩州見取絵図』の一部であることから、幕末期の滝ノ上火薬製造所を描いたものである。

「銃薬製造所図」(第8図)も、建物や水車の近似性からほぼ同時期の滝ノ上火薬製造所跡を描いたものであろう。

「瀧ノ上御所有地字絵図」(第9図)には、明治22(1889)年12月鹿児島県へ引き渡しの記載が見られることから、西南戦争前後の滝ノ上火薬製造所跡の測量図と考えられる。

研究史

滝ノ上火薬製造所跡の既存の調査・研究として、次のものが挙げられる。

川越重昌氏は、現地の地形を入念に踏査し、その成果と『薩摩海軍史』や、東京大学史料編纂所蔵の「銃薬製造所図」、『銃薬製式録』などから、建物規模の検討や火薬水車復元断面図・復元平面図の作成を行っている(川越1986ab・1987abcdef・1988・1990)。

鹿児島市教育委員会は、稲荷川の緊急整備に伴い、水車群があったと考えられる箇所を第1地点、建物があつたと考えられる箇所を第2地点として、トレンチ調査による発掘調査を行った。その結果、第1地点では、約3m掘削を行ったが、当時の遺構面は失われた可能性が高いこと。第2地点では、Cトレンチから、約3m掘削した面から、切石を並べた敷石遺構が発見されており、当時の建物跡の可能性が高いことを指摘している。

池田芳宏氏は、滝ノ上火薬製造所の概略史を簡潔に述べている(池田2016)。

松尾千歳氏は、西南戦争を誘発した集成館の状況、特に弾薬に関する事柄について、文献資料を元に考察している。その中で、滝ノ上火薬製造所の西南戦争における前後の状況や、火薬の製造量・備蓄量、戦闘における影響を考察している(松尾2017)。なお、滝ノ上火薬製造所の概略史及び製造能力は、この松尾氏の研究を主に参考にして、記載している。

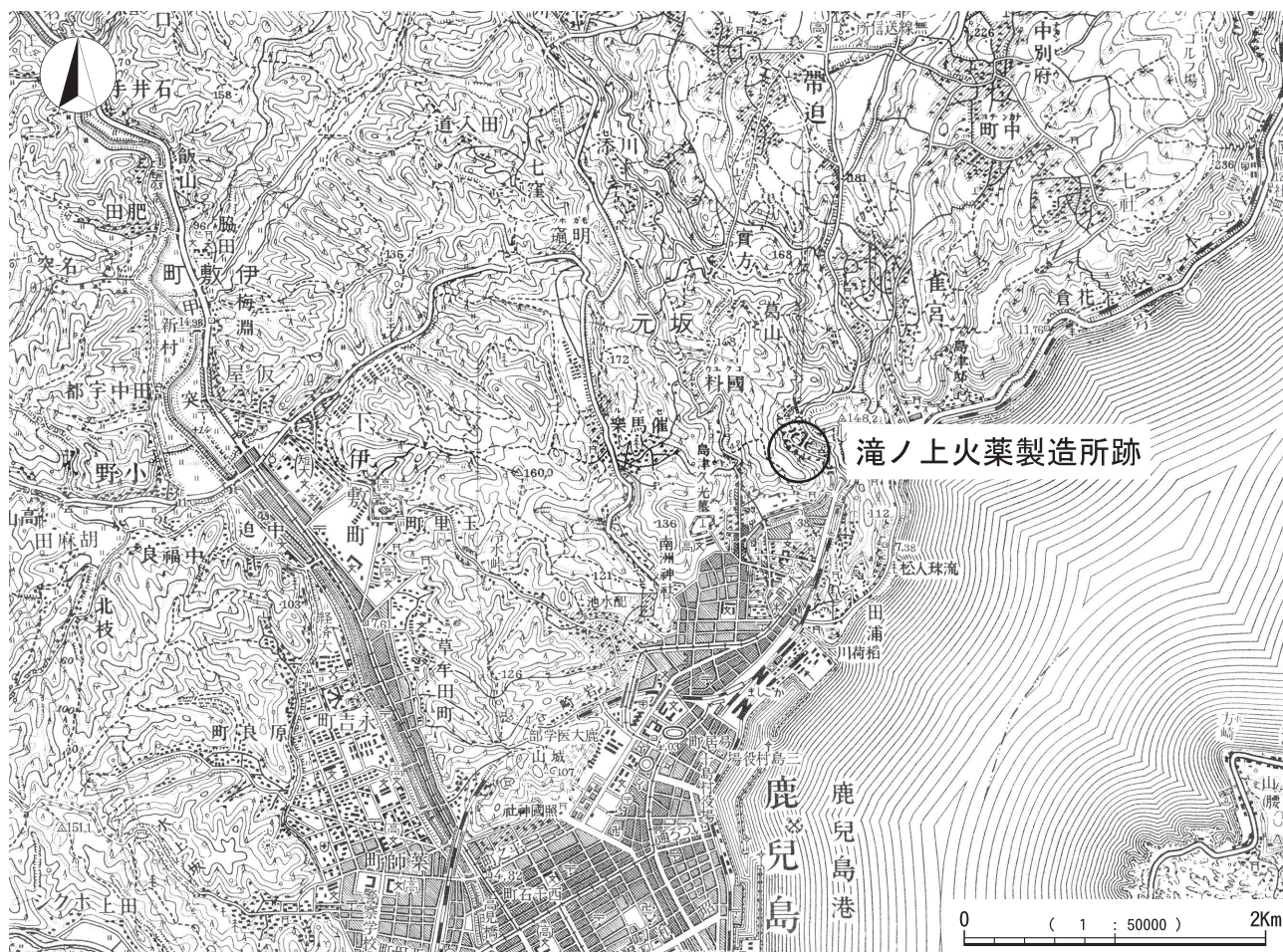
埋文センターでは、滝ノ上火薬製造所の分局である敷

根火薬製造所の発掘調査を行なっている。その中で、薩摩藩における火薬の製造や火薬の製造量の検討を行っている（県埋セ2018）。

【引用・参考文献】

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（172）
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2018『敷根火薬製造跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（194）
 鹿児島県教育委員会 2004『鹿児島県の近代化遺産』
 鹿児島市教育委員会 1988『滝ノ上火薬製造所跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（22）
 鹿児島市教育委員会 2017『春日町遺跡H地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（78）
 鹿児島市教育委員会 2019『史跡 鹿児島紡績所跡Ⅰ』鹿児島市重要産業遺跡関係調査報告書（1）
 鹿児島市水道局 1991『鹿児島市水道局史』
 鹿児島市史編さん委員会（編）1969『鹿児島市史』Ⅰ
 鹿児島市教育委員会 2016『史跡めぐりガイドブック』-五訂版-』
 公爵島津家編纂所 1968『薩藩海軍史』上巻
 川越重昌 1986a「鹿児島市滝の上火薬製造所址（1）」

『銃砲史研究』第183号
 川越重昌 1986b「鹿児島市滝の上火薬製造所址（2）」
 『銃砲史研究』第185号
 川越重昌 1987a「鹿児島市滝の上火薬製造所址（3）」
 『銃砲史研究』第186号
 川越重昌 1987b「鹿児島市滝の上火薬製造所址（4）」
 『銃砲史研究』第188号
 川越重昌 1987c「鹿児島市滝の上火薬製造所址（5）」
 『銃砲史研究』第189号
 川越重昌 1987d「鹿児島市滝の上火薬製造所址（6）」
 『銃砲史研究』第191号
 川越重昌 1987e「鹿児島市滝の上火薬製造所址（7）」
 『銃砲史研究』第193号
 川越重昌 1987f「鹿児島市滝の上火薬製造所址（8）」
 『銃砲史研究』第195号
 川越重昌 1988「鹿児島市滝の上火薬製造所址（9）」
 『銃砲史研究』第196号
 川越重昌 1990「鹿児島市滝の上火薬製造所址（終稿）」
 『銃砲史研究』第223号
 池田芳宏 2016「滝の上火薬製造所概略」『吉野史談』第40号
 松尾千歳 2017「西南戦争と集成館」『尚古集成館紀要』第16号



第6図 大正4年 滝ノ上火薬製造所 周辺地形図（1：50,000・『鹿児島』改変）



第7図 鏡藥方 (武雄市歴史資料館蔵)



第8図 銃薬製造所図 (東京大学史料編纂所蔵)

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

滝ノ上火薬製造所跡の調査は、第10図に示す範囲（約2,900㎡）を調査対象とした。なお、調査対象地は、鹿児島市水道局、鹿児島県が管理、また福村石材工業（株）が所有しており、それぞれ許可を得て調査を行っている。

『滝ノ上火薬製造所跡』（鹿児島市教育委員会1988）及び、『薩摩火薬史跡実踏記・鹿児島市滝ノ上火薬製造所址』（川越1986～1990）の調査結果から、各調査時には、石垣や導水路がかなり残存していたようである。しかし、現地踏査や、稲荷町公民館、鹿児島市水道局、福村石材工業（株）への聞き取り調査の結果から、27年前の「8・6水害」等でかなりの部分が失われている可能性があるとして推測された。そのため、調査目的を石垣の残存状況の把握と水車・導水路跡の確認とした。

『銃薬方』（第7図）、『銃薬製造所図』（第8図）、『瀧ノ上御所有地字絵図』（第9図）の絵図や、史料及び各報告内容を参考に、調査区1～3の3つに分けて、調査を行うこととし、絵図や鹿児島市の調査結果を基に、導水路や水車が設置されていた可能性が高いと推測した箇所や、現状で石垣が良好に残存している箇所にトレンチを設定した。

遺構配置図の作成にあたっては、世界測地系による3級基準点を設置した。遺構配置図及び石垣・トレンチ位置等は、トータルステーションと平板による実測を行った。なお、基準点設置業務は委託して行い、基準点等のデータ一式は埋文センターに保管してある。

発掘調査の方法は、まず竹や樹木の伐採、倒木や土砂の除去等を行い、石垣の残存状況を確認した。その後、設定したトレンチを重機により慎重に掘削を行いながら、必要に応じて人力による精査を行い、遺構等の検出を行った。

遺物は、近代以降の造成土及び整地層だったため、トレンチ及び層ごとに一括で取り上げた。調査終了時には、伐採等で検出された石垣等は、現状のままとし、トレンチから検出された導水路等は土嚢で保護し、慎重に重機による埋め戻しを行った。

2 整理作業の方法

陶器や瓦の水洗い作業は、ブラシを用いて行った。

注記は、「TKN」を頭につけて、続けて「トレンチ名」「層」「遺物番号」の順に記入した。

第3節 層序

本遺跡の層序は、調査区やトレンチで異なっている。火薬製造所廃絶後の当該域の利用状況による違いや、埋没時期の違いによるものと考えられる。そのため、トレンチごとの実測図で記述する。

第4節 滝ノ上火薬製造所跡の調査成果

滝ノ上火薬製造所跡の調査は、伐採及び土砂の除去を行い、石垣の検出及びトレンチによる掘削作業を行った。また、現状の石垣の配置や絵図・標高から、導水路等の遺構が残存している可能性がある箇所では、トレンチ調査を行った。各調査区ごとに詳細を記述する。

1 調査区1（第11図）

石垣の下部構造や操業当時の整地面、水車・導水路跡の検出を目的として、8本のトレンチを設定した。重機で表土を掘削した後、ねじり鎌や移植ごてによる人力で遺構・遺物の検出を行った。トレンチ1・2・3・4・5では、石垣や導水路等の実測図を作成した。調査区1のトレンチ6・7・8では、調査工程や安全上の理由から、写真による記録だけにとどめた。標高は現道が約18mである。各トレンチごとに詳述していきたい。

（1）排水路及びトレンチ1（第12・13図）

調査区の南には、排水路（階段状の石積み）が露出していた。排水路は現道部分の地下にも続いていると予想されたため、150×160cmのトレンチ1を設定して、約150cmほど掘り下げを行った。その結果、さらに段状の石積み5段を検出した。

排水路は、全長730cm、幅550cmで中央に水路、両側は切石を階段状に積み上げ、斜度約40°斜面を形成している。両サイドとも平積みで、30～50cm程度の長方形、正方形、台形の切石をD-D'16段、F-F'10段の階段状に積み、段差は約20～30cmで、目地には土を用いている。

水路部分は、階段状部分から120～220cm下がり、18段の階段状石積みで構築されている。段差は10～15cmと両側より低く、斜度約30°斜面を形成している。水路右側は、水流によるものか全体的に段差が削られている。下段には側面に2つの穴が穿孔され、何らかの構造物を置いた可能性が高い。目地には、モルタルを用いている。

水車を置くための柄穴等は検出できなかった。第9図には、稲荷川へ続く水路が描かれており、排水路の可能性が高い。なお、東西方向は崩壊及び埋没しており、さらに大きな構造物だったと推定される。

（2）トレンチ2（第12・14図）

トレンチ1の排水路と検出された石垣に囲まれた部分に、現道より一段高いテラス状の空間が検出された。テラス北側に露出している石垣に、凹状にトレンチを設定して調査を行った。

トレンチ2の東（A-A'）付近は、現道に面した石垣上部の裏にあたる部分になる。3層で大正3（1914）年噴火の火山灰が堆積していたため、4層が明治期の堆積土となる。さらにその下層の5層から多量の礫と硬化面を検出した。礫は石垣の裏込めと考える。以上のことから、5層上面が火薬製造所操業時の面と考えられる。

トレンチ2の西端石垣付近（B-B'）では、表土か



第 10 図 滝ノ上火薬製造所跡 調査範囲図 (1 : 2,500 『鹿児島市都市計画マップ』 改変)

ら約70 cm下の5層から、径が70 cmで楕円形を呈した凝灰岩製の石を検出した。周辺の土は硬化しており、礫も多数検出されている。トレンチ3導水路(第15図)延長線上に位置しており、西(B-B')から東(A-A')へ低く(比高差約30 cm)なるため、上部には木樋などの水を流すための支脚を建てた可能性がある。検出された凝灰岩製の石は、その礎石の可能性がある。なお、遺物編で詳述する遺物(第26図1・2・3)が出土している。

トレンチ2北側の石垣(第14図)は布積みで、切石は瘤出し加工を行っている。中央に切石が組み合わない面が縦に1本走る。その左側は、正方形に近い切石を多く使用している。石垣下は20 cm大の礫が敷き詰められており、非常に固い硬化した層を検出した。この中央の面の右側は、長方形のやや大きい切石を使用しており、横だけでなく縦長に切石を積んでいる箇所もある。その下層はまだ石垣が続く。この中央の面を境に、積み替えまたは、構築時期が違ふと考えられ、右側が新しく積まれた可能性が高い。

(3) トレンチ3・導水路(第15図)

トレンチ2のあるテラスより400 cm上部、石垣の最上部に、薄い切石があったため、その切石を中心に110×85 cmの範囲で掘削を行った。表土直下より、長さ126 cm、幅75 cmの平石を桶状に組んだ遺構(導水路)を検出した。凝灰岩を深さ約30 cmのU字状に削り出し、連結して構築している。壁面中央には長さ7 cm、幅6 cm、高さ5 cmの柄穴が作られている。

目地部分には、黒漆喰が施され、補強するような形で、モルタルが使用されている。黒漆喰は、江戸時代後期から用いられ、鹿児島城でも調査の結果、近世後期の水路に多用されている。そのため、導水路は、火薬製造所操業の可能性が高い。モルタルを施した時期は不明である。

導水路は前述したトレンチ2の礎石上部にあり、東方向には木樋などの構築物があった可能性が高い。西側へ続いており、トレンチ4導水路(第16図)と繋がる可能性が高い。

(4) トレンチ4・導水路(第16図)

『瀧ノ上御所有地字絵図』(第9図)に導水路のような構築物が描かれていたことから、220×160 cmの範囲で掘削を行った。表土から約200 cm下で南北方向に伸びる板石を桶状に組んだ遺構(導水路)を検出した。側面は凝灰岩の切石が3段積み、一番下はL字状に20 cm程度飛び出し、柄穴が作られているものがある。柄穴の西側は、台形状で長さ15 cm・幅5 cm・高さ20 cm、東側は歪んだ四角形で長さ20 cm・幅10 cm・高さ14 cmである。床面及び壁面の目地はモルタルで、壁面上部は粗雑な補強となっている。底石は、縦30~40 cm・横60~70 cmの切石を敷き詰めている。目地は黒漆喰とモルタルの箇所がある。また、両壁には仕切りをはめ込む切石があるが、成形がきれ

いで石材が違うため、後世の再利用時の改変と考えられる。

導水路は、多量のシラスにより埋没している。4層から、流れ込んだ壊れたモーターが出土した。そのため、埋没時期も昭和30~40年代と推定される。モーターは、壁面に形成された仕切り板を開閉するために設置された可能性がある。2・3層は、1回埋没した導水路を掘り起こそうした際に、さらにシラスが流れ込んだ堆積と考えられる。

一部黒漆喰が施されており、構築時期は滝ノ上火薬製造所の操業時の可能性が高い。導水路は、その後、民間会社時代にも再利用され、崖崩れにより埋没したものと考えられる。

(5) トレンチ5・石垣(第17図・第18図)

門柱のような緻密に組まれた石垣(高さ約600 cm)があり、その北側を360×120 cmの範囲で、表土から約130 cmの深さまで掘削を行い、調査を行った。

石垣①は布積みで、きれいに加工された切石を使用している。目地はモルタルを施されており、面を揃えた仕上げとなっている。表面には淡い橙色の漆喰が施されている。表土から130 cmまでの深さとなっている。石垣は地上部分と地下部分を併せて、約730 cmの高さがある。また、石垣②に埋め込まれている。

石垣②は布積みで、瘤出しの切石を使用している。切石の加工の仕方が石垣①とは明らかに違い、目地にモルタルなどは見られない。トレンチ2北面の石垣(第14図)と同じ積み方である。石垣は下層に続いている。

各石垣の構築時期については、今回の調査では不明である。

(6) トレンチ6・7(第19~21図)

調査区1北に位置する石垣周辺の伐採を行ったところ、スロープ状の道を検出した。石垣は谷積みであるが、積み直しの部分もある。道の使用面を検出するために、スロープ部分に2か所トレンチを設定して調査を行った。なお、調査期間の関係で、写真のみの記録とした。

トレンチ6(第20図)

スロープ状の道の登り口に、200×140 cmの範囲の掘削を行った。表土から約30 cm下から、礫敷による非常に固い硬化面を検出した。礫は5 cm程度のものを敷き詰めている。道の使用面と考えられる。

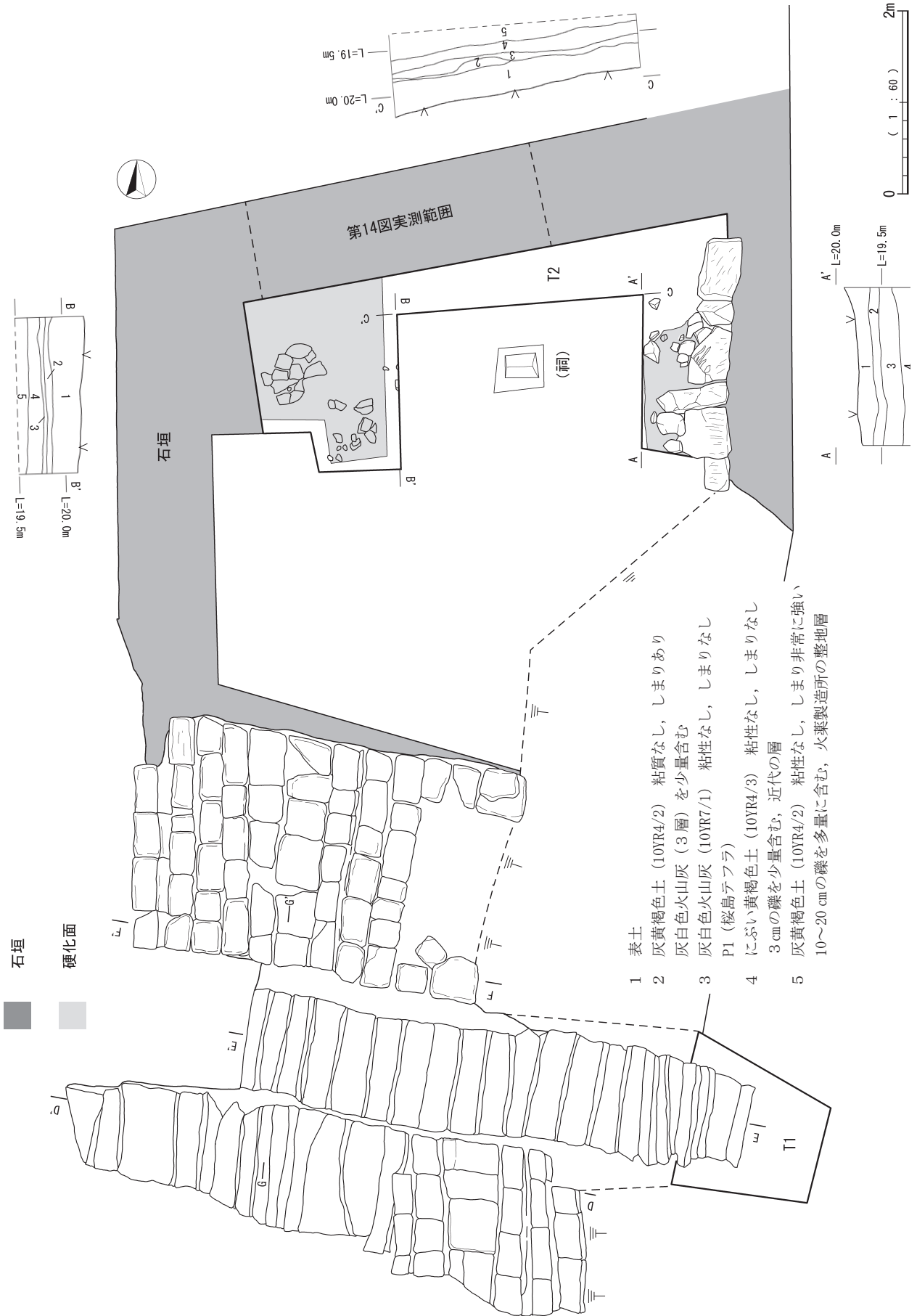
周辺石垣の積み替えが行われており、火薬製造所操業時なのか、後世の改変により構築された道かについての詳細は、不明である。

トレンチ7(第21図)

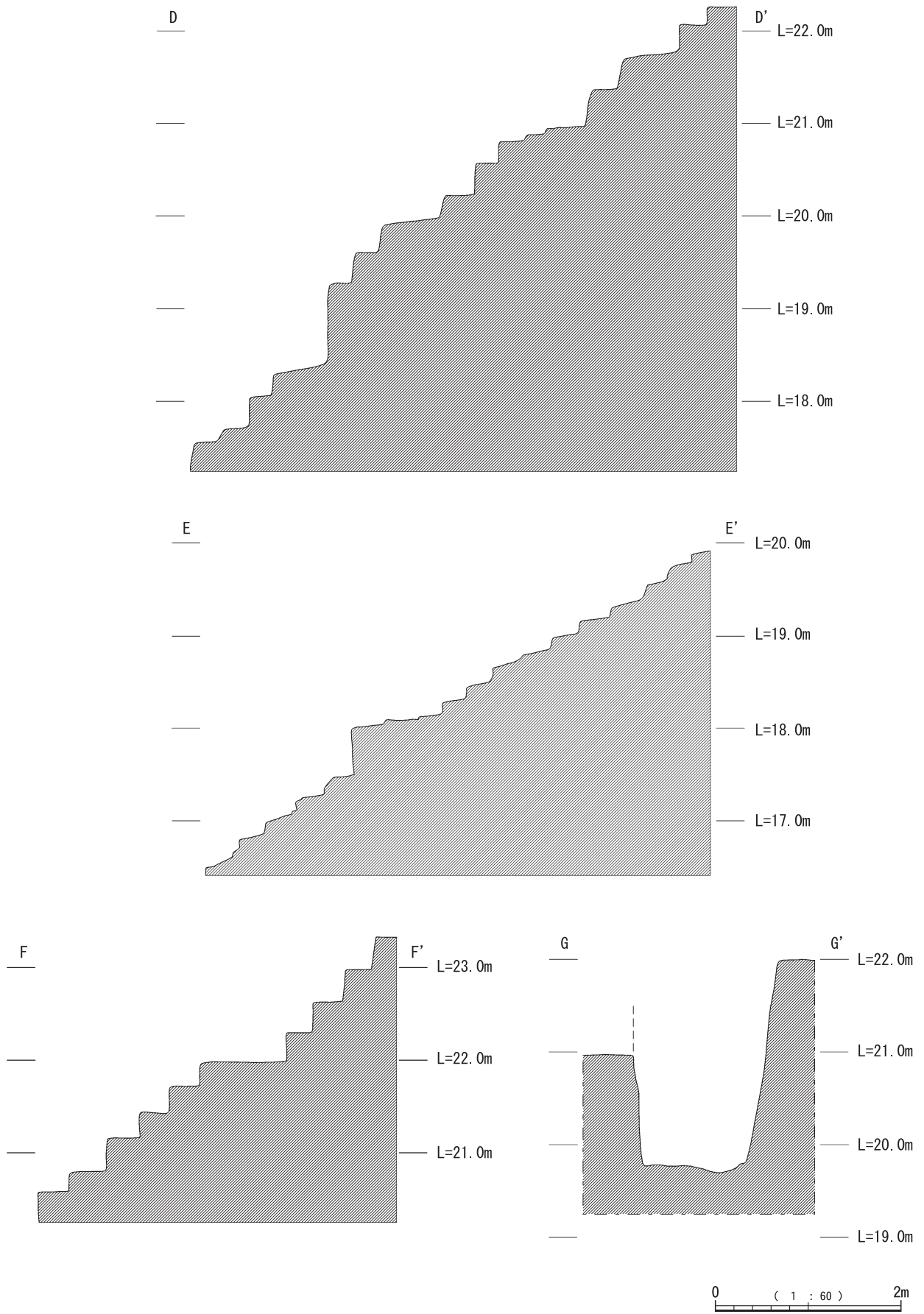
スロープ状の道の踊り場に、200×100 cmの範囲の掘削を行った。東側は表土直下から、西側は30 cm下から、礫敷による非常に固い硬化面を検出した。礫は5~20 cm程度のものを敷き詰めており、トレンチ6の礫と大きさや石材が同一であり、道の使用面と考えられる。西側



第11図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区1・2全体図



第12図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区1実測図



第 13 图 滝ノ上火薬製造所跡 排水路断面图

では、礫敷は約 20 cm と厚く敷き詰められている。東側とのレベルの差があるため、平坦にするために西側に厚く敷き詰められていると考えられる。

石垣の積み替え等が行われており、火薬製造所作業時なのか、後世の改変により構築された道かは不明である。

(7) トレンチ 8 (第 22 図)

調査区 1 から調査区 2 へと続く石垣部分に、谷積み面と布積み面の違いがあり、下層の確認のため、340×200 cm の範囲を掘削した。掘削深度が深いことから、写真のみ記録に留め、埋め戻している。

石垣は、南側がスロープ状の道から約 700 cm 続く谷積みの石垣である。北側では調査区 2 へ向けて、約 70 m に渡り布積みとなっている。両面の石垣の切石は、正方形から長方形まで様々な凝灰岩の石を用いており、加工は瘤出しの切石と、そうでないものと混じっている。

表土から約 220 cm 下層で、礫が多量に検出する層となり、石垣は検出できなかった。掘削深度が深いため、これ以上の調査はできなかったため、石垣の基盤にあたるかは不明である。

北側の布積み面は、調査区 1 トレンチ 2 (第 14 図) の石垣等とほぼ同一の構造をしていることから、同一時期に構築された可能性が高い。南側の谷積みの石垣面は、2 種類の積み方が見えることから、積み替えと考えられる。積み替えの時期は不明である。

2 調査区 2 (第 11 図)

調査区 2 は、調査区 1 から続く石垣の北端にあたる部分で、標高約 23 m である。石垣上部に構造物が露出していたため、伐採等を行った。構造物のほとんどは、ブロックや鉄筋コンクリートで造られた貯水池や水路跡で、民間会社作業時の施設である。

調査区 1 で検出されたものと同じような導水路が露出していたため、調査を行った。

導水路 (第 23 図)

調査区 2 の北側部分に、導水路の一部が検出できた。導水路は、検出部分で全長 310 cm ・ 幅 100 cm あるが、

その大部分は崩れている。凝灰岩を深さ 36 cm の U 字状に削り出し、連結して構築している。目地には黒漆喰が一部残っているが、多くはモルタルが接着に用いられている。

切石の厚みが約 12 cm 前後、質が同一の凝灰岩の切石を用いていることから、調査区 1 トレンチ 3 導水路 (第 15 図) と同一時期に構築されたと考えられ、火薬製造所の作業時の可能性が高い。

『瀧ノ上御所有地字絵図』(第 9 図) に南北に連なる導水路のような構造物が描かれていることから、調査区 1 トレンチ 4 の導水路 (第 16 図) へ伸びると推定される。

3 調査区 3 (第 24 図)

調査区 3 は、調査範囲の北に位置し、標高約 33 m である。龍神や水神が祀っており、続く歩道部分に石垣上部が露出していたため、長さ約 13 m、幅 3～4 m のトレンチを設定し、掘削を行ったところ約 150 cm の深さで、導水路を検出した。なお、トレンチ東側は、鹿児島市水道局の水道管 (径 60 cm) 6 本と電気系統の管が通っている。

導水路 1 (第 25 図)

導水路 1 は、全長約 520 cm ・ 幅約 200 cm ・ 高さ 84 cm で、地盤の凝灰岩そのものを削って、床面と西側壁面を作り出している。床面は比較的丁寧な仕上がりをしており、一部ヒビ割れ部分にモルタルを使用して補強している。西側壁面は、荒い加工となっている。東側壁面は、凝灰岩の規格性の乏しい切石を積み上げている。床面に溝を切り、そこに切石をはめ水路の壁としている。目地にはモルタルが使用されている。

底石部分に、長さ 64 cm ・ 幅 14 cm の柄穴と考えられる凹みが加工してある。この凹みは、途中で使用しなくなったのか、凝灰岩とモルタルで塞がれている。同じように東側壁面の近くの地盤にも、長さ 36 cm ・ 幅 14 cm と長さ 12 cm ・ 幅 8 cm の 2 つの凹みが加工されている。

導水路 2 (第 25 図)

導水路 2 は、全長 240 cm ・ 幅 170 cm 残存している。凝灰岩の切石を積み上げて壁面を構築し、床面も綺麗に引き詰めて構築している。切石は全体的に丁寧な加工が施



第 14 図 瀧ノ上火薬製造所跡 トレンチ 2 石垣実測図

されている。目地には丁寧な仕上がりでモルタルが詰められている。L字状に屈曲しており、東側（稲荷川方向）へ水を誘導していた可能性がある。

導水路3（第25図）

導水路3は全長170cm・幅50cmで残存していた。深さ35cmのU字状に削り出した凝灰岩を、連結して構築している。凝灰岩は、他に比べて非常に質が悪い。




目地は、黒漆喰とモルタルが施してある部分がある。

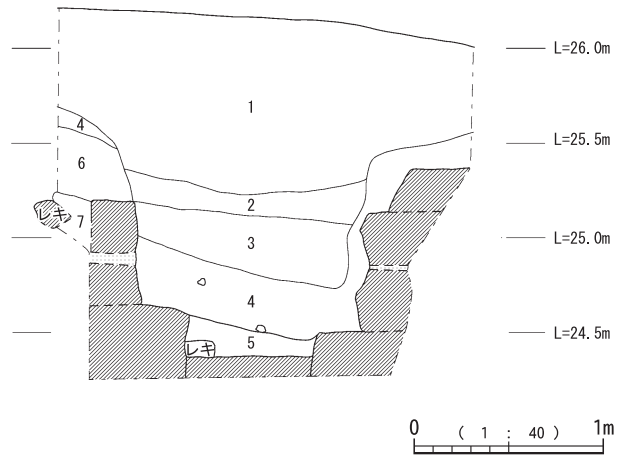
導水路3西側は、地盤の凝灰岩を削りだし、溜枡状に加工されている。大きく削平を受けているため、本来の形状は不明だが、平面形が一辺約200cmの四角形を呈していた可能性がある。

絵図では一番北の銃薬水車に周辺にあたり、水車に水を送る水路が描かれている。検出された導水路は、その水の引き込み口の可能性がある。

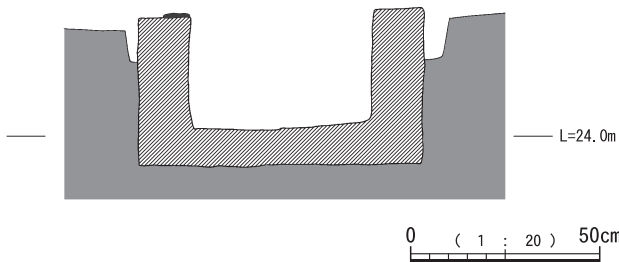
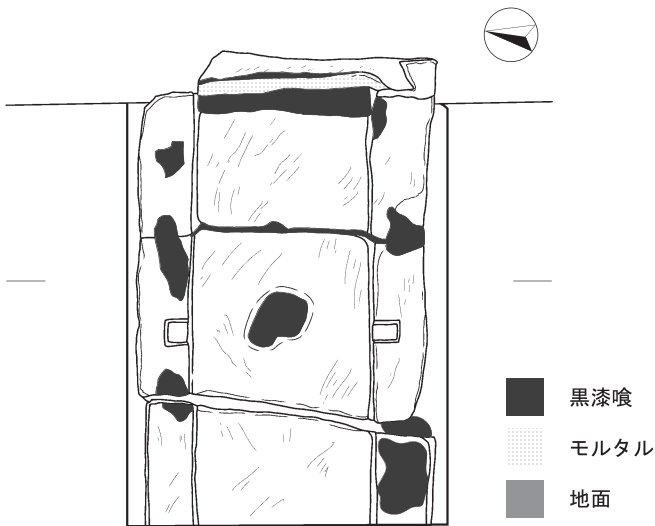
調査区3全体について

導水路1・2は、切石の凝灰岩の質や加工方法が同じで、目地にモルタルが使用されていることから同時期の可能性が高い。導水路3は、凝灰岩の質の違いや黒漆喰が一部残っていることから、火薬製造所操業時初期に構築された可能性が高いと考えられる。導水路1・2は、導水路3より新しいが、火薬製造所操業時に構築され、その後の改修等を経て、民間会社等が再利用したと考えられる。

-  黒漆喰
-  モルタル
-  後世の改変

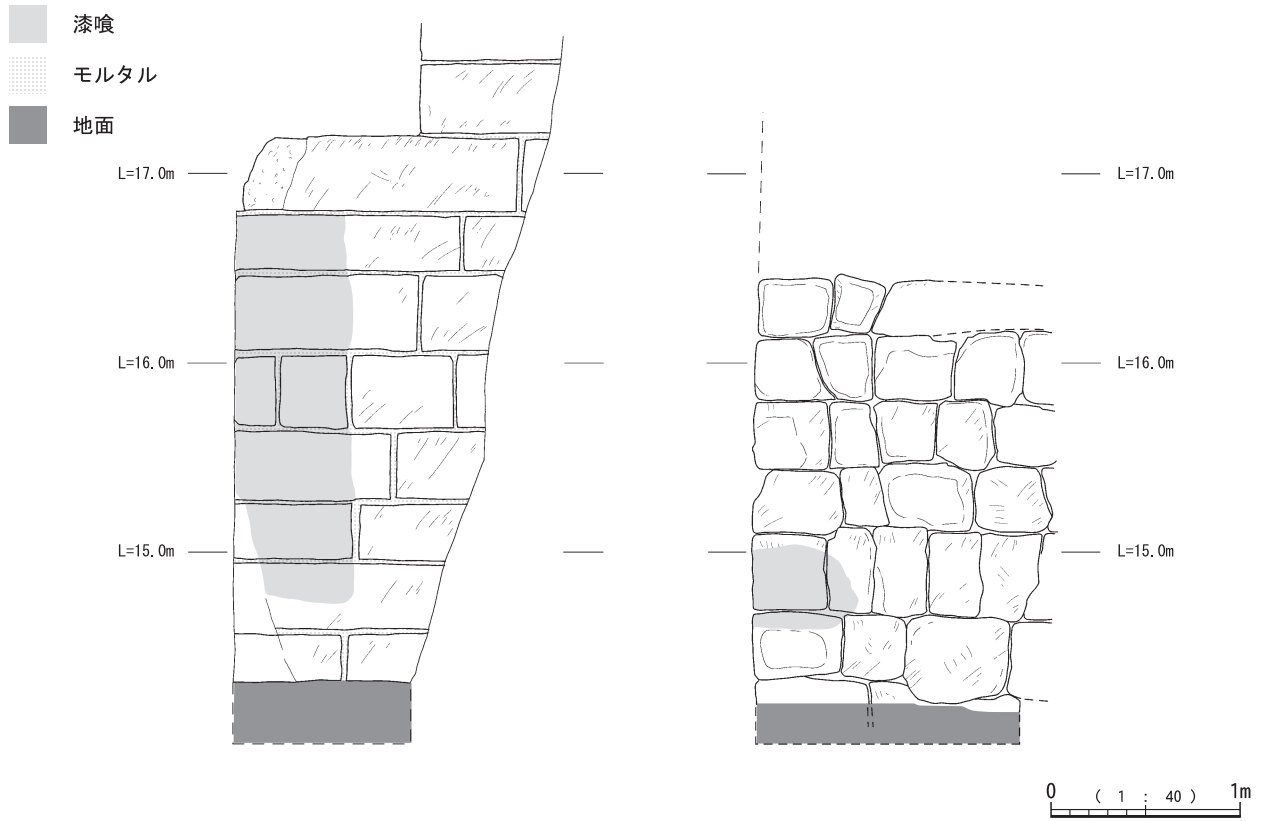


- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 砂質土, しまりなし
崖崩れ土 (シラス・礫主体)
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 砂質土, しまりあり
1mm~1cmの軽石の層
- 3 褐色土 (10YR4/4) 砂質土, しまりあり
粒子の細かい軽石の層
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり, しまりなし
- 5 にぶい赤褐色砂礫層 (5YR4/3) しまりなし
明赤褐色の1~5cmの礫を多量に含む
- 6 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) しまりあり
1~5cmの礫を多量に含む
- 7 暗褐色粘質土 (7.5YR3/3) 粘質土, しまりあり
10~20cmの礫を含む, 石垣裏込め



第15図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ3導水路実測図

第16図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ4導水路実測図



第17図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ5石垣実測図(左①・右②)



第18図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ5石垣写真



第19図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ6・7位置写真



第20図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ6写真

4 出土遺物について（第26図1～3）

今回の調査では、瓦や陶器が出土した。

遺物の出土は、調査対象範囲の南側の調査区1のトレンチ2からだけである。内訳は瓦片6点・陶器2点・埴1点である。そのうち、瓦片1点・陶器1点・埴1点を図化した。いずれもトレンチの硬化した5層（整地層）から出土しており、火薬製造所の遺物の可能性が高い。

1は苗代川の薩摩焼の壺底部である。復元径22cmで、外面は自然釉により赤褐色を呈している。内面は荒いナデで凹凸がある。

2は棧瓦片である。胎土が灰白色で、焼きが若干あまい。『銃薬方』（第7図）、『銃薬製造所図』（第8図）の建物には、瓦葺きの屋根も見られることから、火薬製造所の建物の瓦の可能性はある。

3は焼成が良好な瓦質な埴である。表面や側面は丁寧に整形されている。裏面は粗雑な整形で、工具痕が残り凹凸がある。見える外側と接地面を意識した作りとなっている。『銃薬製式録』（第7章総括参照）に煉瓦作りの建物の記載があり、その煉瓦の可能性はある。

5 石垣等の残存について

石垣や石積み遺構の残存範囲は、調査区1・2全範囲（第10図）と調査区3のトレンチで確認している。

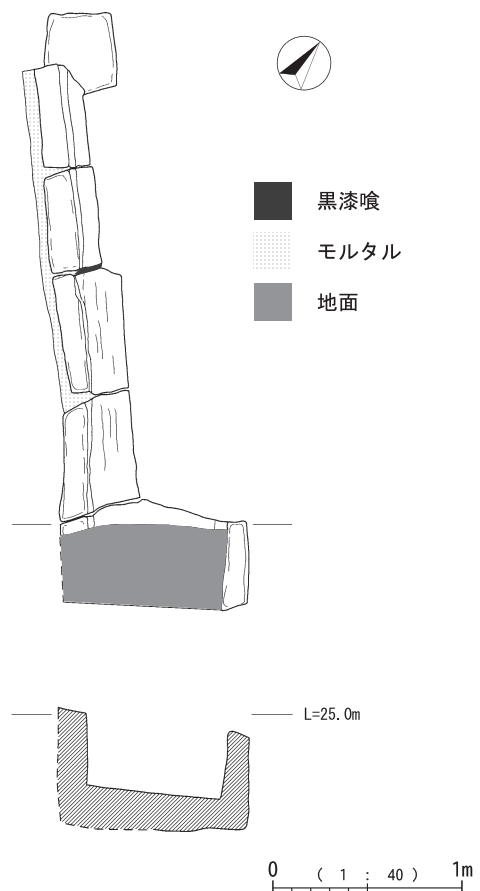
また、鹿児島市の調査により、第2地点（第10図南側調査区）から、敷石遺構が発見されており、その周辺も残存している可能性がある。



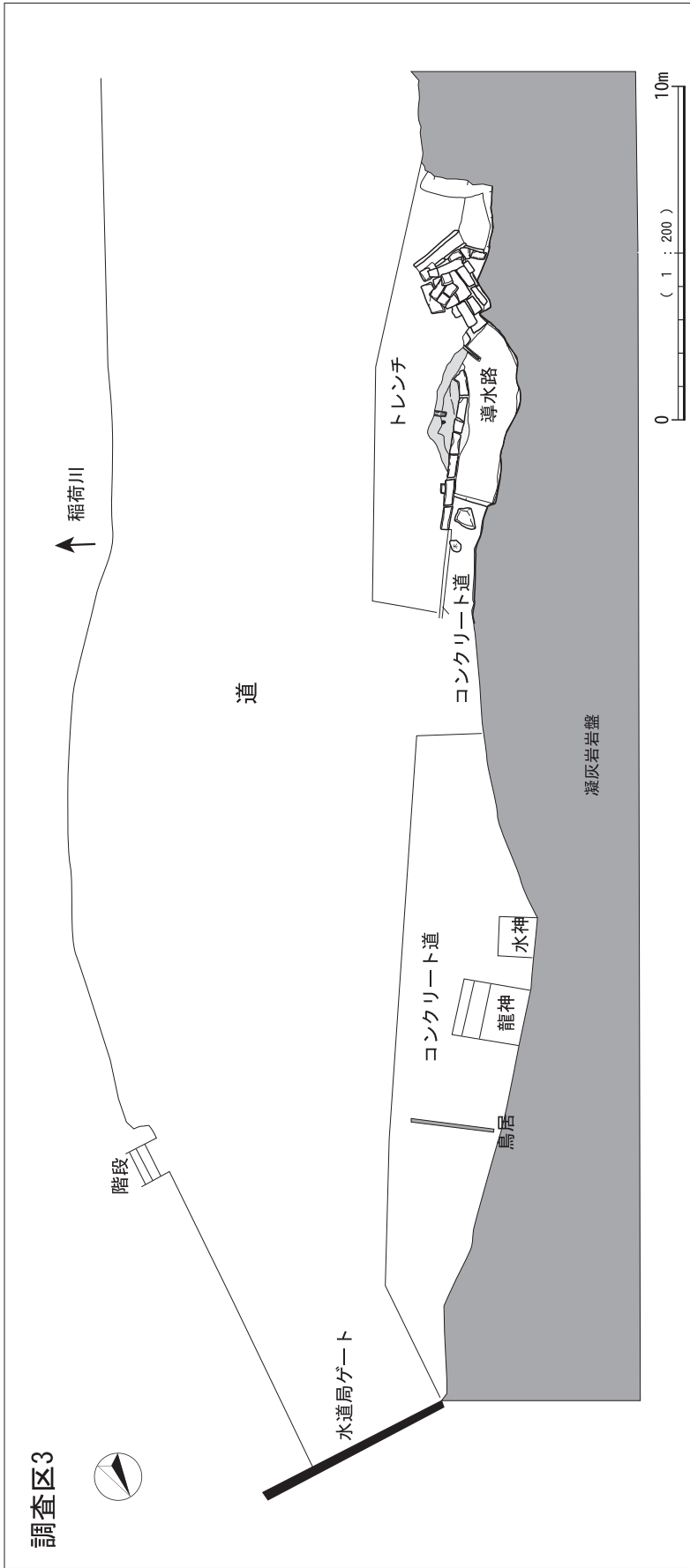
第22図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ8写真



第21図 滝ノ上火薬製造所跡 トレンチ7写真



第23図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区2導水路実測図



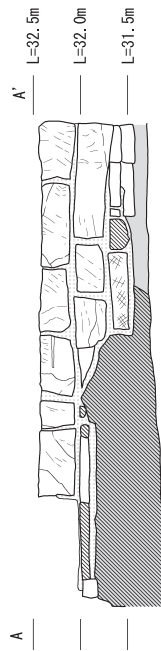
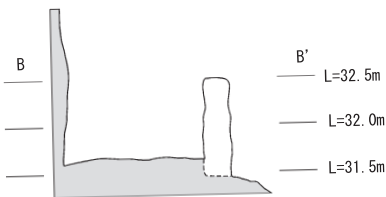
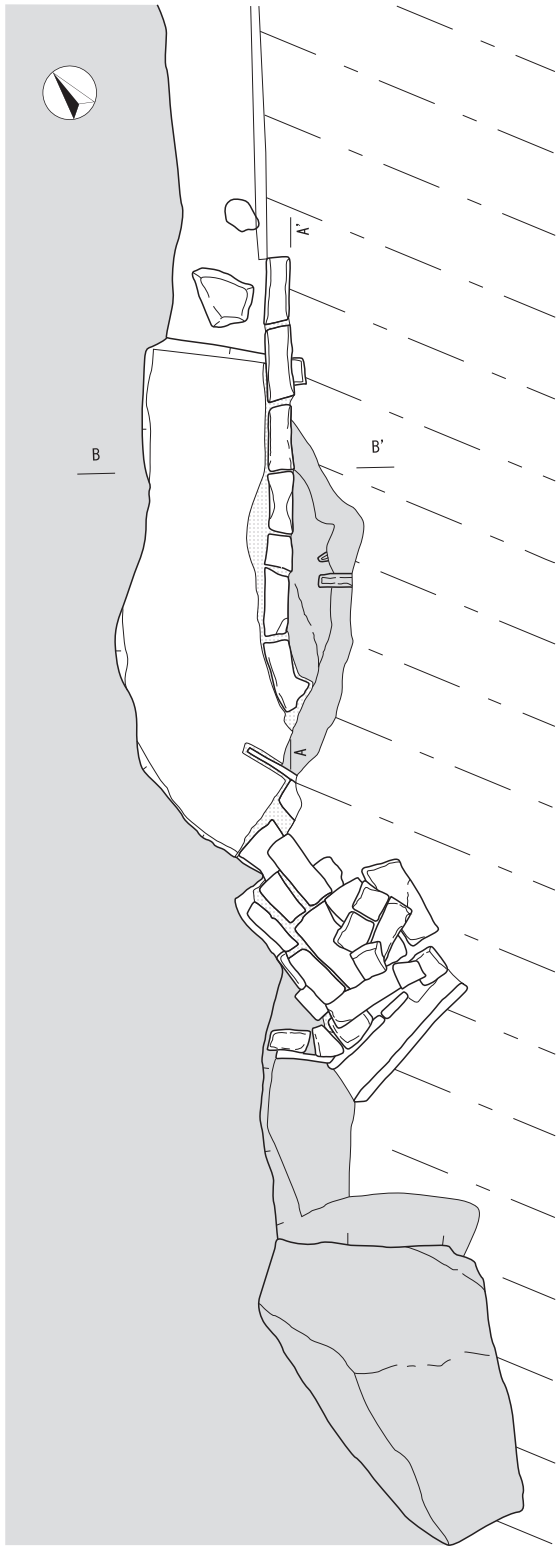
全体写真



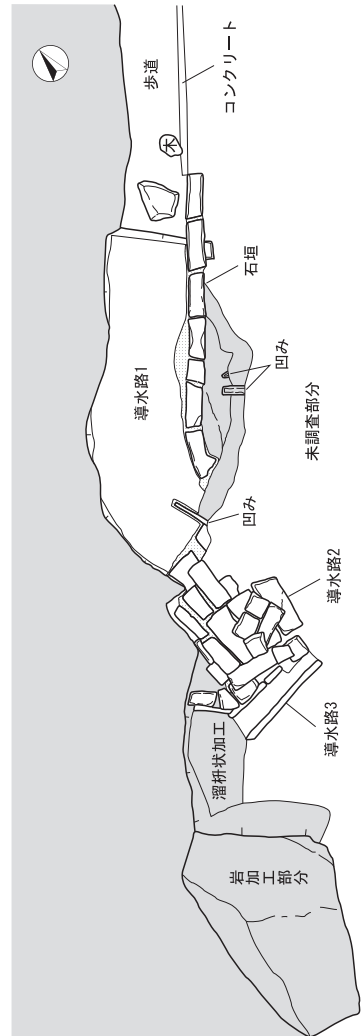
鳥居と龍神・水神
 滝ノ上火薬製造所跡 調査区3全体図



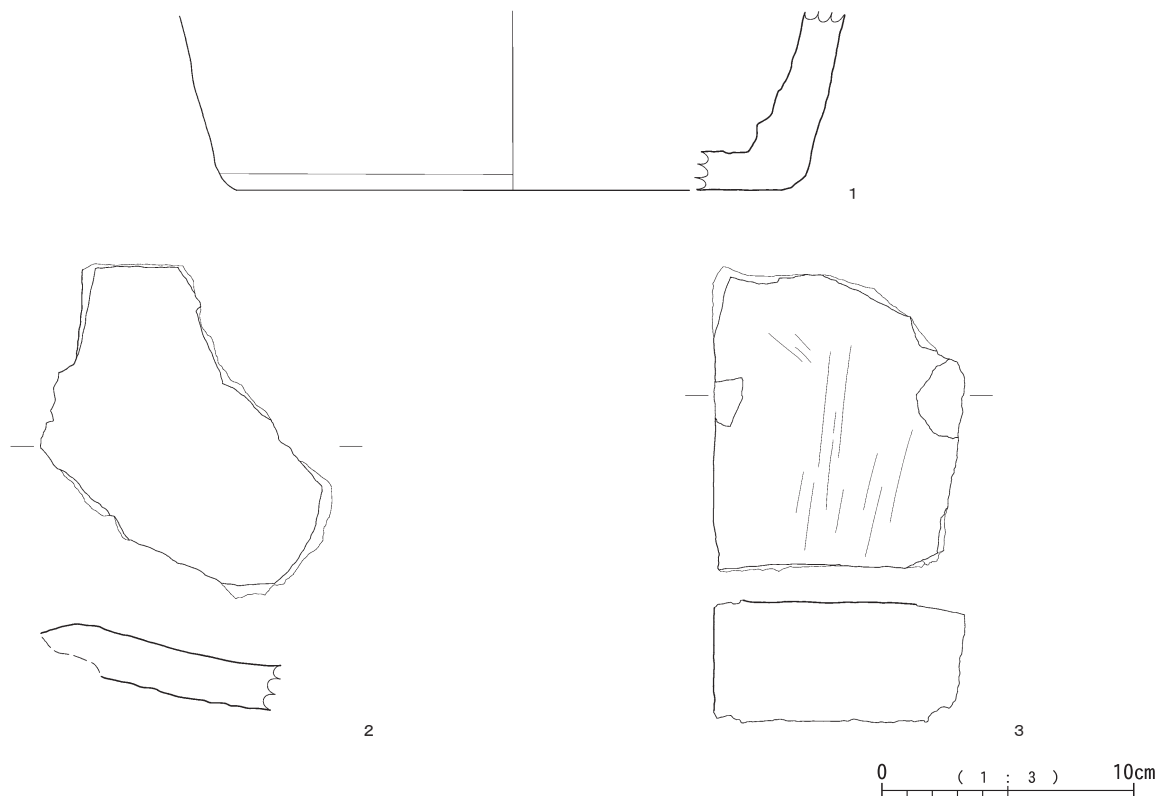
導水路



モルタル
溶結凝灰岩



第25図 滝ノ上火薬製造所跡 調査区3 導水路実測図



第26図 滝ノ上火薬製造所跡 出土遺物

第6表 陶器 観察表

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	取上 番号	トレンチ	層位	種別	機種	法量 (cm)				色調	産地	年代	備考
								口径	底径	器高	重量 (g)				
26	1	TKN 1	一括	トレンチ 2	5層 (整地層)	陶器	壺	—	22	(6.8)	(635)	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	薩摩	18～ 19世紀	

第7表 瓦 観察表

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	取上 番号	トレンチ	層位	種別	法量 (cm)			胎土色調	瓦色調	備考
							縦	横	厚さ			
26	2	TKN 3	一括	トレンチ 2	5層 (整地層)	棧瓦	(11.8)	(10.4)	1.8	灰白色 (2.5YR8/2) 白色小石少量混じる	灰色 (N5/0)	

第8表 埴 観察表

挿図 番号	掲載 番号	実測 番号	取上 番号	トレンチ	層位	法量 (cm)				色調	備考
						長さ	幅	厚さ	重量 (g)		
26	3	TKN 2	一括	トレンチ 2	5層 (整地層)	(11.5)	(9.5)	4.7	(635)	褐灰色 (10YR6/1)	灰色小石混じる

高熊山激戦地跡

第4章 高熊山激戦地跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

高熊山激戦地跡は鹿児島県伊佐市大口に所在する。

遺跡の所在する伊佐市は、面積 392 km² (東西 23km, 南北 27km), 県本土最北の自治体で、鹿児島県・宮崎県・熊本県の県境に位置し、北西は熊本県水俣市、北は人吉市、東は宮崎県えびの市に接している。平成 20 (2008) 年に、大口市と伊佐郡菱刈町が合併し誕生した。

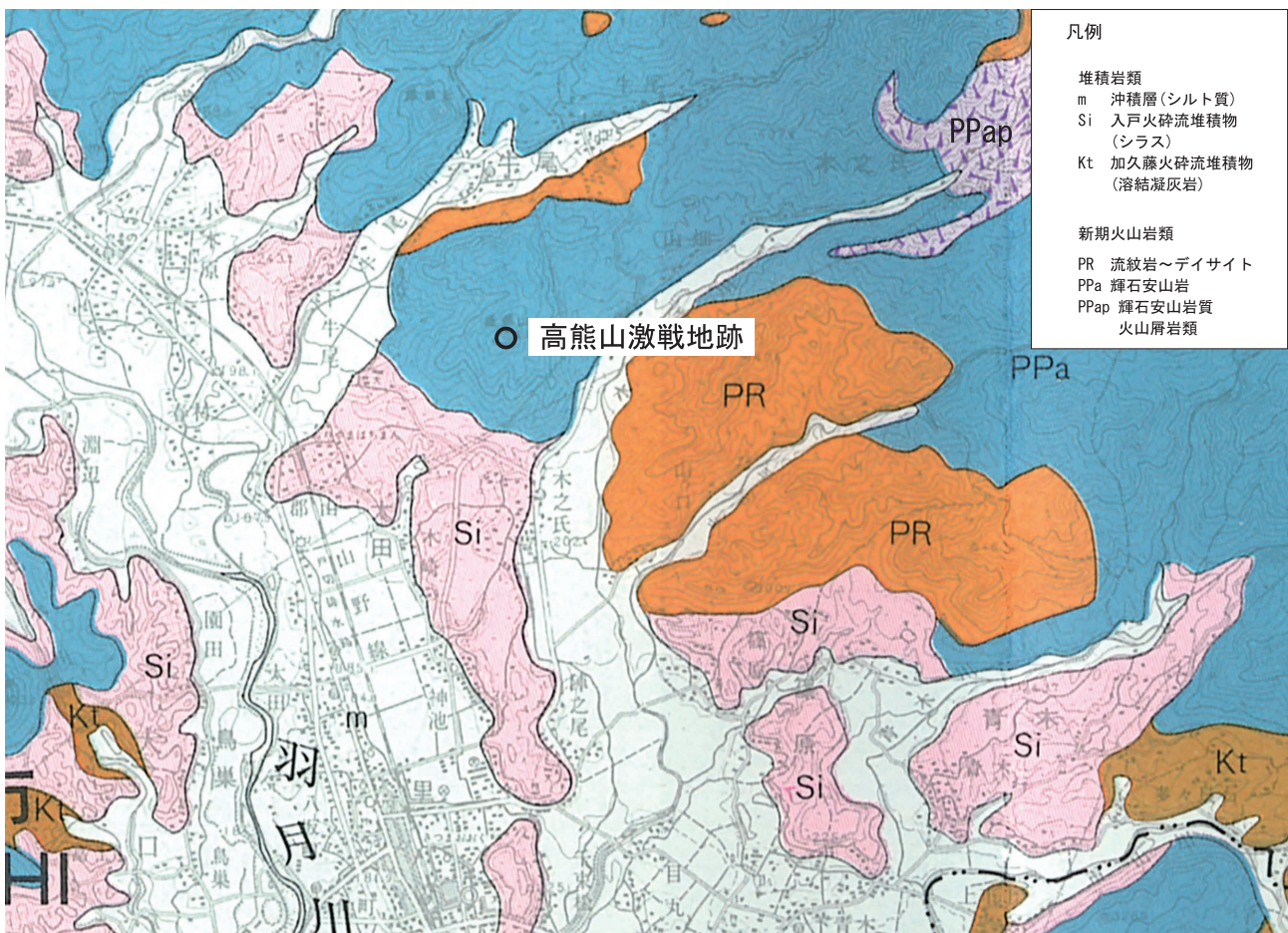
海に面していない市で、九州山地に囲まれた大口盆地を中心に市域が形成されている。大口盆地は、東に霧島山系、西に矢筈岳及び上場高原、南に鳥帽子岳山系、南西に紫尾山系、北に北見山、間根ヶ平山系に囲まれている。

このように四方を山地に囲まれ、最低海拔高度 100 m, 平均海拔高度 180 m の高地に位置しており、最も近い海まで 35 km 以上離れているため、鹿児島県のほかの地域に比べて内陸的な気候となる。そのため、冬は「鹿児島の北海道」と言われるほど寒く、一方で夏は高温多湿になることが多い。また、大口盆地は火山活動によって形成されたため、かつて酸性白土や軽石の採掘が行われており、菱刈鉱山は日本最大の金鉱山として現在も操業が

続いている。日東や五女木などで産出する黒曜石を使用した石器が、県内各地の遺跡から出土している。

盆地中央部は、川内川水系である羽月川、水之手川、牛尾川等の中小河川が周辺の山地から流入し、川内川に合流している。川内川は、大口盆地南部を東西に流れ、南東部で「東洋のナイヤガラ」と呼ばれる曾木の滝を下り、大鶴湖(鶴田ダム人工湖)に流入している。流域では、加久藤火砕流堆積物が、天然のダムと盆地となり、平時は米作りの水源となる一方、水害の要因ともなっている。また、川の浸食と堆積によって、沖積平野や河岸段丘を形成し、その河岸段丘の上に多くの遺跡が立地している。

高熊山激戦地跡は、大口盆地の北東にある高熊山(標高 412 m)の山頂に位置し、現在は公園となっている(第 28 図)。高熊山は約 80~50 万年前の火山活動による壮年期の輝石安山岩山地のため、急傾斜の多い地形となっている。地理的には、始良市から伊佐市を抜けて肥後に向かう「大口筋」、人吉から久七峠(標高 732 m)を越え大口に至る肥薩を結ぶ重要な交通路沿いにあり、人吉市から伊佐市を経て薩摩川内市に至る国道 267 号を一望



第 27 図 高熊山激戦地跡 周辺地質分類図 (鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変)

できる。また、東側に坊主石山（標高 447.6 m）、南西側に鳥神岡（標高 403.9 m）を拝している。

2 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

伊佐市の考古学研究の第一歩は、早稲田大学文学部史学科を卒業後、旧制大口中学に赴任した木村幹夫氏と、九州大学医学部を卒業し旧大口市で開業していた寺師見國氏によって開始され、学史に残る多くの遺跡がある。また、伊佐市大口では 137 か所（令和 2 年 8 月）が「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている。以下に、高熊山激戦地跡が所在する旧大口市域を中心に、時代ごとの概要を述べる。

旧石器時代

日東、五女木は黒曜石の原産地として知られており、産地周辺から発見される遺跡も多い。

旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器や細石刃が出土している日東遺跡、尖頭器・石核・削器等が出土している五女木遺跡、新開原遺跡（細石器文化期の遺物多数）、小野原遺跡、郡山遺跡（ナイフ形・尖頭器・細石器）が挙げられる。

縄文時代

大口盆地をとりまく外輪山から飛び出した舌状台地にあり、眼下には、川内川の支流が流れる絶好の位置に多く所在する。

早期の遺跡としては手向山式土器・塞ノ神式土器の標式遺跡である手向山遺跡や塞ノ神遺跡のほか、松尾山遺跡、小野原遺跡、勝毛遺跡などがある。前期の遺跡としては、曾畑式土器が出土している日勝山遺跡や辻町遺跡、瀬ノ上遺跡がある。中期の遺跡としては、並木式土器の標式遺跡である並木遺跡や島巡遺跡、勝毛遺跡が、後期の遺跡としては西平式土器が多数出土した並木口遺跡や大牟田遺跡が挙げられる。晩期の遺跡としては埋設土器が検出された下殿瀬ノ上遺跡をはじめ、辻町遺跡、島巡遺跡、上尾下遺跡、新開原遺跡がある。

弥生時代

川内川支流の微高地上に遺跡が立地している。遺跡としては、免田式土器が出土した大住遺跡・焼山遺跡・浜場遺跡・里町遺跡、石包丁や磨製石鏃、挟入石斧が出土した下青木遺跡・大住遺跡などがある。また、下鶴遺跡からは土坑 52 基と壺棺 1 基と弥生時代の武器形青銅器としては、県内 2 例目となる銅戈が出土している。

古墳時代

川内川支流の河岸段丘や微高地上に立地する遺跡が多い。大口周辺では、高塚古墳は見られず、南九州独自の墓制である地下式板石積石室墓と地下式横穴墓が多数発見されている。地下式板石積石室墓は川内川流域から熊本県南部まで広く分布しており、地下式横穴墓は宮崎県から大隅地方・北始良・伊佐に限定して分布している。大口地域はこの 2 つの墓制がちょうど重なる地域であ

る。多数見られる例として、約 140 基の地下式板石積石室墓と 10 基の地下式横穴墓が検出された瀬ノ上・平田遺跡、34 基の地下式板石積石室墓が検出された大住遺跡、90 基以上の地下式板石積石室墓が現地保存されている焼山遺跡が挙げられる。また下鶴遺跡では堅穴住居跡が 93 基検出されている。

古代

平安時代初期に編纂された『続日本紀』には、天平勝宝 7（755）年 5 月に大隅国菱刈村の浮浪者 930 人余りが郡家を建てることを要求し、朝廷が許可したとの記録があり、この年に菱刈郡が誕生したことがわかる。十世紀前半に編纂された『和名抄』には、菱刈郡は「比志加里」と読み、羽野・亡野（出野）・大水・菱刈の四郷からなると記されている。本遺跡の所在する大口周辺は大水郷の一部であることが推測される。

古代の遺跡としては、鳥巢遺跡、荻原遺跡、斧トキ遺跡、原田遺跡が挙げられ、いずれの遺跡でも須恵器の火葬墓（蔵骨器）が発見されている。また、北薩地域に集中する傾向が窺える土師器の高台に胴部と異なる赤色粘土を用いた土師器が、多数出土している大峰遺跡がある。さらに、岡野古窯跡群では須恵器窯跡が 4 基確認されている。

中世

中世に入ると菱刈郡は旧大口市にあたる牛屎院と旧菱刈町にあたる太良院の両院となり、牛屎院は牛屎氏に太良院は菱刈氏に支配される。12 世紀初頭には島津家初代島津忠久が、薩摩国の守護職兼総地頭職とし入国してくる。その後、牛屎院を長く支配していた牛屎氏は、菱刈氏・相良氏に追われて飯野（現在のえびの市）に移り、牛山城（大口城）は菱刈氏・相良氏の根拠地として島津氏と勢力を争い、その城主も変転する。戦国時代に入ると島津氏が優勢となり、大口城を攻勢し、永禄 12（1569）年、菱刈氏・相良氏は和議降伏をする。その年、牛屎院の地頭職に新納忠元が任命され、この前後から大口という地名が使われるようになる。

中世の遺跡としては新平田遺跡や馬場 A 遺跡の 2 つの遺跡は、平泉城跡と時期が一部重なることから平泉城を中心に形成された集落跡ではないかとも推測されている。

近世

近世の遺跡としては広徳寺古墓と王城古墓が挙げられ、人骨と副葬品の古銭が出土している。

外城制度（天明 4（1784）年、郷へ改称）に関連するものとして、地頭仮屋、境目番所・辺路番所・厩役所・馬改所などがあった。交通網に目を向けると、陸上交通では、主要街道の一つである大口筋（始良市加治木町・霧島市横川町・伊佐市を経て水俣に至る）が通っていた。伊佐市は熊本（肥後）、宮崎（日向）と接しているため、他国境目番所・辺路番所が多く設けられていた。

近代

明治 42（1909）年に竣工した曾木発電所は、当時日

本最大出力を誇る水力発電所であり、日本の近代化学工業発祥のきっかけとなった発電所である。現在は下流にあるダム建設に伴って、基本的に水没してしまっているが、閑水期には煉瓦造りの建物を見ることができる。

平成 18 (2006) 年に国の登録有形文化財となり、平成 19 (2007) 年に近代化産業遺産に認定されている。

3 高熊山激戦地跡略史

(1) 戦闘状況

熊本から退却した西郷軍は、明治 10 (1877) 年 4 月下旬に本営を人吉に置き、俊険なる人吉の要害を堅守し、西は大口・水俣方面を、東は豊後方面に進出して、政府軍を牽制し、鹿児島にも部隊を派遣する作戦を実行に移していく。これに伴い、辺見十郎太率いる雷撃隊と池辺吉十郎率いる熊本隊等計約 1,000 名は大口へ向かうこととなる。

5 月初旬、政府軍 (第 3 旅団) が水俣から山野 (大口) へ進攻するが、5 月 10 日雷撃隊・熊本隊の攻勢によって水俣近くまで押し返される。その後も、大口周辺では戦闘は続いたが、6 月 1 日の人吉陥落により戦線が大口まで迫ることとなる。大口北西の水俣方面からは第 3 旅団が、大口北東の人吉方面からは別働第 2 旅団が大口へ向け進攻しており、6 月 7 日に水俣の久木野、6 月 8 日には大口の小川内、6 月 13 日には大口の山野を占領した。対する西郷軍は大口に拠点置き、高熊山には池辺吉十郎率いる熊本隊が、高熊山の東側にある坊主石山には辺見十郎太率いる雷撃隊が陣を敷いた。高熊山周辺における 6 月 13 日～20 日までの戦況は以下のとおりである。

- 6 月 13 日 熊本隊が高熊山山頂に布陣。
宿舎建設及び堡壘建設。
- 6 月 14 日 坊主石山に雷撃隊・正義隊が布陣。
大口に拠点設置。
- 6 月 15 日 西郷軍、山野の攻撃を決定。
- 6 月 16 日 西郷軍、山野を攻撃するも撤退。高熊山に退却。別働第 2 旅団、左翼を芝立山・右翼を黒萩山へ展開。四斤山砲 2 門・ブロードウェル砲 2 門を黒萩山へ設置し、高熊山・坊主石山の西郷軍の堡壘を砲撃。河泉山の西郷軍退去。
- 6 月 17 日 別働第 2 旅団へ小林方面へ向かうように命令が出るが、明 18 日に第三旅団と合同で高熊山・坊主石山を攻撃することが決定していたため、黒萩山に留まる。
- 6 月 18 日 第 3 旅団、高熊山へ攻撃。高熊山の熊本隊、巨石投下などにより抗戦。
別働第 2 旅団、高熊山・坊主石山へ攻撃。坊主石山陥落。雷撃隊・協同隊、坊主石山を奪還すべく東南 2 方向より攻勢をかけるも失敗。
- 6 月 19 日 坊主石山を占領した政府軍は、第 3 旅団 8 門、別働第 2 旅団 4 門の計 12 門の大砲をもって、東・北・西の 3 方向より高熊山へ向け砲撃。
- 6 月 20 日 第 3 旅団、暗闇に紛れ高熊山を襲撃。高熊

山陥落。第 3 旅団・別働第 2 旅団、連合して大口の西郷軍守備を突破。大口陥落。

(2) 過去の調査 (整備事業)

高熊山激戦地跡は、昭和 53 (1978) 年 10 月 1 日に大口市 (現:伊佐市) の指定文化財となり、昭和 58 (1983) 年には公園として整備されている。整備の際には、弾丸・薬莖・貨幣・刀剣などが発見されている。旧大口市教育委員会により堡壘配置の略図が記録されているが、詳しい報告は残されていない。

高熊山麓の大口木ノ氏地区では、平成 2 (1990) 年に地区住民や郷土史研究会の手によって、高熊山で戦死した西郷軍の熊本隊の墓地が整備され、「熊本隊戦没隊士銘碑」が建てられている。また、坊主石山麓の大口篠原山ノ口地区には、出水郡出身の西郷軍兵士 37 名が、地区住民により埋葬され供養が行われていた。現在の石碑は昭和 54 (1979) 年に地区の住民によって、「西南の役従軍無名兵士無縁者之霊碑」が再建されている。その他、西郷軍の戦死者を供養するための招魂碑が、従軍した各郷の麓である大口・山野・羽月・曾木・菱刈・湯之尾に建立されている。

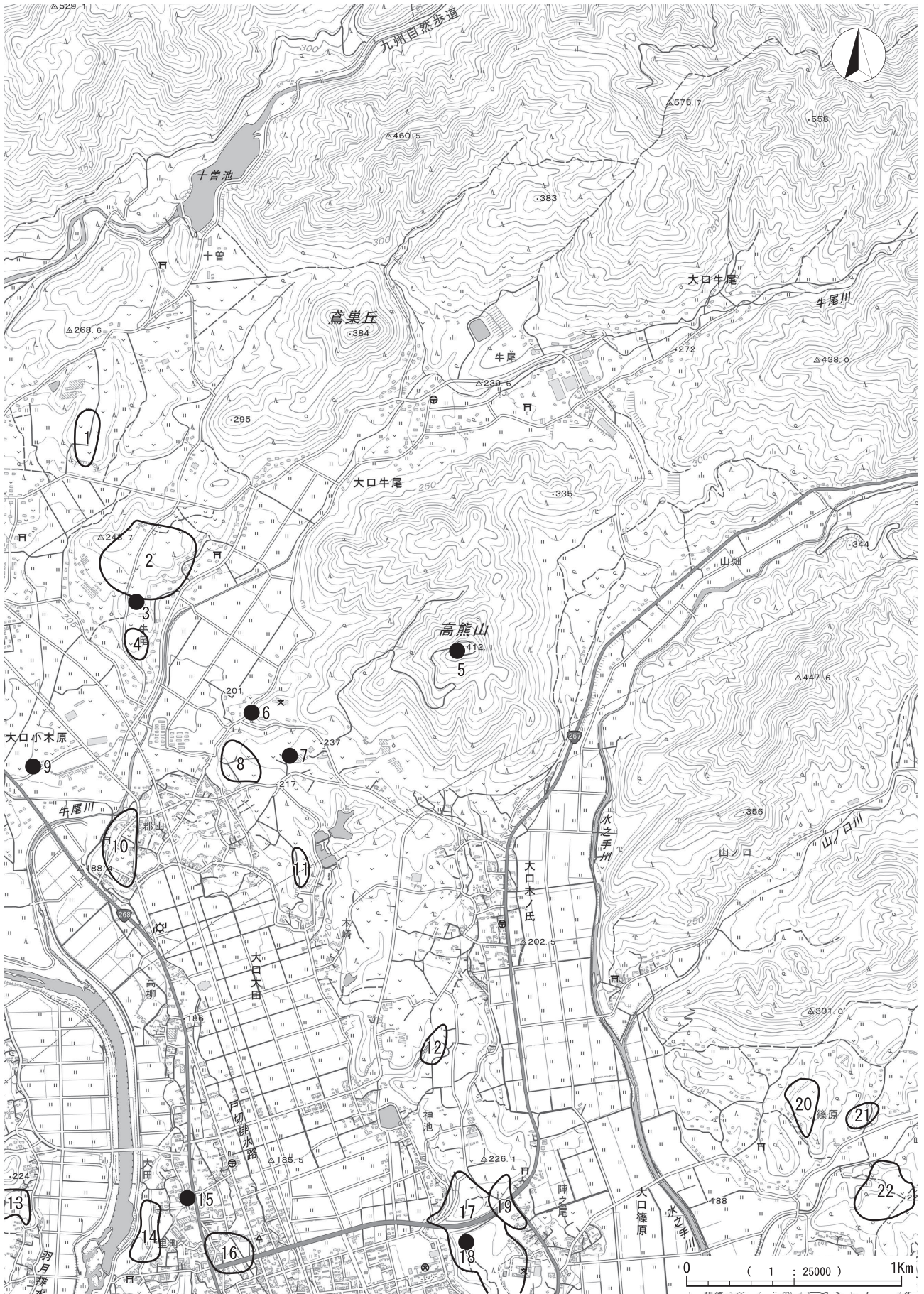
雷撃隊が大口から撤退するとき、辺見は現在の池田橋付近にあった当時の松並木で馬を止め、高熊山を振り返り望遠しながら「死を賭して固守すること四区余の山壘、いまこの要害の地 (高熊山) を養鎮 (政府軍) に奪わる。ああ、吾が事終わった。今は鹿児島に帰って死に就かんのみである。」嘆き、涙したと言われている。以後、「逸見どんの涙松」と呼ばれ、保護されていたが、落雷により松はなくなり、現在は記念碑が建てられている。

(3) 研究史

平成 16 (2004) 年、高橋信武氏により高熊山頂上堡壘 (氏は台場と呼称) 群の略図作成及び周辺の踏査が行われた。高熊山中腹や鳥神岡での堡壘の存在も報告されている (高橋 2005)。

【引用・参考文献】

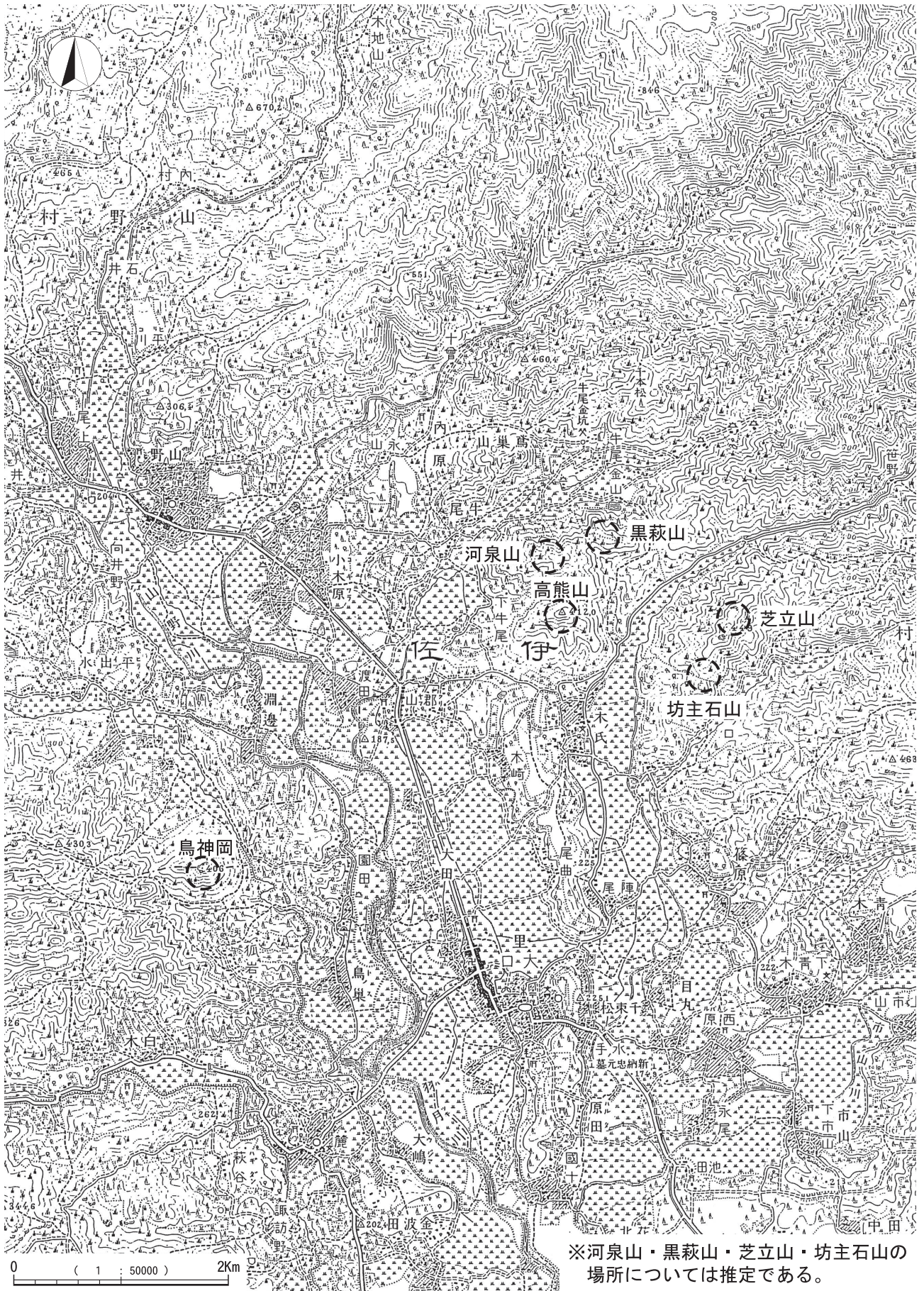
- 安藤定 1887 『別働第二旅団戦記卷之四』
- 大口市郷土誌編さん委員会 1981 『大口市郷土誌上巻』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『陣之尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (134)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2017 『里町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (191)
- 佐々友房 1891 『戦袍日記』
- 高橋信武 2005 「高熊山へ」『西南戦争之記録 第 3 号』JACAR (アジア歴史資料センター), 「戦闘報告表 明治 10 年 5 月 18 日～10 年 7 月 10 日 (防衛省防衛研究所)」
Ref. C09084795300 Ref. C09084795400 Ref. C09084795500
Ref. C09084795700 Ref. C09084795800 Ref. C09084795900
Ref. C09084796000 Ref. C09084796100 Ref. C09084798200
Ref. C09084800200 Ref. C09084800300 Ref. C09084800300
Ref. C09084800400 Ref. C09084800500 Ref. C09084800600
Ref. C09084800700 Ref. C09084800800 Ref. C09084801100
Ref. C09084801200 Ref. C09084801400 Ref. C09085245000
Ref. C09085245100 Ref. C09085438600 Ref. C09085439700
Ref. C09086074800 Ref. C09086075100



第 28 図 高熊山激戦地跡 周辺遺跡位置図 (国土地理院 1 : 25,000 地形図『大口』『山野』『飯塚』『吉松』改变)

第9表 高熊山激戦地跡 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
1	永山	224	113	伊佐市大口山野 小木原永山	丘陵		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布 調査報告書 (VII)』 県埋文報 (73)
2	牛尾城跡	224	49	伊佐市大口牛尾	台地						●			『鹿児島県の中世城館跡』 県埋文報 (43)
3	日勝山	224	11	伊佐市大口山野 小木原日勝山	丘陵		●							『考古学』 第7巻9号
4	小城	224	114	伊佐市大口牛尾 小城	台地		●	●						『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布 調査報告書 (VII)』 県埋文報 (73)
5	高熊山	—	—	伊佐市大口木ノ 氏高熊	山地								●	本報告書 伊佐市指定文化財 (昭和 53. 10. 1)
6	牛尾小学校	224	15	伊佐市大口牛 尾・牛尾小学校	台地		●							『鹿児島県考古学会紀要』 1
7	木崎原	224	13	伊佐市大口牛尾 木崎原	丘陵		●							『考古学雑誌』 22-10
8	木崎原	224	11	伊佐市大口牛尾 木崎原	台地		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布 調査報告書 (VII)』 県埋文報 (73)
9	春村地下式 横穴	224	27	伊佐市大口小木 原春村	台地			●						『鹿児島県文化財報告書』 (4)
10	郡山城跡	224	54	伊佐市大口郡山	台地	●	●				●			大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 (14)
11	大儀司	224	111	伊佐市大口大儀 司	舌状 台地		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布 調査報告書 (VII)』 県埋文報 (73)
12	軍神ノ上	224	112	伊佐市大口大田 軍神ノ上	台地		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布 調査報告書 (VII)』 県埋文報 (73)
13	上松 A	224	63	伊佐市大口鳥巢 上松	平地			●						平成 2 年分布調査
14	黒岩	224	132	伊佐市大口大田 黒岩	河岸 段丘						●			大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 (25)
15	大田地下式 横穴	224	24	伊佐市大口大田 横手	平地			●						『考古学雑誌』 26-6
16	里町	224	22	伊佐市大口里町	沖積地		●	●	●	●	●	●	●	大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 (26) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (191)
17	陣之尾城跡	224	31	伊佐市大口篠原 陣之尾	舌状 台地		●	●			●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (134)
18	成就寺地下 式横穴	224	25	伊佐市大口里成 就寺	台地			●						『鹿児島県文化財報告書』 (4)
19	芳ヶ迫	224	137	伊佐市大口木ノ 氏芳ヶ迫	平地			●						平成 13 年分布調査
20	篠原城跡	224	30	伊佐市大口篠原 城ヶ岡	丘陵						●			『鹿児島県の中世城館跡』 県埋文報 (43)
21	島巡	224	12	伊佐市大口篠原 島巡	丘陵		●	●	●					大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)
22	星ヶ峯	224	88	伊佐市大口篠原	低地		●							大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 (16)



第 29 図 明治 35 年高熊山激戦地跡 周辺地形図 (1 : 50,000・『大口』改変)

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

高熊山激戦地跡の調査は、伊佐市が管理している高熊山公園（約 10,000 m²）（第 31 図）を調査対象とした。

現地踏査や、伊佐市教育委員会との協議、高橋信武氏（日本考古学協会員）、新東晃一氏（南九州縄文研究会）の調査方法等に関する指導などを踏まえ、9基の堡塁の精査と構造解明のためのトレンチ調査、周辺地形と堡塁配置の検討、銃弾などの遺物の発見を主な調査目的とした。

遺構配置図の作成にあたっては、世界測地系による3級基準点を設置した。遺構配置図及びトレンチ位置等は、トータルステーションと平板による実測を行った。なお、基準点設置・遺構配置図作成業務は委託して行い、基準点等のデータ一式は埋文センターに保管してある。

調査に際しては、まず竹や樹木の伐採、倒木や枯れ葉の除去等を行い、堡塁の残存状況を確認した。その後、当時の銃弾があることを想定して、調査区全体に金属探知機による調査を行い、反応のあった部分を掘り下げ、銃弾等の遺物の検出を試みた。出土した遺物は、位置を記録して、取り上げを行った。

堡塁の調査にあたっては、まず銃弾等の発見のために、

金属探知機による調査を実施した。遺構の保護を図るために、トレンチ以外の部分は、伐採や清掃のみとした。

倒木で壊れた堡塁7号を利用して、崩壊部にトレンチを設定し、下部構造の調査を行った。調査終了後は、崩壊部分を調査結果に基づき復元を行った（第45図）。堡塁9号は、胸壁部分に礫が集中していたため、短軸方向にトレンチ調査を行った。当時の面まで掘り下げを行い、調査後、埋め戻しを行った。

2 整理作業の方法

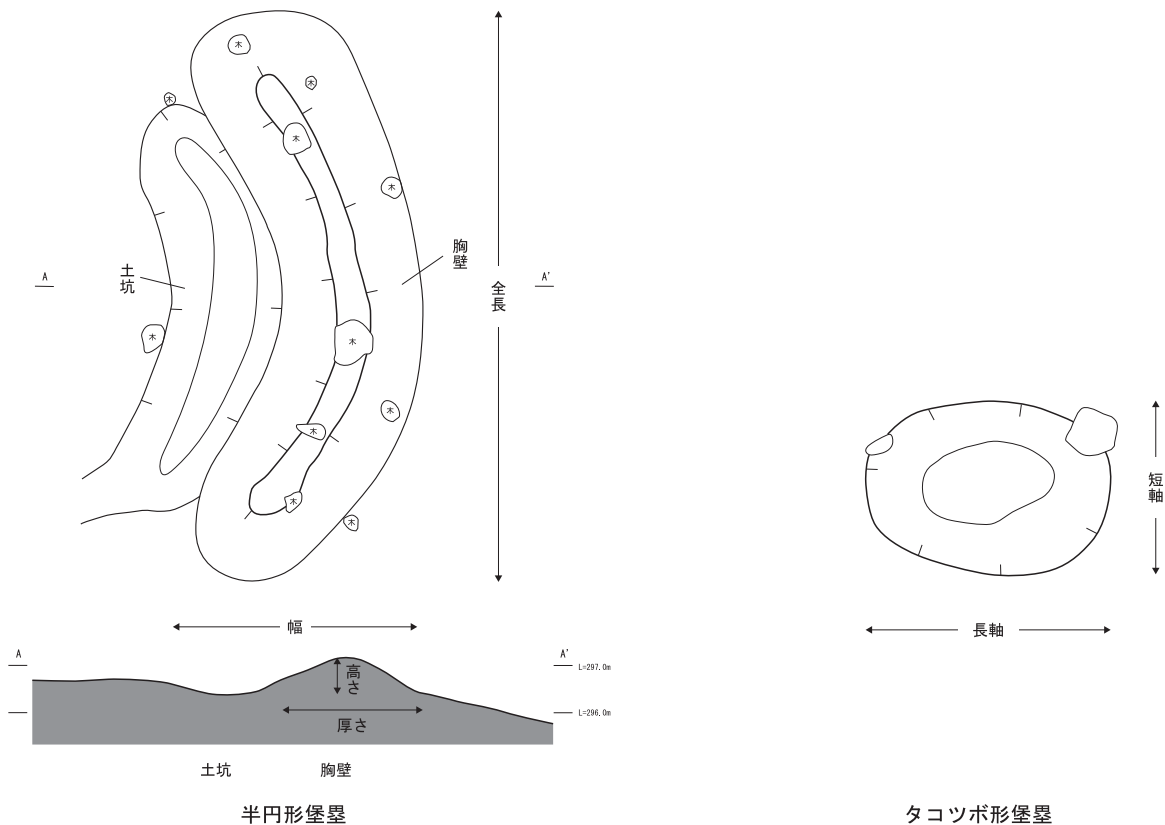
銃弾などの金属器が主な出土遺物のため、クリーニングを行った後に、X線撮影と実測を行った。作業終了後は、保存処理を行った。

第3節 堡塁の分類

高熊山激戦地跡の層序については、トレンチを設定した堡塁ごとで異なっていたことから、各堡塁実測図で記述する。

堡塁は半円形堡塁とタコツボ形堡塁の2形態が存在した。堡塁の部位名は、前面高まりを胸壁、身を隠していた穴の部分を土坑として記述する。また、堡塁の各計測箇所は第30図のとおりである。

なお、各堡塁平面図は、表土での現況図である。



第30図 堡塁部位名称及び計測箇所

第4節 高熊山激戦地跡の調査成果

堡壘の調査は、清掃を行った後、現況測量を行い、規模や特徴を調査・記録することとした。堡壘7号は、平成30年度に台風による倒木があり、一部が破壊されていたため、その部分にトレンチを設定して、調査を行った。堡壘9号は、単独で南側に配置されたものである。他と異なり、胸壁部分に礫の集中が見られたため、集中部にトレンチを設定して調査を行った。堡壘の配置状況と各堡壘毎に詳述していきたい。出土遺物については、出土状況を各遺構の項で記述し、遺物個別の特徴等については遺物の項で詳述する。

1 堡壘の配置及び構造について

高熊山（標高412m）は、山頂以外は急傾斜の多い山容となっている。ただし、山頂部分には、巨石が点在しているが、比較的平坦である。

山頂部には、西郷軍の9基の堡壘が確認された。そのうち北東側には、半円形堡壘（堡壘3号～7号）が5基とタコツボ形堡壘1基（堡壘2号）が山頂に2重になるように構築されている（第32図）。1つの巨大な堡壘として機能していたと考えられる。6基を合わせた規模は全長約20m、幅約10mである。その中で、最大の堡壘は7号で、他の堡壘の後方に位置し、2号～6号を見渡せる。堡壘3号・4号・5号・6号と7号の間は通路状の造りとなっており、その通路状の西に堡壘2号が位置している。これら6基は、政府軍が陣を張ったと推定される黒萩山、芝立山、坊主石山方面を守備するよう配置されている。その他の堡壘は、単体で構築されており、尾根筋から進入してくる政府軍を監視・攻撃したものと推定される。南側斜面を意識して構築された堡壘はない。

堡壘構造は、胸壁と土坑からなる。胸壁は、銃撃を防ぎ、土坑は胸壁裏に掘られており、兵士が身を隠す場所である。胸壁は、土坑を掘り上げた土や礫を使って構築し、地盤の礫が多量に混じる。また、急傾斜の地形や巨石を利用して、高さを増すようになっている。斜面から進行してくる政府軍からは、見上げる体勢となり、堡壘後背の山頂や土坑を確認することはほとんどできない。土坑は、地盤を掘り込んで深さを確保している。

2 各堡壘の調査について

(1) 堡壘1号（第33図）

山頂北側に単独で構築されている半円形堡壘である。

現況計測値は、全長640cm、最大幅384cmで、胸壁の厚み128cm、高さ24cmである。

胸壁は等高線に沿って、傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は胸壁に沿うように長楕円形を呈しており、深さは20cmである。

堡壘の北側は、急斜面となっている。斜面側から見上

げる体勢となり、堡壘内を見込むことはできない。

後背にあたる南側には巨石が2つあり、巨石の北面側を中心に銃弾痕や砲撃痕と考えられる凹凸が無数にある。

(2) 堡壘2号（第34図）

楕円形を呈するタコツボ形堡壘である。山頂北東側に6基が集中する堡壘群では一番西側に位置する。現況計測値は、長軸244cm、短軸220cmである。深さは北側斜面からは20cm、南側の後背地からは60cmである。

堡壘2号の斜面側には、胸壁に利用した可能性がある幅160cm、高さ170cmの巨石がある。巨石北面に銃弾痕や砲撃痕と考えられる凹みが無数にある。

(3) 堡壘3号（第34図）

半円形堡壘で、山頂北東側集中する6基の堡壘群では一番北側に位置する。北側斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は、全長660cm、最大幅464cmで、胸壁の厚み280cm、高さ36cmである。土坑は胸壁に沿うように長楕円形を呈しており、深さ40cmである。

胸壁は等高線に沿って、傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は明らかに掘削をしており、その掘削土を利用して胸壁を一段盛り上げている。

土坑は掘削されているが、西側は平坦となっており、出入り口等の可能性も考えられる。

遺物は、胸壁前面から頂部にかけて、エンフィールド銃弾（第43図4・7・8・9・10）とスナイドル銃の銃弾（第43図15）が出土している。4は弾頭が北側斜面を、7・8・15は弾頭が堡壘側を向いて出土している。9・10は、弾頭が堡壘・斜面どちら側でもない方向を向いて出土している。

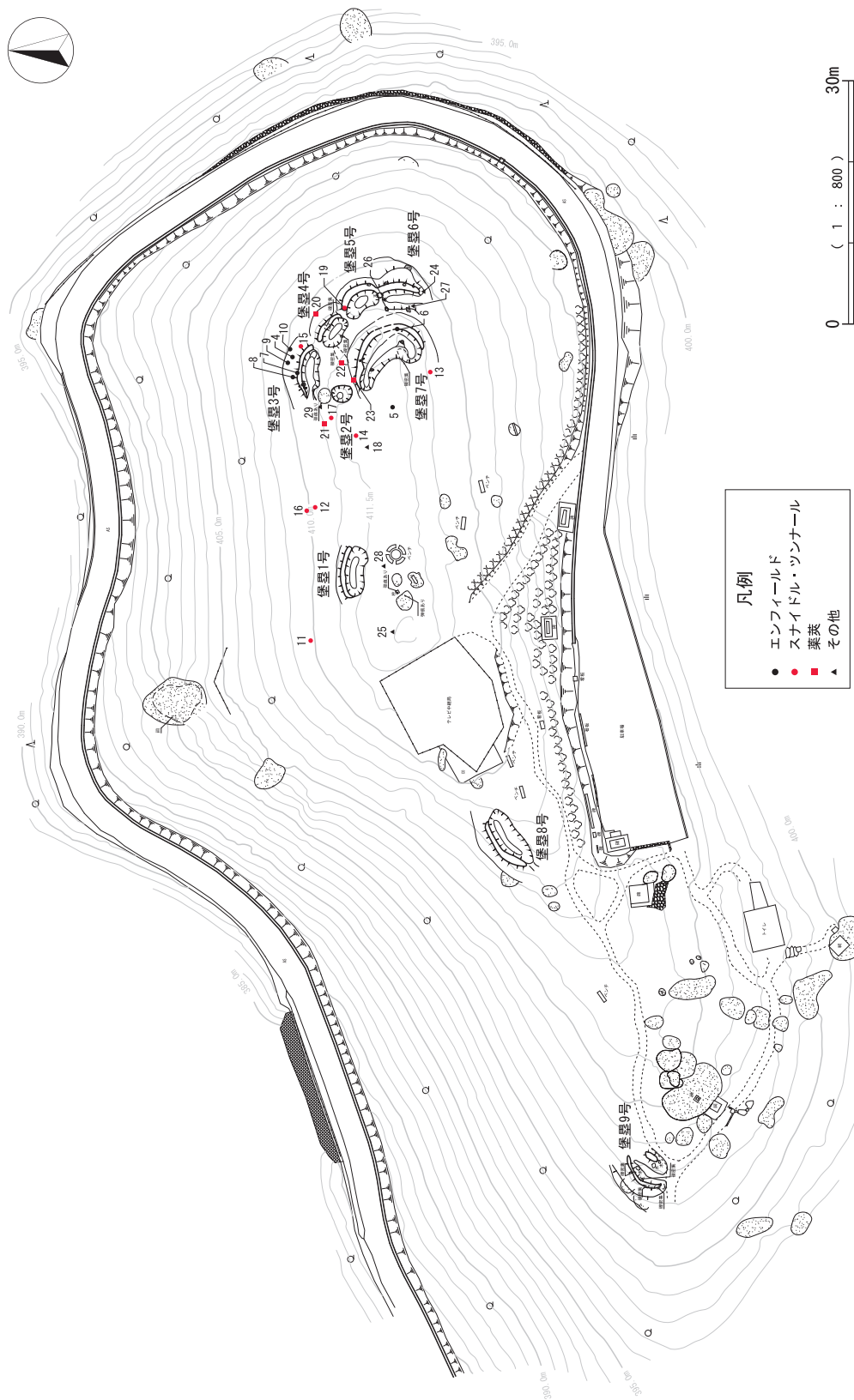
(4) 堡壘4号（第35図・37図）

半円形堡壘で、山頂北東側集中する6基の堡壘群の中では、堡壘5号とともに中央に位置する。主に北東斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は、全長410cm、最大幅464cmで、胸壁の厚み236cm、高さ40cmである。土坑は長楕円形を呈しており、深さ40cmである。全長よりも最大幅が長く、少しコンパクトな印象を受ける。

胸壁は等高線に沿って、傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は明らかに掘削をしており、その掘削土を利用して胸壁を一段盛り上げている。

堡壘4号は、堡壘5号と合わせて並列する形状だったため、両堡壘の間に長さ約290cm、幅50cmのトレンチを設定して、堡壘の掘削状況を確認した（第37図）。表土を取り除くと、褐色粘質土で輝石安山岩を含む非常に



第31図 高熊山激戦地跡 遺構配置図及び遺物出土状況図

固い地盤が現れ、4・5号の間を頂点とした2つの掘り込みを確認した。そのため、4号と5号は個別の堡塁と判断した。

胸壁と斜面の境から、スナイドル銃の薬莖（第43図20）が出土している。

（5） 堡塁5号（第36図）

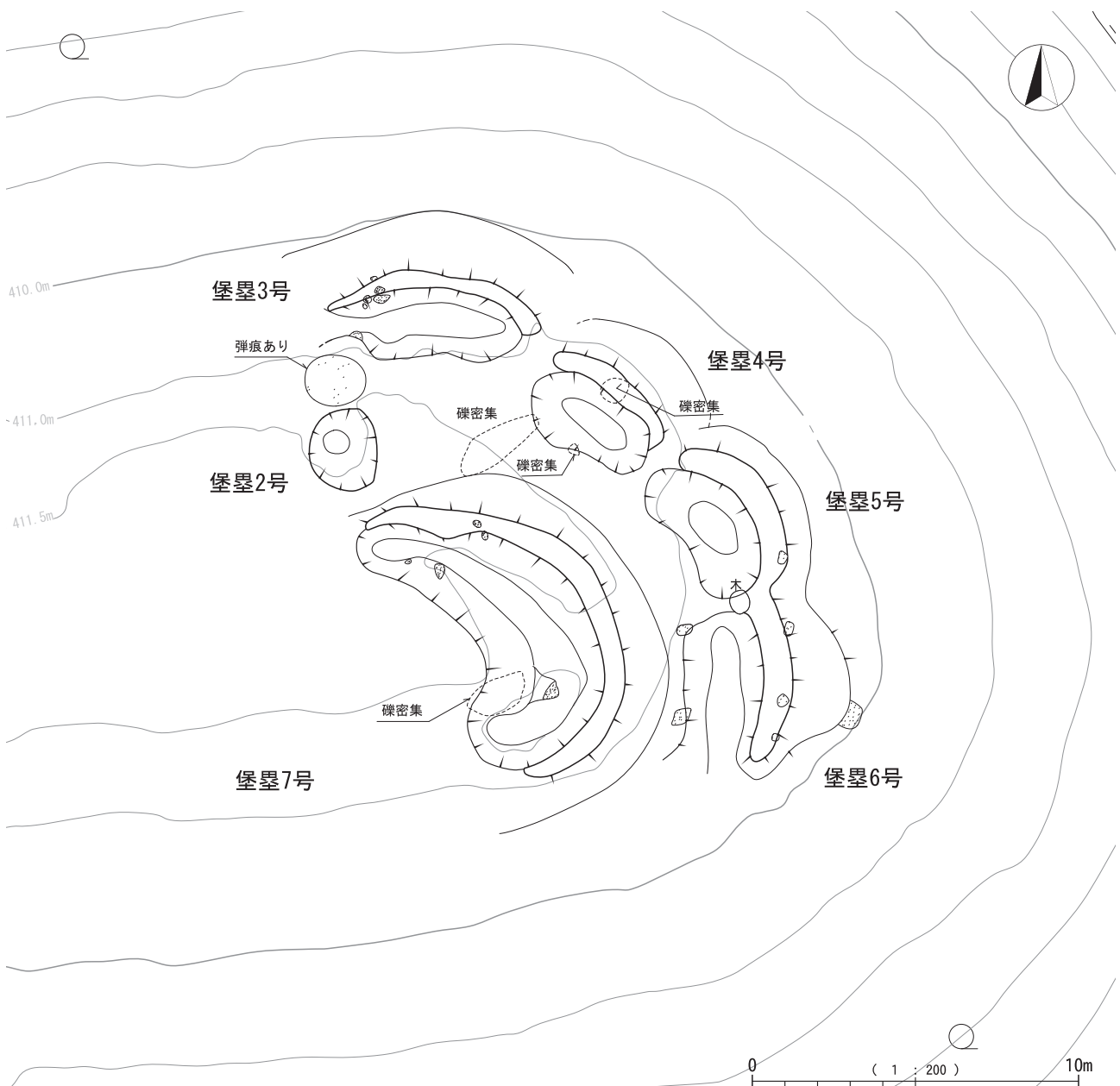
半円形堡塁で、山頂北東側に集中する6基の堡塁群の中では、堡塁4号とともに中央に位置する。主に東北東斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は、全長500cmで、最大幅420cmで、胸壁の厚み164cm、高さ64cmである。土坑は胸壁よりやや大きく、楕円形を呈しており、深さは64cmである。

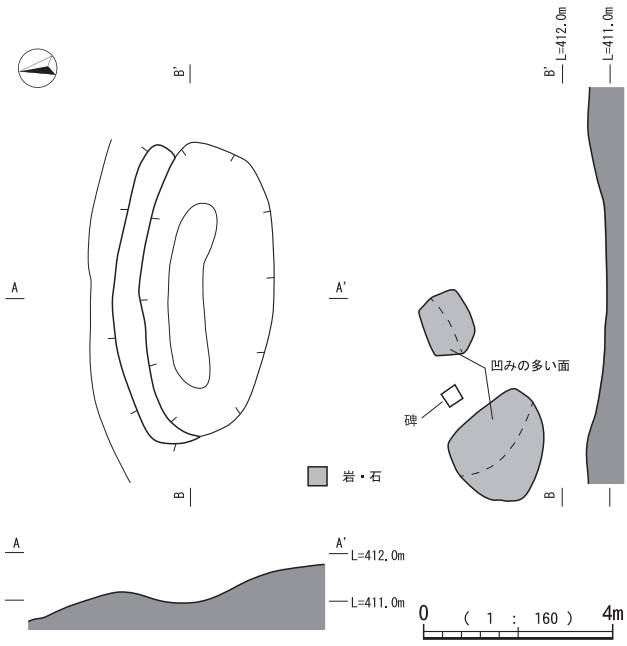
胸壁は等高線に沿って、傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は他の堡塁より深く掘削されており、胸壁も高くなっている。後背が平坦なため、深く掘削を行った可能性がある。

胸壁は堡塁6号と連結した構造である。土坑に関しては、堡塁6号との高低差があまりないため、1つの土坑の可能性もある。しかし、間に木があり、トレンチ調査を行うことができなかった。そのため、現況の状況から、別々の遺構（堡塁5号と6号）として取り扱うこととした。

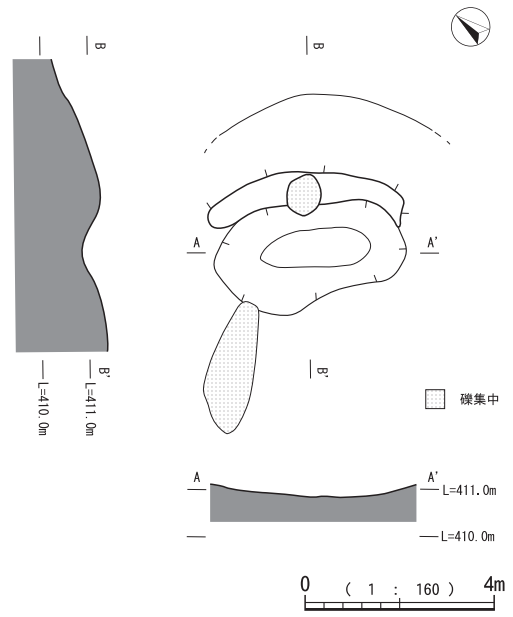
胸壁頂部付近からは、ツンナール銃の銃弾（第43図19）が弾頭を堡塁へ向けて、出土している。



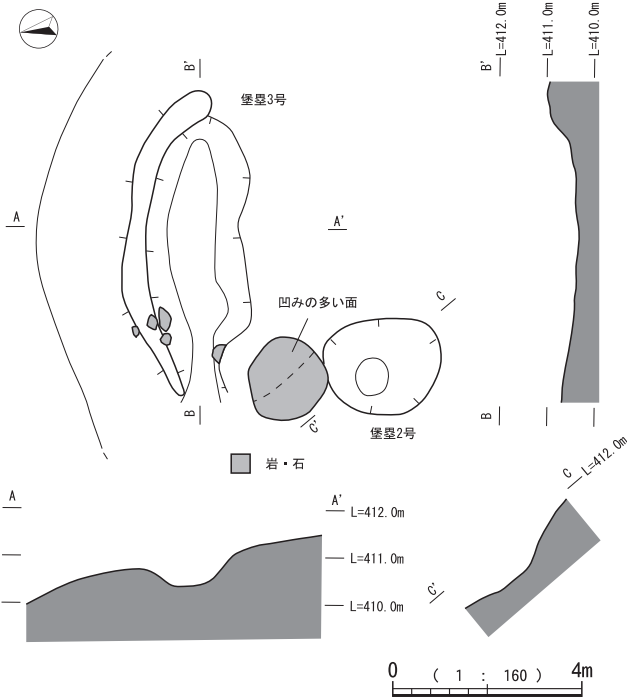
第32図 高熊山激戦地跡 堡塁2号～7号遺構配置図



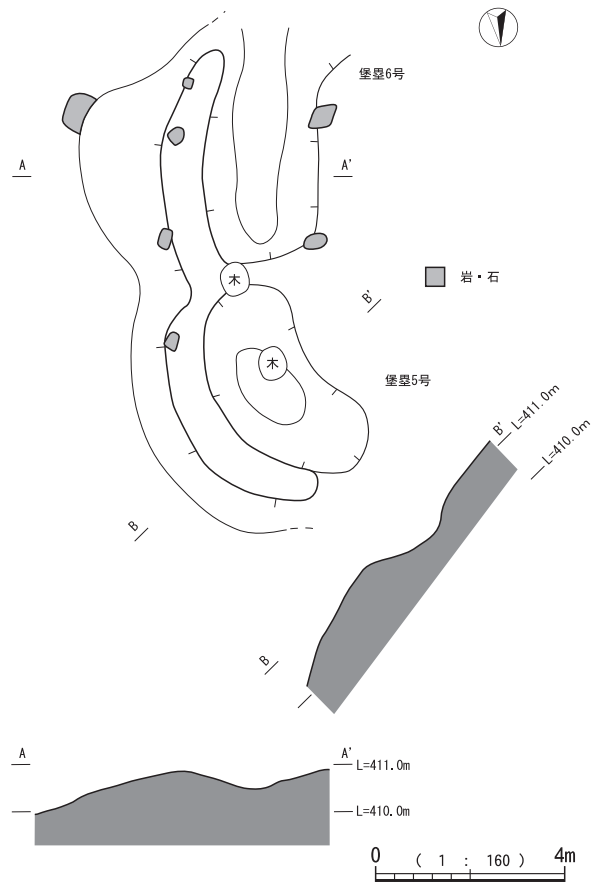
第33図 高熊山激戦地跡 堡壘1号実測図



第35図 高熊山激戦地跡 堡壘4号実測図



第34図 高熊山激戦地跡 堡壘2・3号実測図



第36図 高熊山激戦地跡 堡壘5・6号実測図